一行人馬正同前日即所以反影雅都光景不同前日

て急行せしめ、己れは瑪留及び傳令士官親兵百騎を從へ、雅典を指して進みけり、此日雅都に近づきし頃は、早や夜も初更過る時なりしが、不思議や都門に近づくに隨ひ、次第に都内物騒しく、叫喚咄喊の聲遙に城外に聞え、黑烟處々に漲り起りければ、諸人は眉を顰むる中に、巴氏は馬を駐て諸人に向ひ

厚於重恩誼者乃有是態非躁事變也

雅都不穩の形勢は、數日前より詳知せしが、斯く迄とは思はざりしに、今見る如きの有樣にては、必定大事變の發せしならん、此儘浮々都に入らば、如何なる奇禍を受けんも知れず、暫らく此地に留て、委く樣子を探るに若かずと語る中に、都門の方より續々と逃れ來る者多かりしかば、諸人は之を扯き留めて、事の始末を尋ね問ひ、始めて此夜亂民が公會を脅かして諸名士を捕へ、都内に横行する有樣を聞き得しかば、巴氏は大に氣を焦ち

愈々聞くが如くんば、我々に舊誼ある諸名士を助けざるべからず、我れ自ら赴き救はん

と云ひも終らず、馬の頭を振り向くれば、傳令士官等は遮り止め

左右應有是等言

一軍の將、一國の大臣として、齊武全國軍民の盛衰安危を負擔せらるゝ身を以て、亂民兇徒に向はるゝは、假令ひ恩人の爲めとは云へ、國を思はるゝこと輕きに似たり、彼所に見ゆる人家にて、暫時休息なし玉へ、我々一同打向て、力の限り諸氏を救ひ、必ず此處に伴ひ來らん、將軍心を勞し玉ふなと只管に諫めければ、巴氏も亦た胸を鎭め

在急劇之際而不忽大計是英雄政治家本色

然らば我は此處に待たん、諸君は八十餘騎を以て、先づ李氏法氏の家に赴け、若し後れなば悔ゆとも及ばじ、疾く々々彼地へ打立たれよ

と聞くより瑪留等は躍り勇み、驅針を馬腹に加へつゝ、皆一齊に馳せんとするとき、巴氏は諸人を呼び止め

假令ひ忍び難きことありとも、容易に人民と爭ふべからず、若し彼等と爭はば他日雅齊二國の交際に意外の妨げを生ずべし、努々之を忘るゝ勿れ、唯なるべく穩便に有志者を救ひ出さば、夫にて望は滿足なり、

と云へば、諸將は命を領し、畏りぬと答へつゝ、八十餘人は飛電の如く、都門

造次顛沛心常在玆

に向て疾驅せり、

巴氏は殘れる十餘騎と與に、路傍の人家に憩ひつゝ、都内の樣子は如何にぞや、若し諸名士を失て雅國の連結を誤らば、我が國運も夫迄ならん、昨は巍鐵嵒の險を棄て、今は雅國の同盟を失ふ、憂きこと多き世の中やと、獨り心に嘆ちつつ、待つこと凡そ三時餘にして、未だ何等の樣子も知れねば、又も殘れる數騎をして打立たしめんとしたる時、一行の人々は馬を飛せて歸り來り、間もなく進み入りければ、巴氏は之に打ち向ひ

巴　都内の模樣は如何にぞや

答　亂民議會を脅かし、大權彼等の手に歸したり

巴　李氏慈氏は如何にぞや

前回不知生死者即從齊人口裏說出妙在省筆不板

最妙在唯就遁字上打問

答　都内の騷動言語に絶し、委細のことは知れざれども、路人の語るを承るに、慈氏は會場の外に於て遂に暴民の爲めに虐殺せられ、李氏は法氏の宅より歸途又暴民に捕へられ、大石を以て腦蓋骨を碎かれ、果敢なき最後を遂げたる由

問　李氏の家は如何なりしぞ

答　同家に亂民進入し、家財を分取り、什具を毀ち、我々が同家に入りしときは、火を掛けんとする最中なりき

問　家孃は如何にして遁れしぞ

と問はれて皆々躊躇ふ中、瑪留は進み出で

天眞爛漫的人乃時作趣語

作者忽把場中第一美人斷送了其勇果何啻曲亭之死濱路

至性之言不須多却有大慟大哭之痛

家孃は我々救ひ得て次なる一間に伴ふたり、然れども巴君、此人は君と談話を爲さゞるべし

と云ひつゝ立て隣室を指し

彼所にこそ伴ふたれ

と云ひながら、立て隣室に赴けば、巴氏も續て室に入り、見れば人あり、床に仰臥し、覆衣を顏に蔽ふたり、巴氏は傍に立寄て、面上の覆衣を取り除くれば、贅ふ方なき令南にして容顏玉の如くなれども、淸眠堅く閉て花唇動かず、淡紅薔薇の色已に其の面を謝し去りしは、問はずして永眠不起の人と爲りしを知るべし、狂雨枝を折る花神何れの處にか宿せん、暴風樹を拔く芳魂尋るに由しなし、英雄の情緒果して亂るゝや亂れざるや巴氏は瑪留に打ち向ひ

此は如何にせし事なるか

と問へば瑪留

無念なりき巴君、今一足早やかりせば、救ふ手段もあるべかりしに、我々一

令南是弗宜死了的人瑪留是必當救得的人而竟然者兩不能政無統世國綱失常道理的作用全掃地而亡也亂民弄權柄之弊其可懼如是

一語無限神情恰好可以爲誄詞可以爲祭文韓愈

隊の者共が、李家に馳せ付けたる頃は、早や暴徒も過半は引き揚げ、跡に殘りし四五名が、奪ひ殘せし家財を索め、携へ去らんとする時なれば、之を捕へて樣子を問ふに、家人の過半は死傷して、家孃と覺しき一人の死骸は、庭に投げ捨てたりと答るゆゑ、遽てゝ其の地に至り見れば、果して家孃の遺骸あり、皆打寄て改るに、唯後腦に打ち創あるのみにて、別に左したる痛手も見えねど、早や事切れて救ふに由なし、昔し我々兩人を救ひ呉れたる其の人の、斯く成り果てたる有樣を、せめて君にも示さんと、衆士官に謀りつゝ、

弦迄齎らし來つるのみ、今一足早かりせば、救ふ手段のありたるに

と舊誼を思ひ起しつゝ、嘆息の外なかりけり、巴氏は暫し默然たりしが、近く

進んで令南の手を執り

君は我身を救ひしに、我身は君を救ひ得ず、赦し玉へ

と許りにて、唯つくゞゝと打眺め、悵然としてたゝずめども、今は笑はず語らざる、人の樣子を見るに附け、過ぎし日李氏を訪ひし時、我に向て歸日を問ひ、

祭十二郎轉覺絮絮無味痾傷悲惻使人不能卒讀

又滯留の事を問ひ、齊武に遊べと語りし時は、左も喜しくは見えたりしに、斯くも本意なき最後を遂げ、復た逢ふことのなきと知らば、彼の時に問ふべきことも多かりし、又言ふべきことも多かりしに、神ならぬ身と云ひながら、知らざりしことの悔しさよと、或は情緣の薄きを嘆じ、或は舊誼を報ひ得ざるを憾み、心緒亂れて糸の如くなれども、身は一軍に將として、衆士官の前に在れば、眼瞼一滴の涙を溢れしめず、唯其の默して愁然たるの哀容は、特に傷ましく見えしなるべし、衆士官等も其の情を察し、此時敢て一言を出だす者なく、皆憮然として控へ居たり、其の時巴氏は忽ち思ひ直せるにや、衆士官に打向ひ

雅都亂れて斯の如き上は、最早や此地に止るとも益なし、一刻も早く本軍に追ひ附き、國都の守を助くべし、諸君の中兩三名を煩さん、好きに遣骸を葬りて、然るべく處置し玉へ

と云へば、士官は其の意を了し、席を立んとしけるとき、瑪留は巴氏に向ひ、數千の兵を借り、自ら雅都に攻入て亂民を鏖にし、良民を安んじて恩人の怨み

假瑪留瀑起個宕波收住自不落莫否

則一行若干人馬不堪冷澹之至

を報ひんと騷ぎ立ちしが、巴氏は痛く之を戒め、今や斯國の大軍既に我が國都に押寄せんとす、將た何の暇有て他國の亂を顧るを得ん、若し幸ひにして運開け、國都の圍み解るの日あらば、雅國の亂を平げて、仇を亂民に報ずるの時節なきにもあらざるべしと、或は慰め或は戒め、其の乘馬を引き寄せつゝ、心の中にて令南の遺骸に別れを告げ、ゆらりと之に打ち乘りて、百餘の騎兵に圍まれつゝ、本軍に追附かんと、馬の足搔きを早やめにけり、今や內には國境の二險守りを失て、大軍都城に來り迫るあり、外には同志の諸名士亂黨の毒手に斃て、雅典同盟の望を斷ち、意中偕老を許るすの仙孃去て復た見る可らず、亡國の恐れ孤棲の悲み、今や湊て一身に在り、英雄の心中果して如何ぞや

鄭雲云無量惆悵使志士痛悵欲死悽然不欲終編

學海云本回爲巴氏退軍雅典、李、慈二氏殺死事跡若以退軍爲巴氏戰敗故豈不損其體面乃說別將失敗敵兵遮後萬不得已不是爲巴氏護短反是爲巴氏留地步

李、慈二氏見殺光景不正叙反從瑪留口裏叙來是省筆法令南之死亦在口裏描

出。若說未死。扶傷救來。殊無處安放。倉皇際如何了局。若說登時埋葬。或火化。不擡屍來。

蕙折蘭摧一段光景。殊屬寂寞。作者於此等處。細心商量。不漫下一筆。叙得妥帖。何等才情。又令南說是打撲死。不說是斬死。反似爲後來伏案妙絕。

鳴鶴云。設令巴氏射赴李氏之難。則興味自薄。故托事排巴氏。而用瑪留把玉碎香殘之慘狀。埋伏裏面。不陬寫出。而俄然於巴氏面前。演慘劇來。如此叙去。極有趣。老手老筆。

又云。可惜一個如花仙娘。倏然上天去。英雄亦應有失掌珠之恨。作者英斷有揮斧摧玉樹之想。歎服敬服。然覽者至此大失望。將曰作者剛腸奪去此名花。使才子情境寂寞。

又云。卿能救吾。吾不能救卿。一語無限悲哀。

第四回　孤城圍を受て糧食に困む　二商弗拉太に斯將を說く

老幼は兵器を繕ひ糧食を調し、壯丁は風雨を犯し晝夜を分たず、堞壁に嬰て敵の擧動に注目するあり、又城外には城都を遶圍して多數の「テント」を掛け

作者喜用倒叙法

連ね、大軍四方より迫近するは、之れぞ齊武が外に應援なく內に糧食乏き危急存亡の時にして、籠城の日數も早や三十餘日を經過せしと知られけり、斯軍は城を圍みつゝ、尙ほも兵を諸方に分て、方に熟せる田麥を掠め、且つ地方の各小都府を攻擊しけり、是の時齊武の外なる慕知の七邦玻璨亞、高朗忍、玲柯等は、尙ほ中立兩屬の姿にて、斯軍に敵すと云ふにもあらねば、辛くして抄掠の危難を免れたり（斯軍齊都を圍むことは防、遇、具氏の希臘史）

此時斯軍の本營にては、戰略會議を開きしと見へ、雷王自ら上位を占め、數十の將校其の左右に列席せり、暫くして雷王は、其の面前に昨年戍兵と與に齊武より遁れ來り、今此役に從ひし者共を呼出さしめ、之に向ひ

汝等が我國に遁れ來りしや、頻りに大兵を擧て本國齊武に攻入らんことを請ひ、大軍一たび城下に臨まば、舊時の政體を戀て新政に不滿を懷く者、必ず內より應じ、國人二派に分れて爭鬪を生じ、旬日を出でずして事乍ち定まらんと說きしに非ずや、我が國人の公會にて出征を議決せしも、一は汝等の言

荷無是一解
則堂堂十二
萬兵直興得
無謂之甚

を信ぜしが故なり、然るに孤城圍みを受ること今や既に三旬に垂んとす、然るに未だ一人の我軍に通ずるものなきのみか、益々死戰を決するの有樣あり、這は汝等が見込の違ひしか、既往のことは是非もなし、是後尙ほも内應する者なきが如きの國情ならは、我も聊か意見あり、匿さず汝等の見る所を述べよ、斯く言へばとて、汝等が既往の詐言を責るにあらず、我が後來の戰略に、聊か參考と爲さんが爲めなり

と詞を柔らげ、問ひかけられしも、此者共の唯頭を垂れ、恐れ入りたる體なるは此後とても、敵に内應の者あるべからざる國情なるを想像するに足りければ、雷王は乃ち彼等を退かしめ、やがて諸將に向ひ

我が國人も始めより、彼等の言を信ずるのみにはあらねども、新政回復の日淺く、齊武の人心定らざるに乘じ、大軍之に臨みなば、之を壓すること掌を覆へすより易すかるべく思ひし故、唯大兵を神速に擧るを主として、滯軍長圍の糧食を餒へざるは、諸將の知る所なり、然るに曩きには巍鐵嵩の險に

三十餘日を費し、國都の圍も亦た早や三旬の長きに至らんとす、本國を發せし日より起算すれば、已に八十餘日に上れり、又城中の糧食とて甚だ多しとは思はれねど、未だ渴乏の景色も見へず、益々防守を嚴にして、五六回の小戰にも巧に善く戰ふたり、今若し城壁に向て全軍の總攻擊を試みなば、或は本意を達すべしとも味方の大半を失はざる可らず、希臘全土に一の同盟應援なき孤身孑立の當國なれば、早晩覆滅を免れざるに、今一旦の勝利を貪り、夫が爲めに壯勇なる我が軍人の多衆を損するは、得策とも思はれねば、此役は一と先づ兵を引き揚げて盛暑の候を過ごし、更に秋涼を待て再び大兵を擧げ、多く糧食を用意して此孤城を長圍せば、如何に城中糧食ありとも、周圍數里に及ばざる一城のことなれば、假令兵糧の山を築くとも、後へに後援の兵なき故餓に迫るに至るべし、然れは當年の秋を以て、必ず此國を滅するを期し、此役は敵國を抄掠し、去歲の不遜の擧動を懲らせしを以て滿足し、一先づ凱旋せんと思ふなり、諸將の意見如何にぞや（齊武の亡命者の言が實

に反することは具氏の希臘史）

と述るを聞き、諸將は素より糧食の乏しきを憂ふるの時なれば、皆々同意を表しけり、又城中にては、外に雅國の同盟を失ひ、内に糧食の欠乏を覺ゆ、若し此儘にて數月を經なば、空く餓死するの外なければ、寧ろ城を出て決戰し、圍を潰して雅典或は他の中立國に走て以て回復を謀らんか、將た城を枕に戰亡せんかと、安き心も無かりし折りから、一日早曉遙に敵軍を望めば、昨日迄白雲の靉靆くが如く、城外一面に掛け連ねたる大軍の張幕は、取り去られて隻影を見ず、唯僅に一團の兵馬の東南の路に殘るが如きは、之ぞ後殿の兵なるべく、虛實の程は知れざれども、敵軍城下より引去りたるに相違なければ、之を見るより城中は、皆一齊に讙呼の聲を放ち、人々恰も蘇生の思ひをなしにける、齊都の城壁は堅固ならざるにあらねども、儲持の糧食に限りあれば、敵の長圍を憂へざるものなかりしに、今斯く圍の解けたるは、之れ唯天の助けと覺えたり、然れども彼の昔者トロイの十年の長圍の如く、大軍引き退きしと見

斯王機略可愛可畏

せ掛けて、其夜不意に取て返し、城兵の怠りを襲ふの企てには非ざるかと、城中の諸將は猶ほも圍中に在るが如く、嚴に諸兵を堞壁に配り、勇具貞、多莫具の二將をして、各千餘の騎兵を率ひ、退く敵を追躡して、之を惱さしめんとせしが、敵は戎事に長ずる斯國の將卒なれば、退軍殊に整然として、其の輜重を前軍となし、騎兵を以て後殿とし、大軍除々として東南の境を指し、若し齊軍の來るを見ば、之を機會に引返して戰を開かんとするの有樣なれば、二千の追騎は、唯時々敵の後騎と小戰を爲すのみにて、墓々敷き事もなかりけり（斯王兵を旋すことは遇氏具氏）

慕知の域内に在て、北は境を齊武に接し、東は雅典に連る弗拉太の小邦は、舊來斯國の同盟なれば、齊國の境を出でし後、雷王は先づ此地に全軍を屯し、四萬人を留て此地に駐屯せしめ、副將仁洪量を以て之に將とし、一は兵威を以て雅典を脅かし、齊武との同盟を妨げしめ、一は隙に乘じて、兵を齊境に進め、今秋に至る迄、齊人をして奔命に疲れしめんと企てたり、斯く巧に後事を處す

るの後、自ら餘兵八萬を統て本國にぞ歸りける、然るに本國にては、兼てより此一擧に齊國を滅せんと思ひ居たりしことなれば、國人中には不滿を鳴らし、雷王を非難するものもありにける、是に於て亞王は又國人に說き、勇猛の名ある驍將蘇方度をして仁洪量に代り、弗拉太の屯軍を統率せしめ、暗に本國より其の掛け引きを指揮したり、

偖又雅典の都に於ては、亂民等は過る日公會を脅し、諸名士を刑して其心を快くし、慈氏泰氏をば會場外に虐殺し、李氏法氏等の如き重もなる純正黨の名士をば、一人も餘まさず各處に虐殺しければ、生き殘れる人々は、西北齊武に走らんと欲したるも、同都は今方に圍城の中に在れば、止むを得ずして、地中海中の諸島に遁竄する者も尠からざりき、亂黨は暴橫の手段を以て諸名士を除き得たる後、遂に村邑小區の公會に列席するものは、公費を以て日當を給するの議案を可決せしが、是より公會に列する者は、安逸に衣食を得るの道あるが故に、人民皆勞苦を要する職業を營む者なく、中等以上の富民の財を括し

て是の公費に充て、若し聊にても不滿を唱る者ありと聞けば、群を爲し伍を結で其家を脅し、橫行狼藉至らざる所なく、又斯、齊の戰にて世上の騷しきを口實とし、大小の公會は皆永久會議の旨を布告し、其議場を閉ることなく、亂民は衣食を得て、月々政論のみを事としける、斯の如き有樣なれば、公私の會場は、唯亂民等に脅迫を以て議案を左右せらるゝに外ならず、加ふるに各地の亂黨は村邑小區會に迫り、常に人民總代の名を以て、各地の代議士たる五百名會員の言論を指圖し、苟も其指圖に違て一個の見込を議場に吐く者あれば、暴力を以て百方之を窘めければ、代議會員は唯其の身體を議場に出だすのみにて、毫も言論の自由を得ず、斯る有樣なれば、中央公會五百名會共、今は唯亂黨の暴橫を行ふ器械とぞ變じける、又亂徒等が兼てより都內に設けたる會同館には、毎度各部の亂黨の重もなる者共湊集して百事を議し、多數を以て之を決し、其決したる議案をば、公會或は五百名會に提出しければ、亂民の運動を支配する中心は此の會同館にして、不規則ながらも、此の會議が亂民の擧動を支

是故亂緒一放解則愈擾愈棼終至自非賴斬刀斬之策不可整理一語評得破的

配するの有樣は、恰も人體に散布せる千百條の神經が、一腦を以て其の中心と爲すが如くなりき

初めの内こそ、亂黨等も助けを得んが爲めに、專制曖昧の二黨に結びたれ、其已に勢ひを得て純正黨を覆し得るに及では、益々右の二黨を凌辱し、或は脅迫を以て議場を制し、或は暴民を煽動して家宅を圍み、亡狀横虐言語に絶すれども、若し之に抵抗せば、又忽ち純正黨の如き慘毒なる運命の其頭上に墜來らんとする有樣なれば、今は二黨の人々も耐へ難く、相率て他國に遁竄し、專制黨は多く斯國に走り、曖昧黨は沿海の諸邦に遁れて、僅に其の身を全ふせり、最も暴激を極むるの政論は、又最も暴激の亂民に愛せらるゝ者にて、亂黨の領袖たる平邪は、其始め純正の諸名士を傾るの目的を達するの手段として、人民を動かすが爲めに、公費議案或は隨意集會の議案等を主張したれども、今や已に純正專制曖昧の三黨を壓倒して八九分迄其の本意を達しければ、最早や永く社會をして此亂麻の如き紛亂の狀態に安ぜしむ可らずと思慮せしにや、是頃に

寫出妄想政治家讒論如畫

ては漸く亂民を制抑し、公費支給永久會議隨意集會の三法に多少の改革を加へんと慮りしが、之れぞ其の勢力を黨類の中に失ふの緒となりにける此時亂黨の會同館にて、最も勢力を得たる者は、柳奎太、保利登、韋黃良等數名にして、其の亂民に勢力あるは、其の說の最も暴激なるが爲めなり、而て此の數名の中には、或は、

一國に法律を置き、腕力を以て他人を虐するを禁じ、各天賦の體力を均一ならしむる以上は又各人智力の働きをも均一にせざるの理なし、故に智力の不平均よりして生ずる財產をも平等ならしめざるべからず

と主張するあり、或は又

田制を定め、不動產を均一にし、漸を以て平均を動產に迄も及ぼすべし

と主唱するあり、又或は

現時雅典の行政部は選擧代議の仕組なれども、密謀姦策を以て撰擧を得るものあれば、此弊を除かんには、然るべきもの數萬人を公選し置き、抽籤を以

弄詭論猶弄火弗戢適自焚耳

て其内より百餘名の執務者を定めざる可らず

と迄論ずるに至りしが、平心虚氣を以て思考すれば、瞬時にして其の行はれ難きを知るべき詭論も、人心の狂熱するに當ては、採納を得る者にや、平邪の説に較ぶれば尚ほ一層暴激なる此等の論は、尚ほ一層多數亂民の望に適ひ、柳奎太、保利登、韋黄良等の權力は、益々會同館に重く、今は早や平邪を壓倒して之に代らん勢ひとぞなりにける、敵黨三派既に斃れて、今や不規律なる亂黨が大權を執るに當り、其の領袖たる者如何ぞ相親睦するを得んや、平邪は柳、保、韋の數名と權力を爭ひしが、平邪は遂に「密に人を弗拉太の斯軍に遣はし、其助けを求めんと欲したり」と誣告せられ、之を公會に辯明すれども、農民が脅嚇の中に於て遂に有罪と議決せられ、直に幽暗なる牢獄に投人せられけり、是れより以後は、亂黨暴横にして益々規律なく、益々暴激なる極端の平等均一論を公會に議決し、漸く其の實行を試みんとし、遂に人民財産を公衙に引上げんと欲するに至りければ、今は良民等も其の苛虐に耐へ兼ね、富豪の人民は、

亂民當路執權皆莫非蹈轍是

或は斯國に走り、或は疆上なる斯軍に投じ、其他各地に奔竄する者日夜續々として引きも切らず、是に於て、亂民は又嚴制を設て他國に走る者を止めしかば、遁れ後れたる者は、恨を呑み胸を擦すり、哀れ好機會の來れかし、此の亂黨等を壓倒して日頃の怨みを報ぜんものと互に拳を撫すれども、不規則ながら亂黨も、なか〳〵百事に油斷なく、人民の防制には尤も手配り行き屆きたれば、良民等は事を擧るの機會を得ず、空く無念を忍び居たりける、凡そ一たび惡事を行ふときは、之を蔽ひ濟はんが爲めに、又他の惡事を行はざる可らざるは世上の通則なれば、亂黨等も一たび國人に怨みを結びしより、今は已に虎騎の勢ひと爲り、一たび喞轡を失するに及ばゞ、乍ち人民の爲めに反噬の患に陷らんことを慮り、唯々暴威を以て他人を制服するの好手段となし、表面には常に人民多數の意向を以て事を處するの姿を裝へども、多數の同意を得るの術は、例に依て唯脅迫を用るのみ、眞に多數の民意を行ふにはあらざりき、且つ此頃は臨時裁判委員を公會中より選擧し、亂黨を以て之に充て、苟も新政に服

せざる者あれば、之を捕へて之を刑し、又聊にても亂黨に抗するものあれば亂民をして隊を組み伍をなし、其の居宅を脅かさしめ、公私與に專横の手段を用ゐければ、無賴の暴民等は益々時を得て閭里を横行し、亂暴狼藉至らざる所なかりけり、故に嚴制するにも拘らず、密に他國に走る者日々其數を增加せり、然るに人心は樣々なる者にて、或は又此度の騷亂に乘じて其の技倆を現はさんと、他國より國都に歸り來る者も少からざりしが、玆に他國より亂を聞て歸り來りし人民中に、二人の名士こそあれ、其一人は當國の名士にして、一たび政權を握り、活潑なる政治家の稱を得て國人に敬愛を受けたる彼の有名なりしコンノンの一子にて、年齒尙ほ三十五六、其名を智猛周と云ふ、性濶達にして大略あり、好で士を愛しければ士皆之に歸せり、此人や功名を天下に立てんと欲するの志盛んなりけるが、巴本涅斯の戰の後、雅典は平穩無事にして其志を達するの機會なきを恨み、七八年前より遠く埃及の地に遊び、埃王の爲に屬國制服の委托を蒙り、近年迄其兵に將として多少の軍功を建てたりしが、今や

正是君子遵養時晦之時也

接法敏妙

本國の人民水火の苦を受くると聞き、其心中に天晴れ大功を立てんことを誓ひ、此時國都に歸り來りしなり、又今一人は其の名を可武利と云ふ、性豪爽にして膽略あり、前年當國に武功を立て、已に一たび其の名を著はせしが、本國の平和にして功名を立るに足らざるを思ひ、八九年前より比西亞に遊で國王に寵せられ、其の一軍に將として、小亞細亞の地に戰功を立てたりき、然るに今や其國難の大なるを聞くに及て、此時又本國に歸り來れり、此二人は其出處已に世上に著はるゝこと此の如きが故に、歸り來りし始めより、大に衆民の望を得たりしが、其の眞意如何は知れざれども、其擧動は一に亂黨に左袒するが如くに見へにける、

是時斯將蘇方度は、弗拉太の都に在て四萬の精兵を要し、東は雅典を壓し、北は齊武を窺ひしが、此人は音に聞へたる驍將にて、功名の心も亦甚だ盛なり、先將仁洪量に代りて此地に來りし以來、如何にせば大功を立て、內は亞王の知遇に報ひ、外は國人の愛敬を得べきや、或は隙を窺て不意に齊都を襲はんか、

叟不遊千里
而來將以有
成我功名乎

或は兵威を以て雅典に逼り之をして自國に同盟せしめんかと、種々に焦心苦慮しけり、然るに此時雅典より國亂を避けて其の軍中に來り投ずる者續々として絶えず、良民富豪の遁れ來て謁を請ひ、雅都の亂を訴るものも甚だ多かりけるが、一日二名の豪商又雅典より軍營に來り、面謁を求むる者あり、是に於て蘇方度は例の如く之を延き見るに、一人は老齢五十餘歳にして鬚髪與に白く、一人は尚ほ三十前後なるべく容貌特に清秀なり、二人與に衣服華麗にして應對動作賤しからず見へにけり、蘇將軍は二人に向ひ

蘇　足下等の雅都を去りしは何れの日ぞや

商　數日前にて候ふなり

蘇　其時國都は如何なりしぞ

一答既挑撥
將軍使不堪
技癢

蘇方度忍住
不得自先吐
個求字是焦
燥之極亦飢
渴之極

待將軍吐個
求字而方纔
徐徐說出所
以求將軍來
二賈甚有
略談

商　左れば候ふ、亂黨益々猖獗を極めて、秩序紊れ紀綱壞れ、今は無政府も同樣にて、神人與に怨怒せり

蘇　足下我に向て求めんと欲する所は何事ぞ

商　我々の此地に來りしは、一たび將軍に謁を請ひ、我が國人を水火の中より救出さんと欲してなり、現時我國の亂黨等は、常に人民多數の意を以て事を行ふと稱すれども、其實は唯小數なる亂民暴徒の國事を私するに外ならず、故に良民たる者は、一人として生ながら彼等の肉を啖はんことを欲せざる者なけれども、如何せん事を擧るの機會なく、空く時節の至らざるを慨くのみ、若し今數萬の兵を以て國都に進入する者あらば、全國の良民招かずして子來し、力を協て難を鎭し、恩を感じて威に懷き、永く之と同盟を表せんことは

以上說仁義

鏡に懸けて見るよりも明なり、今や將軍幸に大兵を擁して此地に屯駐せらる、是れ天の雅民に福する所なり、此地より雅典迄は急行僅に一日程に過ぎず、將軍一たび玉趾を擧て急に雅典の備なきに臨まれなば、一朝にして事輙ち定らん、且つ雅都に連る彼留の港都は當時方に守兵を撤し居れり、是れ天の將軍をして我が國人を安ぜしむるのみ、熟々古來の事迹を案ずるに、斯、雅兩國は古より希臘の二强國と稱せられ肩を比するの邦にして斯波多の雅典を制服し得たるは、幾千年中唯巴本涅斯の一役あるのみ、而して此の大勳は、當時の斯將雷參度に歸し、其の英名は永く後世千歲に傳へしに候はずや、今將軍一たび足を擧て雅都の大亂を定め、雅人をして其の中心實に斯國の恩に感ぜしめば、斯將の大勳夫れ將た誰れか將軍の右に出る者あらん、昔し雷參度は武力を以て雅都を服し、將軍は仁義を以て之を服す、將軍の功業遠く雷氏に優らざらんや、果して然らば、將軍の威名獨り今日に轟くのみならず、必ず永く千歲に傳ふべし、獨り敵國を服するの武功あるのみならず、不幸の

以上說功名

却把將軍功名撤去一邊只得困願哀請沒些說客蘇方度樣子豈得不首肯一部戰國策無是絕妙好辭無是明快捷語

譬喩精妙似聖賢語

人類を保全するの德澤を遺こさん、世に機會と云へる怪獸あり、將軍之を知り賜ふや、此獸や進退迅疾にして皮膚滑々たるが故に、何人と雖ども容易に之を捕ふること能はず、然れども唯其の前額に毛髮あり、垂て地に至る故に、此獸の人に向て進み來るときに當ては、三尺の童子と雖ども、尙ほ其の額髮を攫握して容易に之を捕へ得べし、若し其の一旦人に背て遁れ走るに及ては、如何なる人と雖ども亦た決して之を追ひ捕る事能はず、今や雅典を定るの機會は、其の額髮を垂れ徐々として將軍に向て進み來れり、將軍之を捕ること容易なるのみ、若し一旦背き走るに至らば、大勳偉業亦た之と與に去らん、將軍悔ゆとも及ばざるべし、今我々兩人は唯將軍の功名を冀ひ、是策を建るにあらず、假令ひ斯國の屬邦と爲るとも、早く今日の大亂を鎭して、雅國の兄弟を塗炭の中に救はんと欲してなり、外は將軍の爲に計り、內は雅民の爲に計るに、是の畫策は百利有て一害あることなし、仰ぎ願くは將軍心を決し、彼留の守兵なき數日の機會を失ひ玉ふなかれ（二商蘇方度に說くは

勢氏遇氏）

と道理を盡して哀訴せしかば、蘇將軍は始終唯默然として首を垂れ、思案に沈みて見へにけり、此時二人の商人は、又雅人を安ずるの處置を願ふが爲にとて、五千「ジューカス」の金員を進獻しければ、蘇氏は之を受け納めて二人に向ひ（二商金を獻ずることは勢氏遇氏）

足下等に限らず、我に向て是の議を說くもの頃日來、絕ることなし、然れども聊か思ふ旨ありて、未だ心に決せざるなり、然れども今聞きたる足下等の言の如く利害を明にせし者はあらざりき、我も熟考すべければ足下等は休息せよ

一句從將軍口裏贊

と述べ終りて兩人を退かしめ、獨り一室に入りけるが、今來りし二人の言は、內外の形勢を說て毫末も漏らすことなく、成敗の數瞭然として之を掌に指すが如くなりしは、如何にも賴母しき者共なり、我身は先將軍仁氏に代りて此所に來りし以來、數十日を經たれども未だ目覺しき擧動をなさず、若し此儘にて空

果然陷了窠中

しく過ぎ行かば、一は國人に對し、一は亞王に對して面目を失ふこと少からず、若かず策を此に定め、先づ使者を雅典に遣はして亂黨の同盟を促し、彼等の心を忘らしめんには、此地より雅都までは行程十餘里に過ぎざれば、夜に乘じて兵を提げ、俄に進て國都を奪はゞ大勳を立てんこと容易なるべし、今や天實に我をして功名を成さしむると覺へたり、いざや直に決行せんと、心中に思ひ定めては片時も猶豫なし難く、直に韋孟九と云へる大膽なる一將を選で使者とし、之を雅都に遣はしけり（韋孟九使ることは具氏）

二賈竟留不凡

又來謁せる二名の商人は、國內に立返て密に謀るべきことありとて、此夜別れを蘇將軍に告げ、弗拉太を出立せしが、二人は定めて東のかた雅國に歸るならんと思ひの外、雅境迄至りしとき、俄に道を轉じて北に向ひ、齊武を指して進みけり、必竟此の兩人は何者ぞ、是れ則ち別人ならず、其の年若きは、前きに巴氏の家宰にして民政回復に力を盡し、今は擧げられて一隊の裨將と爲り居る禮溫にして、總統官勢氏の命を喞み、嘗て雅典にて相識り、今國難を避て齊武

禮溫是前篇極有作用的人但許多好漢在前作者

揮之故本回特地點出以酬了其勞細心商量不違分寸

に遁れ來りたる雅國の一豪商と謀り、斯將蘇氏をして雅都を襲はしめ、以て雅、斯兩國の間を割かんとの策なりしとは、後にぞ人に知られける（齊人商賈に紛裝して斯將軍を誘誑することは勢氏遇氏）

蘇將軍は次日令を軍中に下して急に軍裝を整へしめ、將に齊武の境上に侵入せんとする旨を宣言せり、斯くて軍備全く整ひ、夜も早く初更の頃に至りければ、乃ち進軍を令せしが、途中より俄に道を轉じて、大膽にも中立を布告する雅典の國都に連りし彼留の港に向ひけり、之を見るより、副將保耳は大に驚て蘇氏の行を難じ、痛く之を爭ひければ、蘇氏は馬上に眼を怒らして劍を按じ事既に此に至る、今更ら爭ふとも及ぶべからず

と聲を放て叱しけれども、保耳は固く執て隨はず、己の部下なる一萬餘の兵を率ひ、舊路に歸らんと迄主張し、軍中俄に動搖しければ、他の諸將は大に憂ひ、兩將の間に立入て漸く之を和解しければ、副將保耳も止むを得ず、今は蘇氏の意に隨ひ、全軍再び雅典を指して進みけり、然れども此混雜に痛く時間を費

しければ、思ひの外に里程捗らず、且つは短き夏の夜の東雲早く白らみけるが、尙ほ雅典の國都よりは、五六里隔る距離なりけり、又雅典は兼てより局外中立を布告し居たれば、斯、齊二國に兵仗をも貸賣せず、又二國の兵の其境內に戰ふことをも許さず、是等の諸事取り押への爲め、僅に若干の兵を發して、是迄其の境上を守らしめ、其他には唯若干の守城兵あるのみなりしに、此日拂曉斯軍が不意に國都に侵入し來るの報知を得しより、全都の人民相愕貽して戰慄し、直に警鐘を鳴して壯丁を集め、之をして警備軍と合併し、不充分ながらも國都を守らしめんと狼狽せり、斯將蘇氏は夜早く明けて軍機の全く齟齬せしを悔ゐ、且つ雅典國都の俄に守備を修るの報知を得たりしかば、今は進むも益なしと思考せしにや、忽ち其全軍を引返して弗拉太の都を指し、徐々として歸り去りける（夜明けて事を果さゞるは遇、具、勢氏）

雅典の亂黨等は、己等を圖る者の便と爲らんことを恐れ、萬止むを得ざるにあらざれば、今迄なるべく兵團を募らざりしも、今は意外なる斯軍が不義の擧動

二賈說斯將而斯將境斯將境雅境雅智武兵之智武而之復來往之健即人之運也筆極墨恣奇極妙縱

解兵圈蓋用羅馬史該撒傳典故却添下回牧童吹笛一段點鐵成金作個絕奇話頭意匠

に恐怖し、其の國都を襲ひ奪はれざりし天幸を喜びつゝも、深く向後に懼を懷き、乃ち大軍を募て二軍に分ち、之をして弗拉太と對する近彊に屯せしめ、以て斯軍に備へんと決議せり、然に此時門地あり才略あり名望ある人々は、皆な多く亂黨の毒手に斃れ、或は他邦に遁竄して總督の任に當るべきもの少なければ、衆望の歸する所に從ひ、遂に智猛周を以て一軍に將たらしめ、又可武利を以て一軍を率ひしむる事に定めければ、兩將は日ならず部下の兵を點檢し、各々道を分て弗拉太の彊上に進發しけり、又亂黨は常に人心の己等に離るゝを憂ひ居たる折りなれば、若しや軍隊兵士の力を假て、己等を壓倒するものあらんかと、危ぶみ慮るの心特に深きを加へ、遂に玆に一の奇異なる法律を定むるに至れり、此の法律に依れば、雅典の國都を離るゝこと四里餘の地に於て、都を環らし、地形を相して解兵の圈線を畫し、國都を以て其の中央とせる是の圈線以内には、何人と雖も編制せる軍隊を率ることを許さず、如何なる軍隊と雖も、此の解兵線内に於ては之を解散せざるを得ず、五百名會公會の命令あ

るにあらざれば、決して此の線内に在て軍團を組立て、或は之を率るを許さず、若し之を犯すものあれば逆謀者と見做し、之を死刑に處すべき旨を布告しけり、放に此度智氏武氏の兩人を彊上に遣すに及でも、亦た都内に於て大軍を整列し、之を率るを許さず、唯解兵線外に於て軍團を組立て、彊上に向て出立せしめけり、且つ五百名會の議員たる亂黨の内より、腹心の者四名を選拔して軍監と爲し、境上の二軍に從て軍中の百事に注意せしめける、亂黨の手配りこそ最と嚴密に見へにけれ、

鋤雲云。天定克人。玆始見端倪。

學海云。本回爲斯國退軍事由。及雅典邪黨跋扈光景。雷將軍英雄。不是誇勝衒勇的孟浪男子。與齊武諸豪傑的是對手。說糧竭退軍。不說戰敗還國。是十分大敵。遭這大敵。始能見諸人伎倆。譬諸畫美人圖。描月描樓臺屏障。然後逼出一箇絕麗尤物來。乃爾妙絕。

平邪雖創難首唱。只是麁暴的漢子。到底不做一事。安放一邊去。反爲省事。一黨敗。一

黨興。紛拏喧豗。亂賊世界。寫得奇絶。

蘇將軍欲襲雅典一節。不過逼出智、武二英雄。故約略叙去。不要聲張。蘇將軍不必不諳事機。作者特借以爲二英雄蹈脚子。覽者勿爲作者瞞過去也。

鳴鶴云。曖昧中立之徒。欲假手於激徒以除正人。濟其私。而及其漸達志。大權輙歸激徒。而已隨受其弊。世間無獨立之操。碌々因人爲事者。往々有如是眞可笑哉。

又云。平邪以人畜虎。及虎脫檻。身亦爲之食。有因有果。叙事極分明。

又云。雅典大賈說斯國將軍。有頗戰國策士之風。如蘇將軍納其說而侵雅典。史記世家中往々有類此。文勢亦自大史公來。

目前光景忽地一變。劍色鎧光紛鬧天地更出現個山綠雲白清

第五回

古柏村に將軍隱士を訪ふ
涇比川に牧童短笛を吹く

此地は靜閑なる一村落にて、雅都を距ること七里許り、前には廣原渺々として小丘處々に起伏し、後には峯巒迤邐として崩濤の如く、山の麓には栢林翠色を帶て鬱茂し、樹間には人家の處々に散點するあり、夏の初めのことなれば、

氣候薄暖にして、草木の新芽は時々軟風に輕動し、野禽隨意に嬌喉を弄す、此間に於て七八名の農夫或は歌ひ或は語り、耕耘に餘念なかりけり、金衣玉食、駟馬を馳せ層樓に住み、榮耀榮華に誇る身も、旦には刑場の露と消へ、夕には獄裡の鬼と爲る、權を爭ひ威を貪り、互に爭鬪傷害する國都の亂に較ぶれば、此地は無爲の別乾坤、最と樂くぞ見へにける

平世界來快絶韻絶可喜可歌

此時田舍には見馴れざる、十餘騎の士人あり、此の村落を指して來りしが、其の人々の威容儼然として、乘たる馬の逞ましきは、何れも軍官將校なるべく、又其の前頭に進みたる一人の、年齡三十五六にして、深眼漆瞳風采特に卓然たるは、一行の首將と知られたり、然れども其の戎衣を着けず、皆々平服を穿ちしは、問はずして彼等の微行するを察するに足れり、此一行は村落を過て頻に民家を徘徊し、何者をか尋る如き有樣なりしが、首將は又馬を止めて路傍なる農夫に向ひ、何事をか尋ね問ひしが、つく〻〻と農夫の顏を打眺め、忽ち馬より飛び下りて恭しく禮を施こし

此何人用筆奇幻之極

妙在一人叙姓名一人不叙姓名

君は姓名を包まるゝとも、其の童顔に見覺へあれば疾く其の人と察したり、難を避けらるゝ身の上には無理ならぬ事ながら、包まず實を告げ賜へ、君は見忘れ玉ひしかは知らざれども、我こそは七八年前他國に功名を求めんとて亞弗利加の地に出遊し、久く故國を離れたる智猛周にて候ふぞや、君の此地に隱れたりと聞き、一たび胸襟を開て語らん爲め今朝より尋ね倦みたり、今更ら何をか包み玉ふ

此何事用筆奇幻之極

と聞て農夫は禮を返し、首將に向て暫くの間何事をか語りけるが、主將は他の士官を此處に待たせ置き、農夫と與に唯二人相ひ伴ふて、遙か遠く隔りたる大樹の下に立寄りつゝ、石の塵を打ち拂ひ、兩人玆に對坐して、又何事をか語りしが、此時農夫は笑を含み

農夫

雅典の國難平らぎなば、將軍の病も亦た愈ゆべし、將軍は今や其の身を治亂の局中に投ぜられたり、凡そ局中に在る者は、利害其身に切なるが故に、明

何物農夫開口忽說出這絕大經濟用筆奇幻之極

議論如食蔗漸入佳境

更革政治之要一言以蔽之是眼識已到了絕頂者

識の士と雖も、尚ほ時として過慮疑惑の失なきこと能はず、然れども局外に立つ者より之を見れば、天下の大勢見得て分明なり、隆替成敗の數豈知り難からんや、抑も國民多數の意向を以て一國施政の本源と爲すは是れ民政國の通則なり、實に國民多數の意向を知らんと欲せば、各人をして靜穩隨意に其の意を表出せしめざる可らず、是れ先聖哲の我か國人を安定せし治道なり、然るに今日亂黨の爲る所を見よ、名は國人多數の意向に從ふと云ひながら、其の實は兇暴の行爲を以て公私の論場を脅亂し、良民をして屏息緘默し、其眞意を露出するを得ざらしむ、是れ國人多數の政にあらずして暴民小數の政なり、豈一國の政府を以て之を見る可けんや

凡そ國政を更革するに於て、其の目的現在の害を除くに在る者は、其の擧必ず治に終り、空想の利を興すに在る者は、其の擧必ず禍亂を長ず、是理の最も覩易き者なり、何となれば、現在人民の疾苦を除かんが爲めに舊政を改む る者は、之を更め盡すの時に於て更革の擧已に玆に盡くればなり、斯く其の

發示禍亂之機使人深知所戒愼語簡意瞭聽者言下點頭是眼識已到了絶頂者

舉動に彊界あり、故に後來の舉措も亦た安靜に歸して、人民其堵に安するを得、昔時雅典幾回の改革を顧み、近時齊武の改革を察するに、人民安定して禍亂長く延かざる者は、皆是の理に依る者なり、然るに改革の性質、現在の害を除くにあらずして、人々胸中に空想する政治上の仕組を摸型とし、意中の政を行ふて一層の利を興さんと欲するときは、一事僅に更革し了て直に二事に進み、二事僅に更革し了れば又三事に進む、更革の舉動は止るべき際限なく、意中の空想は日に新奇に向ひ、國人遂に其の弊に耐へざるに至る、四十年前胡爾魏の大亂則ち斯の如し、今我國亂黨の爲る所、又正に斯の如し、加るに亂民互に權を爭ひて、相害し相戮し、三旬を出でずして酷刑に處せらるゝ者已に千餘人の多きに至りしにあらずや、積屍街に滿ち流血路に溢る、若し此儘にて進みなば、如何なる零落の岸畔に我國を臨ましむるやも亦た知るべからず、神怒人怨與に極まる、若し今一人の有力者有て靖難の大義を唱へば、全國の良民一呼して響應し　禍亂乍ち定るに何の難きことかあらん

農夫說智將軍的意見擧竟是二賈說蘇將軍的意見彼此無大差而彼之明快此不如之雄偉政治家計謀胸裏平昔自固客舌異說談辯頭一時

成敗の數は內外の勢ひ相應ずるに定まる者とす、若し外に之を制するの勢ありとも、內に乘ずべきの隙なくんば、事素より成るべからず、又內に乘ずべきの隙ありとも、外に之を制するの力なくんば、事又決して成るべきにあらず、今や我國の人心、亂黨の肉を啖はんと欲するは、之れ內に乘ずべきの隙あるなり、內に乘ずべきの隙あること久しかりしが、唯今日まで外より之を制するの勢なかりしが爲め、百萬の生靈をして空く塗炭の內に沈淪せしめたるのみ、然るに近日聞くが如くんば、將軍と武將軍と大軍を擁して、手に兵權を握られたりと云ふ、今ぞ之れ內外の二勢力に熟したるの時なれ、唯茲に一難事なるは、將軍獨り亂を鎭するの心ありとも、武將軍をして其意なからしめば、事又容易に擧ぐ可らず

智氏

今日に當て誰れか國亂を憂へざるものあらん、武氏も我れと粗ほ意を通じ、其志既に定まれども、唯決斷の遲々たるのみ

諸葛亮廬中定三分之計珂理杜朗樹下斷內外之勢誰謂草莽無英雄抑揚挑撥弄智將軍在掌上

農夫

二將軍の意果して然らば外勢全く成れる者なり、二者共に心を協て大兵一たび國都に臨み、大に亂黨の罪惡を鳴らし、檄を全國に移さば、良民誰れか子の如く來らざる者あらん、今や靖難の大業は二將軍の手中に在り、將軍の病苦を醫すべき良藥を盛るの器は將軍の眼前に在り、將軍何ぞ之を棄るや、若し一たび亂黨の爲めに疑はれて、部下の兵士を解散せられなば、大事全く去らんのみ、事若し此に至らば悔ゆとも及ぶ可らず、兵威を握りし二將軍が此志を懷かるゝは、是れ天の未だ雅典人民を遺てざるなり

と聞て、將軍は左右の手を組み合せ、前なる原野を望みつゝ、暫し返答なかりける、

農夫

一層又進入將軍心脾去非極怜極悧

將軍は德義を重んじ名を惜むの人なり、假染にも亂黨等は五百名會、公會と人民の名とを以て常に百事を行ふ者なるに、今若し將軍自ら兵力を以て之

的人不能高見達識乃有是冒

を覆さば、民政を傾る逆謀者の惡名を負はんことを顧慮し、或は遲疑し賜ふにはあらざるか、這は將軍に似合しからず、凡そ天下の事は實に存して名に存せず、假令ひ多數の愚者に笑はるゝとも、少數の智者に譽を得んこそ英雄傑士の本意なれ、今日將軍が靖難の義擧は、幾百萬の生靈を水火に救ふの實功あり、世上の毀譽は如何なりとも、千百世の其後に正議の邪正を定むるあらざらんや、空名細故に懸念して斯る大事を決せざれば、埃及地方に威名を轟かせし將軍に似合しからずと思ふなり

と或は勸まし或は勸むる詞を聞て、將軍は唯微笑するのみ、別に答もなかりけるが、暫くして農夫に向ひ

將軍

君の言は我意に符合す、謹て其の誨を奉ぜん、君若し幸に國事を思はゞ、然るべき時機に於て必ず一臂の力を副へられよ

農夫

難を避け身を隱すも、亂を定むる時節を待つのみ、共に力を國事に盡すべしと答ふるを聞て、將軍は眉宇に喜色を現はしつゝ、尙ほ何事をか謀りし後、將軍は別れを告て馬に打乘り、十餘名の從騎と共に、本と來し路にぞ馳せ去りける、抑も此農夫は何者ぞ、先きに純正黨の諸名士を諫めしも、其言の用ひられざるか爲めに、禍を未然に察して早く其の身を退きたる秀拔の名士珂理杜朗なりとは、讀者既に之を察せしならん

我亦云爾者久矣

雅都の亂黨柳奎太、保利登等は、益々永く其の勢力を保たんが爲め、暴威を以て己れに離心せる良民を壓し、人心の己等に服せざるを知るが故に、又己等を覆へす密謀者あらんことを恐れ、重もなる人民の擧動を探偵すること甚だ嚴密なりければ、早くも智、武の兩將が異謀の企あるを疑ひしにや、此時公會の議決を以て使節を境上の二軍に派し、二軍の部下なる警備軍を、一と先づ國都に引き揚ぐべき旨を命令しけり、

是に於て武氏は部下の全兵三萬餘人を率ひ、國都を指して歸り來しが、茲に國

所謂遲々未決者

都を隔ること四里許りの地に涇比と名づくる一帶の小流あり、此地こそ是れ兼て公會より定め置きたる西南の解兵線にして、此小流を打越すの將軍は、其以前に兵士を解散せざる可らざるなり、武氏の一軍は此の河畔に至りし時、如何に思ひけん、武氏は河を涉らずして一と先づ全軍を駐め、獨り帳中に入りにけり、是より先き兵を返すの時に當り、智、武二將の間に書簡の往復あること數回なりしが、智氏の一軍も亦た此地を隔ること二里餘なる解兵線の前にぞ留りける、若し二將をして此儘に大軍を擁し、解兵線を超へしめんか、直に死刑に處せらるゝのみならず、長く逆謀者の汚名を千歲に遺こさん、若し又大兵を解て畫線を超へしめんか、大軍一たび散せば復た聚む可からず、靖難の大業全く茲に絕望すべし、然れば今や二將の身上のみならず、雅國の治亂を定むべき實に危急の場合なりける、

涇比岸上の一軍なる總督の帳幕中には、武將軍獨り默然として思案に暮れたるが如く見へにけり、此時其の腹心と覺しき三名の將校入り來り、

諸將
將軍何をか案じ賜ふ
と問へども、武氏は唯目禮を爲すのみ、猶も默然として思ふ所あるが如ければ、
諸將は近く傍らに進み寄り
諸將
昨夜も將軍に說く如く、大事を擧るは今日に在り、我々部下の兵卒等も密に
我等に迫る者多し、衆心の向ふ所は期せずして皆同きこと斯の如し、若し此
時に事を擧げず、一たび大兵を散じなば、靖難の大業又何れの時をか期せん、
且つ亂黨等は疑ひ深き者どもなれば、假令ひ將軍が此儘に兵を散じ、單身を
以て都に入るとも、豈將軍を赦さんや、若し此處にて兵士を解かば、雅典の
國運も夫れ迄なり、將軍之を悲み賜はざるか、天人共に與みしたる此期に臨
で遲疑し賜ふは、日頃の氣質に似合しからず
と頻に請ふて止まざれども、武將軍は唯之を首肯するのみにて更に一言をも發

可知勸將軍不是一回

此言最慮切

せず、双眼を閉ぢ默然として居たりければ、將校等は云ひ甲斐なしと思ふが如
き樣子にて
諸將
再び參上致すべし
と辭を跡とに殘しつゝ、帳幕の外に去りにけり、此時又引き違へて入り來れる
は、兼て亂黨より附け置きし二名の軍監にて、近く進て武氏に禮し
昨夜も君に說く如く、軍中動もすれば穩かならず、此儘兵威を挾で國都に入
らんと謀る者多しと聞く、斯の如き儕輩は、是れ皆實に國法を蔑如し公會を
侮るの叛民なり、唯君は素より國人多數の意向を崇敬し、五百名會公會の
命を遵奉して、嘗て貳心あることなきは、我々二人の能く知る所なり、豈今
更ら國民に叛して逆謀者の汚名を千歲の後に傳ふるが如きことをせられん
や、今日將軍の爲めに計るに、唯速に兵士を散じ、單身を以て涇比の解兵
線を超へ、早く國都に入らるゝに若かず、假令ひ一時の武功を捨つとも、功

可知勸將軍不是一回

此如極似三國志張昭黃蓋等交說周瑜督一段而周都督已先有定見武將早已先無定見故勢自不相同

名富貴は横て將軍の前途に在るにあらずや、危を避け安に就き、永く人民の愛敬を享るは、是れ將軍の宜く爲すべき所なり、險を行ひ幸を激むるは、是れ小人功を貪る者の悅ぶ所、將軍愼て彼等の言を聞き賜ふなかれ

と云へば、武氏は頷くのみなるに二名の軍監も亦出で去りけり、武氏は之を見送りもせず、左手に劍を杖て右腕を其上に按じ、右掌を以て頤を支へ、默然として居たりける、兵を擁して解兵線を超へんか、永く叛民の汚名を遺こさむ、兵を散じて國都に返らんか、靖難の大業全く望を絕たん、豪氣世を蓋ふの將軍も、今ぞ思案に暮れたりける、

突如來如筆蹟倏忽變化不測

又軍中の壯士等は、是儘國都に攻め入らんと逸やり勇む者多けれども、將軍の心を測り兼ね、如何に成り行くことなるかと、深く心に案じながらも、駐軍の間涇比の河畔を徘徊する者多かりき、玆に本營附屬の喇叭方の一群も、亦傳令使等と諸共に、總督の帳幕の後なる柏樹林を遊歩し居たりけり、然るに嚠喨たる笛聲遙に微風に送られ、最と面白く聞へしかば、不圖林外を眺むるに、年の

最妙在事出偶然

將軍駐兵河岸不輒亂流者非無攻都之意者第少斷之機耳亦

頃十五六歲と見ゆる一人の山童、一群の羊を驅りつゝ、短笛を弄しながら此方を指して下り來れり、喇叭手等は之を見て、今ま暫くと呼び止め

今の調子の面白かりしに尙ほ一曲を吹かずや

と、請はれて山童は辭しもせず、又一曲の短調を吹きたりしに、其音淸亮にして雅趣あれば、皆な手を拍て之を感じけり、此時牧童は持たる笛を腰に挿し、喇叭手の持たる喇叭を眺めつゝ、奇異なる思ひを爲せし樣子にて、如何なる器物ぞと問ひければ、兵士等は「之ぞ軍用の笛なれ」と答へしに、山童は頻に請て喇叭を手に持ちつゝ、つくゝゝと打ち眺め居たりしが、我も此笛を吹き得るならんと、一曲高く吹きたるに、何ぞ圖らん其調は、暗に進軍の調に符合したりければ、諸隊の喇叭手は此音を聞くより、すは、總督本營の方にて進軍の喇叭の鳴りたるぞ、國都に攻め入る號令ぞと、皆一同に息を込め、喇叭の長管も張り裂く計り、勢猛く吹き立てたり、兼て勇みし兵士等は、すは、進軍の喇叭なるぞ、吾れ後れじと兵器を執り、瞬時の間に列を整へ、五千餘騎の前軍

作者忽拈出一個牧童啓天意人心之衷可謂奇想神來

該撒所謂骰子轉者矣間不容髮

は、早くも涇比の流れに打ち入りければ、全軍之に引き續き、國都を指して進まんとす、先刻より幕中に在て思案に沈みし武將軍は進軍の喇叭に打ち驚き、幕外に立出で遙に四方を眺むれば、我が統率する全軍は、早や進軍の喇叭に連れ、半は涇比を渉りしにぞ、這は何故ぞと驚く處に、傳令士官等馳せ來り、是の顚末を報じければ、武氏は突と立上て聲を放ち

之れ天なり天、我をして大亂を鎭せしむるのみ

と叫び終て馬を呼び、ひらりと之れに打ち乘れば、親兵千騎左右を圍み、令を諸隊に傳へつゝ、前軍後軍整然と國都を指して進みけり、

又智氏は武氏の一軍已に涇比を超へたりと聞き、我に先だち決心せしか、左らは片時も猶豫すべからず、與に力を合せんと、部下の一軍に進軍を令し、其の兵凡そ二萬餘騎、國都を指して進みけり、

鋤雲云神童弄笛一段足見天意人心不期合符之妙讀去激揚悲壯

學海云本回爲智、武二將雅典靖難原由前回說雅典國民厭苦亂黨暴虐二將手握重兵一擧反旌蕩滅非難只說得容易一言可了沒甚麼趣味前段反現一隱君子論中肯綮次出一二將校痛說利害又出軍監沮抑其謀左支右齬俯仰低徊使讀者癢不知癢處然後一聲喇叭聳動三軍來把無數閑言語一齊掃却去快筆妙筆

鳴鶴云前回是一面修羅場後回又不得無一大殺場乃描出此淸境以挿其間布置巧妙

又云腥風血雨中別闢一天地寫出英雄胸間綽々有餘之趣文情極濃矣

又云不說農夫爲何人不說牧童爲何者渾以虛寫叙了暗伏後回脚色使人不得窺其端倪朕兆

又云把雅典興亡之機懸于牧童一笛之中霹靂一聲天地震動作者筆頭有靈妙不測之術

第六回

三士大に靖難の義を唱ふ
義勇兵街上に亂民と戰ふ

戰旗を靡びかせ軍勢を張り、靖難の二軍六萬餘人、堂々として都門に迫りしは、

方に此日の薄暮なりしが、兩將は此時二軍を合して一團と爲し、玆に諸隊を屯駐して暫く其の進入を嚴禁せり、是れ蓋し鬱怒を洩し積怨を散ぜんと逸り勇める壯兵等をして、其怒を縱にせしめば、亂黨とは云ひながら、彼等に向て如何なる慘酷の復讐をなさんも計り難きを慮りてなるべし、

兩將靖難の義を唱へ、大軍之に從て進み來るの風評は、早くも都内に聞えければ、都内の人民相率ひて城外に遁れ出で、靖難の義軍に來り加るもの、續々として其數を知らず、城外の義軍は頃刻の間に數萬の兵數を增加しけり、亂黨等は兼てより憂ひ慮りしことなれば、此の報知を得るや否や、直に無賴の暴民を募て、先づ其の會同館を守らせつゝ、俄に會議を開て防禦の計を議しけるが、事倉卒に出でたれば各地方より大兵を募るの遑なく、是迄の股肱と賴みて都内の警備に備へたる二萬餘の兵士に、新募の兵を加へて三萬餘人とし、之をして四方の都門を守らしめ、急に人を四方に馳て各地の亂黨より援軍を招き其の到着する迄は、必死を以て都城に立籠らんと決しけり、是夜一人の

起手莊重典雅讀來鏗鏘聲之有金石祖先草相人油爲不重
凡稱創之功以使者心尤擊莊典
激誘之出深切假
愛國之心
然涌
獨斷
其文

農夫あり、垢衣を着け羸馬に乘り、二人の士官に伴はれて義軍の本營に來りしが、智、武の二將軍は遽しく出迎へ、之を其の幕中に案内せり、是れ則ち義軍が涇比の境線を越るに及び、智氏が急使を馳て珂氏を迎へ來らしめたるなり、是夜兩將は珂氏の說に從ひ、其の幕中に相議し、珂氏をして大に國民に宣布すべき靖難激文を草せしめける、其略に曰く

昔し我が「ヘルレン」種の先聖王セクロポスが、人民と謀て制度典章を定めしより、歲を經ること千有餘年、常に列國に覇たり、其の間內外の事變多からざるにあらずと雖ども、人民の疾苦すること未だ今日の如きものはあらざるなり、社會の紊亂すること未だ今日の如きものはあらざるなり、列國に輕侮せらるゝこと未だ今日の甚きが如きものはあらざるなり、昔巴本涅斯の大戰は、其の禍ひ慘毒ならざるにあらず、然れども人民唯敵軍の鋒鏑に苦むのみ、其の國に在り其の家に座しながら、前に寃刑あり後へに豪奪あり、慄々として片時も心を安ずる能はざること、今日の如きには至らざりし、昔し

叙亂黨之禍
數行而盡
平均不平均
數語議論精
明深中人事
世態之察

ペルシヤ軍の侵入は、國都を燒き城池を毀つ、其禍、慘毒ならざるにあらず、然れども國人サラミーの島嶼に遁て、尚ほ群居靜穩の樂みを失はざりき、又廿年來斯國の凌虐を蒙り、雅典の國勢、地に墜ちたりと雖ども、未だ敵國の爲に夜に乘じて國都を奪はれんとするが如きには至らざりし、亂黨の大權を擅にせし以來、公私の論場を脅すに暴民を以てし、全國多衆の良民をして、靜穩に其の意望を表示するに由なからしむ、其の名や人民多數の政なり、其の實や少數の人民專制の政なり、良民辛苦の貯財を以て、市井無賴の亂民を村邑會に養ひ、各人勤辛の結果なる貯持の財產を豪奪して、之を亂民に均分す、其の恣專暴橫古より未だ斯の如き者はあらざるなり、凡そ各人が國法の保護を受るの權理は、平等均一なりと雖ども、德操の厚薄智力の多少より、各人私交の間に於て、相互の敬禮接遇に高下の差異を生じ、平等均一なること能はざるは、是れ自然の定法にて、人事の避く可らざる者なり、假令之を縱て行はしむるも、亦た何ぞ人事に妨げあらん、然

（圖二第）　ク吹ヲ角童牧ニ岬河北溫

繳懸起手爲結自是正文筆法

草檄之體語要簡而勁意要明以易今此兼之矣

るに亂黨等は、國人私交の敬禮を一にし、平等均一の觀を以て之を行ふ可らざるの地に行はんとす、其の狂態粗迂古より斯の如きはあらざるなり、其の他彼等が舊來の良法を蔑如し、良民を凌虐するの擧動を列擧せば、サロニツク灣の海沙も亦た將に其の少きを覺へんとす、國に定法なく民に恒心なし、紀綱弛壞して姦猾横行す、神怒り人怨む、今西南二路の軍士等雅典全國良民の名を以て此に靖難の大義を唱へ、亂黨を驅逐して國都を淨め、以て我々の祖先が辛苦經營せる此の美麗繁盛の國土を替頽弛衰の中に救はんと期す、我々と意を同ふする擧國の良民は、夫れ來りて力を合せ、與に亂黨を戮滅せよ、

玆に雅典良民の名を以て、特に此の旨を大に全國に公示すと是に於て先づ是の檄文を軍中に示せしに、兵士全數の同意を以て直に之を可決し、即夜此の檄文を全國に傳へ、又人を都内に遣はし、之を街上處々の壁上に貼出さしめたり、

兼てより都内の人民は、怨を呑み怒を忍び、折もあらばと待ち居たりしことな

れば、今ぞ日頃の鬱憤を晴すべけれと、城外の軍に馳せ加る者多く、又少壯の良民は、都内に於て更に數個の義隊を結び、其の二三隊は城外の義軍を引入れんとて、不意に西南の二門を襲撃しけるが、守門の警兵も、義軍に志しある者なきにあらねば、暫時小戰の後、遂に四方に散走せり、是に於て義隊は城外の義軍を迎へ入れ、大軍整然として都門に入りければ、亂黨の一隊は、其の前軍を迎へて街上に防戰せり、然れども本とより不規則なる奴輩のことなれば、紀律正しき大兵に當るべくもあらず、義軍は之を押し破て、易す〳〵と國都の本城なるアクロポリスを乘り取り、此處を本據とせしは、此夜尚ほ三更の頃なりけり、

又亂黨の重もなる保利登、央霧費等は會同館に湊集して、危難を免るゝの處置を衆議に問ひしが、或は戰を以て運命を決せんと說くあり、或は先づ地方に走て再擧を計るべしと說くあり、議論果てしなかりける、素より此の黨類は、市井の無賴なる惡漢の集合體なれば、其の人數尚ほ頗る夥く、會館近傍の

市街には、守衛の爲めにや暴民の大衆隙き間もなく充滿して見へにけり、然るに此時良民の壯丁が結びたる數個の義隊は、日頃暴行の中心たる此の會館を粉齏して積慣を漏らさんと、早や四方より押し寄せ來りしかば、忽ち玆に殘酷なる修羅の一戰場を開きけり、凡そ危を避け死を恐るゝは人情の常にして、平常無事の日に於ては勇氣の見へざる良民等も、一たび義理に激する時は、身を殺して屈せざるの勇氣頗る當り難きものなれば、此の如き場合に於ては、進退意外に猛激なるを知るべし、之に反して無賴の民は、平常無事の日に於て市井閭里に横行し、爭を求め勇を衒らへども、一旦事あるの日に於ては、却て勇氣少きものなれば、此等の理由によるものか、將た義隊は其の後へに靖難の義軍あるを賴み亂黨は應援なきに憶せしか、双方與に不規則なる得物々々を打振て互に咄喊殺傷せしも、義隊の勢ひ盛んにして、次第に二三の街頭を乘り取り、會同館近く推し詰めたり、此の危急の場合を見るより、亂黨の重もなる者共は、一と先づ此地を落ち延びんと會堂を走り出で、遽てゝ走路を求めけり、斯

義兵之討亂
黨似拉朽振
枯烏合之衆
勝時如虎敗
時如鼠而妄
想政治家或
欲賴此以有
爲者古今皆
是抑何心哉

く魁首たる者共の落ち行くに從ひ、外よりは義隊の烈しき攻擊を受け、群集せる暴民等は、遂に大浪の崩るゝ如く、人崩雪を打て城外指して散走せり、然れども其の遁路を掩て追兵を妨げんが爲めに、頻に路傍の家屋に放火しければ、猛火各處に天を焦し、黑煙市街を蔽ひけり、已に亂黨を敗りし義隊等は、直に進で會同館を乘つ取りけるが、永く暴政の中心たりし家屋なれば、其の怨憤尙ほ去り難きにや、火を放て之を焚き、其の館舍が火焰の中に傾倒するを見て、快よげに喊を作り喝采歡呼したりけり、アクロポリス其他一二の場所は、幸に大兵の屯駐する有て靜穩無事なるを得たれども、他の市街は過半修羅場と變化し、此夜は終夜各街各處に小戰絕えず、人民雙方の死骸は彼方此方に散亂して、恰も算を亂せるが如く、傷者の苦叫戰鬪の聲は、街上焰烟の間に聞ゆ、其の慘狀實に名狀す可らざりし、是れより先き智、武、珂三氏は諸將をして別隊を率ひ、良民義隊等が一時の勢に乘じて殘酷に過るの行を爲すを制せしめ、勉て亂民の歸順者を援けんと盡力せり、然れども遺恨骨髓に徹せしことなれば、良民

等は一向に用捨なく、亂民に對して心儘に復讐を爲す者も少なからざりき、畢竟は亂民等が自ら求めたる禍とは云ひながら、淺ましかりし事共なり、此の如き騷亂に此夜を明かせしが、翌朝に至りては人心粗ほ定れり智、武の二將は、是に於て諸街に警備の兵を配賦し、諸般の事を點檢せしに、暴民の中にても、重もに亂黨を助くる者は十中の二三に過ぎず、其の他は勢に從て彼等を助けし者共なれば、是等の者共には其歸順を赦し、舊惡を問はず、各々悔悟の實情を表せしめけり、然れども亂民の殘黨は、尙ほ再擧を計るの心にや、此夜都門を遁れ出で、地方を指して走りし者、尙ほ一萬餘人と聞えけり、又亂黨中の重もなる韋黃良、央霧費等は、一時は行方知れざりしが、柳奎太、保利登等と與に、昨夜の騷亂中に狙擊虐殺せられし者なるべし、翌日に至て、彼等の寸斷せられたる死骸を都門の邊りに見出しける、又義隊中には、牢獄に亂入せし者もありしと見へ、先きに一たび亂黨の首領と仰がれて國事を亂だし、今は勢を失て幽閉せられたる彼の平邪も、獄中に殺されて居たりき、

此に於て、靖難の軍團は次日直に一隊を派遣して、地方に遁走せる暴民の跡を追蹤し、彼等をして再擧を謀るの遑なからしめ、又都内の人民は、昨日まで亂黨の行ふたる政治を永續すべきや將た前日の政體に復すべきや、又前日の政體を基礎として多少の改革を加ふべきやにつき、投票を以て國民全數の意見を問ふことに議定し、先づ國都の人民の意見を表示することに定めけり、斯くて數日の後、都民の投票を點檢せしに、舊時の政體を其の儘に回復するの票數幾んど全數を占めにけり、又各地方に於ては靖難の檄を得て國都の有樣を聞きしより、良民は一時に勢を得て亂民の黨類と抗爭を始めけるに、引續て國都より靖難の義兵來援するに至りしかば、遁れ出たる亂黨等も、最早や再擧を計るの遑なく、各地に於て逮捕せられ、走るに路なく隱るゝに家なく、僅かに生命を全ふして、他邦に奔竄するものも多かりける、然れども遁れ出てたる亂民の過半は、止むを得ずして良民に歸順を表し、其の舊惡を赦されんことを求めけり、斯く慘毒なる騷亂の後、國事粗ほ定りければ、即ち舊法に從て公會及び五百名

豫防亂民不宜少此備

會を再興することに決し、代議の仕組を以て各區各地より代議士をぞ選擧しける、又國都の大亂の定まるを聞き、是迄他邦に遁れたる良民次第々々に歸り來りければ、今は全く舊時の靜寧に復し、二十日を出てずして再び靜穩なる社會を雅典に見るに至りける、此時智氏武氏の二將は、自ら請ふて軍務を辭し、唯五百名會の議員たる職任を帶び、一私人として國事に力めけるも、雅國の大權は隱然として暗に智、武、珂の三氏に歸したる有樣なりき、斯くして諸般の事全く舊態に復したれども、唯以前に異なるは、公私の政論場の取締り甚だ嚴密なる一事にて、苟も政論場なれば、其會の公私を問はず、必ず若干の警備兵を備へて會衆の亂行暴行を禁抑せり、是れ執政者若しくは一黨派の爲めに會民を壓するの警備にあらず、全く夫の前日亂民等の如く、兇暴の行を以て公衆を脅し、國人の靜穩に意見を表示するを妨げ、紊亂の緒を開くの擧動をして、後來永久に其の迹を絶たしめんと欲するの趣意なりき、故に之より以後は、公私の政論場に於て、人民皆充分靜穩に其意見を示すの幸福を得るに至り、國民多數

珂理杜朗之說與巴比陀如合符契達者眼洞全局固不期而同也

の意望を以て、國事を決する民政の實始て擧るを得たりけり、又此時當國の名族と知られたる王德貿、賀耳璨等の諸氏、國人の爲に推選せられて行政議官の職に就けり、斯く內政は整頓せしかども、玆に困難なるは外交政略の一問題にて、當國は向後斯國に合せんか、或は中立を守らんか、或は齊武に結ばんか、國是未だ定まらず、議論尙ほ紛然たりしが、遂に靖難の後、始めて開くべき五百名會に於て秘密會を開き、此議を決せんと定めける、斯くて公會を開くに及び、議論紛々として決せざりしに、珂氏は會衆に向ひ

希臘の平和は列國の權衡其の平を得るに在り、今日列國を見よ、南に斯波多、哥會あり、此に雅典、齊武あり、孰れの國か其勢最も重く、列國々勢の權衡をして一方に偏傾せしむる者ぞ、數十年來の積威に賴り、南に哥會を連ね、今又北に齊武を討じ、列國の權衡を傾けて我邦他日の大患と爲るべき者、斯波多にあらずして誰ぞや、今や齊武の圍み幸にして解けたりと雖ども、同國は兵備未だ完からず、糧食未だ多からず、若し又斯國の長圍を受けば、其

覆亡期して待つべきのみ、斯軍の勢ひ斯の如くして益々重きを加へば、雅典亦た獨り全きを得るの理なし、然らば今日我國の大計は、北、齊武に結で斯人に抗するに外ならず、豈局外中立を以て自ら滿足すべきの時ならんや、假令ひ一旦は開戰の危難を犯すことありとも、雅、齊の同盟をして堅からしめば、尙ほ大勢の一國に偏重するを避け得べし、且齊武は新興の國なり、我は覇主の舊邦なり、若し兩國協同して北部中部の諸國を連結し、舊時の「デロウ」同盟の偉業を復するに至らば、牛耳を執て諸國に臨むの覇權は齊武に歸せずして必らず雅典に歸せん、故に進て齊武に結ぶは我が他日の傾覆を免るゝのみならず、我が舊時の覇業を回復するの望みあり、人生の事、安逸の以て幸福を得難きを知らば、假令ひ一時兵革の苦みありとも、我國百年の大計を慮らざるべからず

と、雄辨を振て詳に列國の大勢を說破せしかば、會衆の過半數は殆んど同意を表しける、然れども愈々此議を實施せんと欲すれば、斯國と戰を開くを避け

難し、就ては尚ほ一層國内の兵備を嚴にせざるべからずと、是より壯丁を募て、專ら兵備を整るに汲々たり、然るに此時齊武より國書到來して、雅典人民の爲めに靖難の大業を祝し、又日ならずして外交事務に關し、使節として巴比陀、匹方善の兩人を派遣すべき旨を通報せり、

鋤雲云斯波多之近交雅典而遠攻齊武者殆類借道于虞而亡虢之策珂氏之聰能看破之可謂善謀無遺者。

學海云本回爲雅典靖難奸黨誅戮本末雅典靖難與齊武反正亦相酷似而有負不相似者彼正黨諸子從亂時逃難在外突然自裏面跳出來此智、武二將在平時流落他邦從禍亂歸來反出防外難遂還軍入來其不相似一也諸子是爲奸黨所斥逐乘機反正二將是奸黨招來爲將趁勢靖難其不相似二也彼則珠翠滿堂忽然變劍光來此則牧笛一聲俄爾起陣雲來其不相似三也彼則一時蕩平戮止數人此則數月劇鬪殺却殆盡不相似四也嗚呼而其爲國爲民則一矣。

鳴鶴云至此稍撤去帳帷提起前回所埋伏者來。

又云靖難檄文雄渾雅健非有若大文字則不能有若大功業也。

第七回　援軍城外に死戰の陣を布く　二國平羅に同盟の約を結ぶ

初め弗拉太に屯する斯國の將軍蘇方度が、雅典を襲はんと欲して成らざりしや、當時雅國の政權を私せし亂黨等は、一方には兵を發して境上に備へ、又一方には其の都に來寓せし斯軍の使者韋孟九を詰責して、之を殺戮せんと欲せしに、韋孟九は頻りに辯疏して止まず若し雅人が己と與に使者を斯都に遣はして蘇氏の處置を非難せば、斯人は雅人に對して決して惡意なき旨を明示し、必ず蘇氏の擧動を罰すべしと述て、一たび其の使者を斯都に遣はさんことを切望せしかば、亂黨も漸く其の言を信じ、乃ち孟韋九と與に二人の使者を斯國に遣はしけり、然るに此の使人が斯都に達して談判を開ける中に雅都の景勢又大に一變し、靖難の兵起て三名士國政を執りし等のこと、續々として斯都に聞えければ、斯國の人民は、雅人が又齊人に結ばんと欲するを憂て、痛く蘇氏の擧動を非難し、

亞世刺之識亦未易

其の雅典の歡心を失はしめたるを咎め、急に之を呼返して其の罪を糺し、之を嚴刑に處して以て夜襲の計は斯國の本意にあらざることを明かにし、且つ外交に長じたる人物を選び、急に雅都に遣はして此事を辯疏せしめ、且つは向來益々兩國の好みを堅くするの意を致して、雅人の心を滿足せしめんと議決し、遂に蘇氏をば急に斯都に喚び返せり、蘇氏は國都に到着する後、直に法庭に呼出され、其の擧動を審問せられしが、夜襲の事は本より不正の振舞なれば、有罪と議決せられたり、然れども國人其の刑の適用を議するに及び、之を嚴刑に處せざれば、雅人の怒を宥め難きを說く者多かりしに、國王亞世刺は（右一節は勢氏具氏の希臘史）

此の如き驍將を嚴刑に處するは我國他日の計に非ず

と述べしが、此の一言大に會場を感動せしめ、遂に三ケ月間軍職を解き、罰金百「ジューカス」の輕刑に處することに議決せり、是れ蓋し亞王が此の一將を刑するも、到底雅人の同意を得難きを察してなるべし、又或る史家の說に依

列國休兵之會已發兆於此

れば、蘇氏の子が亞王の太子亞智駝に親しきを以て、亞王の助を哀願せしに因ると云ふ（右一節同上）

斯國の使臣は、夜を日に繼で急行し、雅都に赴きしが、其の到着せし日は、方に之れ齊武より巴氏匹氏の兩人が此地に到着せし翌日なりき、然れば兩國の使節は、互に雅國の行政議官及び勢力ある人々に會して、各其の國に同盟連結せしめんと爭ひける、然るに十餘日の後、當國の重もなる行政議官等は、種々評議の末、遂に齊武に向て連結すべき旨を返答せり、是れ前日五百名會の秘密會議に於て、粗ほ外交政略の定り居ると、齊武に同盟するは雅典の實利なるによるものなるべし、斯波多の使節は本意を達せず、すごゝとして出立しけるが、齊武の使臣は尙ほ殘り留て後事を議し、希臘の中部平羅を連ねて舊時「デロー」の大同盟を回復し、雅典を以て其の盟主と爲し、又中部の內にて知珂の域內なる諸邦は雅典之を統率し、慕知の域內なる諸邦は齊武之を統率することに定め、二國の力を幷て斯國に抗敵し、漸を以て諸小邦を結び、是の目的を達

するを力むべしとぞ内議しける、是時兩國の間に内議して定めたる中部大同盟の要件は左の如し、

第一　當時雅典に同盟せる知珂の諸國及び齊武を聯合して和戰の苦樂を與にし、尚ほ自餘の獨立せる諸小邦を連て一大同盟を結ぶ事

第二　同盟の大會は毎年之を雅典に開く事

第三　雅典を推して新同盟の盟主と爲す事

第四　若し夫迄の内、親好國に危難あらば互に之を應援すべき事

等なり、之れぞ紀元前三百七十年代の希臘史中に於て、雅典同盟の稱を得たる連合の起原なりける、此等の計畫に手間取りしが故に、齊武使節の一行が其の本國に歸りしは、夏の央を經過して秋の初になりにけり（雅、齊同盟の一節は具氏の希臘史）

秋季は正に是れ兵を出すの好時節なる故、斯國が再擧を爲さんと欲するの企、兼て齊武に聞えければ、齊都に於ては守城の準備に少しも油斷なかりけり、是

より先き齊武に於て、後來史中に芳名を傳ふべき神武軍と名づくる一社起れり、此社は本と名士吳兒陀の建議に成りしものにして、其性質たるや、勇武にして品行力正なる國中の健兒一千人を撰拔して之を組成し、平時は本城守衛の榮職を帶ばしめ、有事の日に於ては、廿人一隊の小團に分て之を各軍團に配賦し、其壯武と嚴正とを以て、他の兵士を激勵するの務を有せしむ、而して此社中の健兒は、勿論戰時に於て他の戰士と軍裝を異にするのみならず、平日と雖も、一種の標章を衣服に附して此の社中に屬するを明にし、以て其の行狀を著明にし、又威氏巴氏の諸名士は勿論、苟も齊國の名族にして勇武嚴正の壯年は、皆此の社中に加はり居るが故に、他の人民は皆是社中に屬するを羨み、其の品行を愼み其の氣力を盛にし、何卒して其の中に加へらるゝの榮譽を得んと競ひ勵むの心を生じたり、抑も神武軍と云へる名は、原と本城の中なる神廟守衛の兵と云へる意味より起りし者なれども、後年各地の戰に此一團が常に偉功を奏して其の名希臘全土に轟きしより、遂に世人をして、神武軍の名稱は、其の

勇武より生ぜし者と思ひ誤らしむるに至れり、且つ此の社中の人は、戰時に於て苦樂を共にするのみならず平時と雖ども勉て親好を結びければ相救ひ相戒め相勵まし相助るの情、一層其の深きを增せしと云ふ（右一節は弗氏具氏の希臘史）

此年中秋に至り、斯國果して大兵十五萬を擧げ、老王亞世刺自ら請て之を統ぶ、此春雷王の兵を慕知に出だせしや、糧食繼がず、其の志を果たさゞりしを以て、此度は初夏より食を戰地に輸送して缺乏なからしむるの準備を整へ、假令ひ一擧して齊武を拔く能はずとも此度こそは長圍を以てなりとも必ず之を陷れんと企て、亞王自ら將として出征することに決せしなり、然れども雅典の擧動當春に同じからず、動もすれば力を出だし、齊人を助けんとするの萌しあれば、斯國の大軍哥侖の地峽を過ぐるに及び、將軍亞王は、其の兵五萬を分て之を弗拉太に屯駐せしめたり、是れ蓋し隙を窺て雅典の境を襲はんとするの勢を示し、雅典を掣牽して齊武の應援に其の全力を致すことを得ざらしめんが爲め

使雅典堅其意者策莫得於此

なり、斯く一軍を以ては雅典を壓し、自ら十萬餘人を以て直に慕知に亂入せり、（亞王齊國を伐つことは遇氏具氏等）

是時齊人は、心に雅典の應援を恃み、今春に比すれば危難稍や輕きに似たれども、雅典は本とより人心の定りなき國柄なれば、尙ほ幾分の危疑を懷かざるにあらざるなり、若し此度雅典の應援を得ずんば、如何に多分の糧食を貯ると、到底守城は覺束なければ、齊人は直に使を雅典に遣はして、切に其の應援を求めけり、又總統官勢氏等は、軍務委員と相謀て曰ひけるは、常に敵軍を城下に引受るのみにては、齊武の國勢愈々萎靡するの外觀を示し、列國が斯波多に通ずるの志を助くべし、且つ我が勢微弱にして賴む可らずと察せば、雅典の應援すら尙ほ或は望み難からん、因ては今一たび敵軍を險隘の地に邀へ戰ひ、其の偏師なりとも之を破り得ることあらば、之に因て幾分の氣勢を增し、內は人心を作興し、外は應援を求むるの利益あるべしとて、乃ち此の議に一決し、軍務委員の首坐を占る威氏を推撰して提督と爲し、四萬の兵に將として東

南の險要を扼せしむ、

威氏の一軍は、東南を取て英峨の山を越へんとしたるとき、斥候の通知に因て、敵の大軍早や數里の中に來り迫りしことを聞けり、威氏は本より英峨の險に敵を支るの心算なりしかば、乃ち此の山脈の最高巔より、四方に向て低連せる諸山脈に沿て諸隊を配置し、地形の利を以て兵數の寡きを補ひ、隙に乘じて敵の偏軍を斫らんと待ち居たり、已にして斯波多の大軍徐々として進來し、英峨を隔ること二里餘なる山下の野に屯駐せしが、亞王は齊軍の要地に據るを以て、俄に之を仰ぎ攻めず、相對すること三日に及びしは、深く進攻の手段を求るが爲めと知られけり、斯くて第四日に至りしとき、二萬餘の斯軍其の營所を守り、他の八萬餘人の全軍は、遙に英峨の山に連りたる東方の山を指し、次第々々に繰り上げたり、此の山脈は迤邐として遠く英峨の山脈に連り、其の巔嶺は稍や英峨より高しと雖ども、兩高嶺の間は山脈少しく垂れて處々に起伏し、斷ゆるが如く連るが如きの地勢なりき、斯軍は此高山脈に繰り上る後、漸々に諸隊の

以威提督之略與齊人之勇而尚不免退走當時斯兵之精鋭可知一段不說强字而其强自見

兵を進め、山脈を傳りて英峨の齊軍に來り迫れり、齊軍は兼てより低れて又起らんとする山脈の高處に據り、敵寄せ來らば下だし擊たんと扣へたり、既にして斯軍は先頭の齊軍に迫り、兩軍玆に戰を交へしが齊軍は死力を奮ひ、二回三回敵兵を追ひ靡けたれども、敵は年來各地の戰に屍山を越へ血河を涉り、百戰を經たる精兵なる上、兵數味方に幾倍すれば、幾回となく新手を入れ替へつゝ、此山脈を爭ひしが、三時間餘の激戰の後、二壘三壘四壘五壘次第に斯軍の手に墜ちければ、威氏は令を先頭の諸隊に下だし、次第々々に兵を最高の山巔に引揚ぐ、此の堅固なる地勢に據て、全軍の大敗を支へ留めんと力めけり、然るに敵軍は尙ほも此の高巔まで押し詰むるが如く、全軍を進むる中、其の半軍を分て北に轉じ、此の山脈を打越へて山下に下りしは、是れぞ亞王が已に山脈を奪て國都の道の開けしに乘じ、其の半軍を以て國都に進むと知られけり、是に於て、威氏は此夜全軍に令し、軍士をして勉て軍裝を輕くせしめ、輜重兵

をして輜重を捨てしめ、半夜の頃暗に紛れて此の山脈を西北にたどり、國都を指して引揚げたり、敵の一軍は早くも之を窺ひ、齊軍の跡より追ひ縋りしかば、齊軍は且つ戰ひ且つ退きつゝ、此夜山谷の間に於て絶えず小戰をなしけるが、已に此の要地を奪ひ、國都の道の開けし故にや、翌朝に至ては斯軍も强て跡を追はざりければ、威氏は益々全軍を驅り、國都を指して引き行きけり、國都に於ては、味方の兵が寸功をも立てず、敗れて都に引返し、斯軍已に侵來するの飛報頻に到達しければ、兼て期したることながらも、戰慄せぬものなかりけるが、其の中にも、味方の一軍が敗を取りながらも、全沒に至らずして早く國都に引き揚げ、守城に力を合さんことを祈る者猶ほ多かりけれ、威氏は敵の追擊を避けながら、國都の安危を憂慮しつゝ、迂回して極北に出でしが、尙ほ國都には一二日程を隔てけり、若し此時斯波多の大軍嚴しく城を圍みなば、威氏の軍は今一度斯軍と戰を交へざれば、城兵と合することを得ざりしなるべきに、亞王は其半軍の城を圍むに足らざるを以て、威氏を追擊せし一軍の到

一段使人想見威提督急劇之際寛容有餘與前篇離亂之中從容甘死用意相應作者然不徒然

着を待ち、未だ齊城を合圍するに至らざりし、又威氏は時機後れて敵の爲に都城と其の軍との間を斷たれんことを憂ひ、晝夜、兵を驅て退きけるが、兵士の疲勞と敵軍追擊の憂と輜重を棄てゝ糧食の乏しきとの爲に、非常の艱苦を受け、其の心勞はさこそと思はるゝに、其の擧止曾て遽ることなく、言語少きこと平時の如く、顏色容貌始終一般にして、閑忙の爲に變ずること無きは、人をして斯の如き人の體中にも尙ほ憂喜の心を包藏し居る者にやと疑ひ怪しましむる計りなり、然れども其の兵士を愛するの心は、自ら事々に附けて現らはるゝと見え、威氏が傳令士官と與に諸隊の間を馳行するときは、之を見る兵士等は、いつも放聲讙呼して之を祝しけり、斯る艱辛を蒙りし後、此の一軍は辛ふじて西北の道より都門に入りけるが、兵士等は疲勞に堪へず、城中に入るや否や直に斃るゝ者も多かりけり、然れども此の一軍の全沒せずして歸り來りしは、城中に於ては憂の中の喜びなりし、

別軍已に到着せしかば、斯人は全軍を合して都城を環圍し、其の陣營には嚴に

壘柵を構へて城兵の襲撃を支へ、長圍を以て城中の糧食を盡さんと計りける、是に於て城中大に窘み、日夜首を延て雅典の天を望み、空く應援の來るを待てども、何の音信れもなかりけり、然るに三十餘日を經たる後、一日遙に城上の堞壁より敵軍を望めば、東方の軍俄に其の營を撤して東南の地に移りける、幾程もなく一團の兵馬遙に東方の道に現出せるは、是れぞ雅典の國人が兼ての內約を守り、其の將軍可武利をして三萬の兵を率ひ、齊都の救援に赴かしめたるなり、之を見るより城中の人民は、堞壁上より旗を振り、讙呼の聲城中を動しけり、是時より城兵と雅兵との間には、常に連絡を通じ、東方の一隅は先づ圍の解けたるが如き有樣なれば、最早や外より糧食を得るの便を開き、城中にては百萬の援兵を得たるが如き思ひを成せり、(雅人齊都を救ふことは具氏遇氏防氏)

雅典の援軍は、唯齊人に力を副るの目的にて其の兵數少なければ、本より斯軍に向て戰を挑むことなく、城の東方に壘柵を構て之に據り、遙に城兵と連絡

を有つのみ、又城兵も大擧して斯軍を攻擊するの力無く、唯時に夜打ち朝掛けの小戰あるのみなりき、斯王亞世刺も亦た乘ずべきの隙なしと思ひしにや、敢て急に兵を動さず、三國の兵は空く睨み合ふのみにて三十餘日を經たりけり、此時斯波多の諸將は、戰略會議に於て亞王に向ひ、數百年來列國に盟主たる斯波多が新興の一小國なる齊武に臨み、今春一たび大兵を出して其の志を遂げず、空く兵を旋へせしは既に列國の笑ひと爲れり、然るに今、王自ら大軍を帥て此地に臨みながら、又爲すことなく空く此儘に打ち過ぎ、嚴寒の候に至て止むを得ず再び兵を旋へすが如きことあらんには、列國愈々輕悔の念を生じて覇主の威是より衰へん、因て今戰機を考るに、先づ我が全軍を以て城外なる雅典の援兵をだに走らせなば、齊都の孤城焉ぞ陷落せざることを得んや、雅兵の水戰に長じて陸戰に拙きは天下の知る所にして、其の兵數も亦た僅に三萬に過ぎず、若し我軍全力を傾て之に向はば、彼を走らすに何の難きことかあらん、我王願くば速に之を決せよ」と述べしが、王は之を聽かずして曰く(諸將

戰を請ふことは具氏遇氏）

假令ひ雅兵は少數にして且つ怯なるに似たるも、其の將軍可武利は久しく比西亞の爲めに小亞細亞に戰て兵事に長ぜし老將なり、加るに城中の齊兵亦た必ず之と力を合すべし必勝の見込なきに危險を犯すは得策にあらず

と日頃の豪邁なるに引き替て、思慮深きに過るが如き辭を聞きしより、諸將は甚だ不本意の有樣にて、此日は散會したりけり、然るに翌日も亦た會議に於て、頻に雅兵を走らせんと請て止まざる中に、將軍安多留の如きは王に向ひ

斯人は齊人に練兵の術を敎る爲慕知に赴きしとの世評あるを聞き玉はずや、是の諺は、我軍が常に齊人に對して練兵に類する小戰を爲し、大決戰を以て勝敗を定ることなき卑怯の有樣を嘲る者なり、若し此儘にて過る程ならば、早く和親を結び玉へ（具氏勢氏の希臘史）

と且つ歎き且つ憤りければ、亞王今は止むを得ず、遂に開戰をなすべき旨を答へける（同上）

次日詰朝遙に城上の塔尖より城外を望めば、斯人其全軍を壘營の前に整列せしが、暫くして又之を二團に分ち、一團は遙に城外の雅兵に向て運動を始るると同時に他の一團は雅兵に連る城門を指して進行せしは、是城兵の打て出て雅兵に合するを抑遏するの企とぞ知られける、既にして斯軍の一團六萬餘人、將さに雅兵に向て進行せんとす、此時雅兵も亦た早く敵の擧動を察せしにや、直に其營前に全軍を整列し、敵に應ずるの備をなせり、暫くして斯波多の精兵六萬餘人、其の戰旗を朝風に吹き靡かせ、粲然たる軍裝を旭日に煇かせ、隊伍を亂さず整々として次第々々に押し寄せたり、此時、雅兵も亦た數聲の喇叭と共に運動を始め、陣營を進むること百歩計りにして、小高き丘に押し登り、此所に駐りしは、地形を相して敵を引受け、決戰を試むるの覺悟とこそ見へにけれ、斯兵尙ほも進行し、雅兵を距ること八百歩の地に至りしとき、玆に二段の戰隊を形つくれり、第一戰隊は其兵數二萬餘にして、第二の大戰隊は其の兵凡そ四萬餘、第一戰隊を離るゝこと二百歩計りを隔てたり、是れ蓋し第一戰隊を以て

兩軍兵馬馳驟之狀不須直寫却從傍觀者眼裏看出筆致自異常調

先づ猛擊衝突をなし、敵の隊伍の亂るゝに乘じ、四萬の大戰隊を以て大攻擊を爲し、一舉に雅兵を敗るべき戰略なりし、すはや、今ぞ兩軍の勝敗如何ならんかと息を屏めて望み見る中、斯軍の第一戰隊は徐々として進行し、彼の丘上に長戰隊を連ねて待受けたる雅兵を目掛け、敵の戰隊を距ること四百歩の地に至るや、忽ち變じて早足と爲り、二百歩の地に至るや否や、忽ち變じて驅足と爲り、二萬の戰隊長鎗を擬し大劍を揮ひ鬨を作て殺到せり、此時雅兵の戰隊の前面數重の兵士は、皆折敷て左手に楯を執て左膝に引付け、右手に長鎗を執て敵に擬し、其後列數重の兵士は投鎗弓箭を執り、蕭然と靜まり返て扣へたり、斯波多の第一戰隊は、此時怒濤の打寄するが如く逼近し、其の距離十歩に垂んたる時、雅兵は乍ち鬨を作り、待ち設けたる後列數重の兵士が、一時に發射する亂箭投鎗雨の如く、前に進みし斯兵の一列は、恰も屏風を倒すが如く、過半は地上に倒れたり、後列なる兵士等は少しも屈せず、傷者の體を躍り超へ、喚き叫て突進し、斯兵の胸甲幾んど雅兵の擬したる長鎗に達せんとするとき、又も

叙戰極精極明左史以外別具手眼不獨本回而已蓋從泰西文法得來

幸有此事

や後列なる兵士の投鎗亂箭雨の如く下りしかば、斯兵は將棋を倒すが如く、又も地上に倒れけり、流石に强勇なる斯兵も、亂箭投鎗に耐へずやありけん、二萬の戰隊四散八裂し、隊伍を亂して引退く、是間第二段四萬人の大戰隊は、絶えず前進し來たりしが、今や雅兵の前面四百歩の地に至るや、疾驅して押し寄せ來る其の勢は、恰も數里に連る大波の岸陂を呑むが如く、あはや此の一隊の爲めに、今ぞ雅兵は押し破らるゝならんと見ゆる計りなり、然るに雅軍の戰隊は尙ほ一人の戰列を亂すものなく、靜り返て整列し、天晴れ敵の戰隊寄せ來れよ、又も亂箭投鎗を以て之を惱まし、ひるむ所に付け入て、一時に之を衝き崩さんと待構へたる有樣は、當り難くぞ見へたりし、然るに此時亞王は如何に思ひけん、俄に喇叭を以て戰隊を止るの令を下しければ、此時雅兵の前面既に二百歩にまで進みたる四萬の戰隊は、忽まち此處に止りしが、次で退軍の角聲を聞き、此の大戰隊は隊伍を亂さず整々として引き揚げたり、此時雅兵も亦諸隊を進退して、更に戰隊を組改めしは、又更に敵に應ずるの備へを爲さんと欲す

るなるべし、然れども此後斯波多の軍は別に何等の攻撃をも企てず、次第に全軍を其の陣營に繰り入りければ、此日の戰は止みにけり、此時亞王が退軍を令したるの所置は、諸將の中にて之を非難する者少なからざりしと雖も、兵機に通ずる識者は、却て之を稱賛しけり、又雅兵の將軍武氏が是時決戰の有樣は、大に其名譽を列國に得たり、又城外に於て雅、斯の兩軍斯く戰ふ間に一方に於ては、城兵の打て出で、雅兵を助けんとするあり、斯軍の之を妨るありて暫時の間爭ひしが、城外の戰終るを見て、戰を止めけり、此以來は雅、斯、齊の三軍容易に戰を交ることなく、廿日餘に垂んとせしが、雅典は又更に援軍を發して齊武を助けんとするの風評ある上に、次第に冬季に逼り、冱寒の候は兵を用ふる便ならざれば、亞王は齊都の急に拔け難きを察し、戰略會議に於て一と先づ兵を退ることに決し、遂に全軍を引き揚げ、雅齊兩軍の追擊に備る爲め、整然として出發せしは、天晴れなる振舞なりき、然るに亞王は、此役に又國人の志を達し得ざるを憂ひしにや、吳後禮、番蘇陀の二將軍をして三萬の

兵を率ひ、是頃齊武に通好の疑ある東境の小邦多那吳の都府を圍み、之を拔て東海岸に出で、東海鎭守の爲め幽美を航廻巡邏する海軍と合すべき旨を令し、自ら餘兵十餘萬人を統て、恙なく本國に歸着せり、(武氏死戰の陣を布き亞王進擊を中止する有樣は具氏勢氏の希臘史) 是より先き、多那吳の小邦は密に好みを齊武に結びしが、今回斯軍の來侵を蒙るに至り、急に使を齊武に馳せ、早く援軍を出さゞれば陷落旦暮にある旨を報じけり、齊武に於ては敵軍の引き揚げたるを喜び、城中に於て大に武氏及び雅氏を勞らひ、尙ほ諸名士は武氏と後圖を談せし後、雅兵をして本國に歸らしめたり、然るに今多那吳の急を聞き、若し棄て之を顧みずんば他日又好を通ずるの邦なかるべければ、是非共之を救はざる可らずと、即ち急に一軍を發せんとせしが、使者は頻に齊人に請ひ、有名なる一人の將軍速に來て城中の人民を勵まさゞれば、援兵の至るまで守城必らず覺束なきを述べにけり、是に於て衆皆巴氏を推して此任に當らしむ、巴氏は乃ち神武軍三百騎を請ひ、此小隊を以て馳せて、多那吳の都府に入らんと企

て、即日使者と與に齊武を打ち立ちしが、是れぞ巴氏の身の上に厄難の來るべき時なりし（巴氏多邦吳に赴くことは弗氏遇氏）

鋤雲云斯波多不得志於齊武者。於此二次。雖曰天時亦因人和而已。

學海云本回爲雅、齊同盟起源。威氏退軍。雅將來援。斯國攻齊武。理當有一場大殺。反

• 是斯軍與雅軍勇鬪。寫得如火如錦。描出威氏將略及斯王英雄並不從戰勝攻取處稱賛來。反從收兵罷戰處。歎美去。便知不是凡筆。

鳴鶴云本回爲齊武興覇之張本。

又云未排了一難。而又現出一難來。使他人叙之。恐不免錯雜紛厖之煩。我兄老手撇開。隨手寫出。叙事整然一絲不紊。

第八回　帝慈溪に健兒重圍を斫る　紅平湖に英雄奇士に逢ふ

三百の神武軍は、晝夜兼行して進みしが、多那吳の都府に近づくこと二三里の地に至りしときは、方に是日の拂曉にて朝霧深く立ち蔽ひ、呎尺の間も辨ずる

能はず、且つ本道の敵を避け間道を進みし故にや、遂に路に迷て頻に處々の溪野を彷徨せり、既にして旭日光りを放ち、大霧ほのぐゝと消散したる晴間より見渡せば、何ぞ圖らん其の前面には五六千の敵軍あり、又其の遙か後面には三四千の敵軍あり、此虎口に陷しを見るより、流石の神武軍も皆呆然たる外なかりけり（右一節大要具氏弗氏）

抑も此の溪野は帝慈と名づくる地にして、斯將吳後禮は已に昨日多那吳を陷れ別將番蘇陀をして、雅、齊の援兵に備る爲め、此の帝慈の野に陣せしめたるなり、神武軍は殆んど敵兵の中央に陷りし有樣なれば、霎時樹林の傍に駐屯せし中、早くも敵の斥候其の前後に徘徊せしが、忽ち夫れと悟りしにや、前面なる斯軍の一團は、三百の神武軍に向ひ、徐々として進行の運動を始めたり、此の地は左右に山脉連り、騎馬の通行自在ならねば、神武軍の一團が山を超て遁るゝには、其の馬を捨てざるべからず、退て走らんか、徒歩すれば敵兵に追ひ及ばれん、進で戰はんか敵兵の捕虜とならん、進退玆に谷りし失望の餘りにや、

巴氏の傍に在りし一兵士は思はず

今日こそは我々敵の手中に陷れり（"We are fallen into our enemy's hand."弗氏）

と嘆ぜしに、巴氏は之を顧て聲を勵ましたり

敵こそ我々の手中に墜ちざるや（"and why not they into our's."弗氏）

と云ひ終て整列の令を下だし、馬の頭を立直して、三百の孤軍を圓陣に形ちづくり、直に進軍を令したり、此方を指して押寄する敵軍に向て前進し、其距離百餘歩に迫りしとき、攻擊の一令と與に、神武軍三百餘騎、馬を躍らせ劍を揮ひ、恰も疾電の如く殺奔せり、兼て精撰せし勇鋭の壯士と肥健の良馬とを以て組立たる一團なれば、今其の疾驅して敵兵を突くに當ては、鐵蹄地に着かず、人馬與に空に躍るが如く見へたりし、斯軍は敵を寡兵と侮りしにや、整然たる戰隊をも結ばず、不規律に前進せしが、今や三百の神武軍は、其の中央を目掛けて勢ひ猛く衝突し、遂に之を押し破りしは、恰も堅嵒が波浪の間を進むが如く見へたりし若し尋常の將軍なりせば、敵軍を衝き破りしを幸ひに、兵を纏め

帝慈一捷其功用只在到着是數句以啓後面會盟之端故叙其戰狀淡淡歸去不另假鋪張甚有見解

て走るべきに、兵機を察するに敏なる巴氏は、敵の中央を突過せし後ち、又三百騎を取て返し、戰列亂れて混雜せる斯兵の間を、用捨もなく縱横に蹂躙しければ、向ふ所披靡せざるなく、一時間を出でずして敵軍四方に散走し、齊兵戰野を占めたりけり、此の戰に齊兵は、敵將番蘇陀をも討ち取りて意外の大捷を得たり、今齊兵が僅か三百騎を以て、數百年來野戰に於て曾て一回も寡兵の爲に破られしこと無しと稱せられたる斯兵六倍の衆を破りし評判は、忽ち列國に轟き、齊兵の壯武なる名譽は希臘全土に播これり、希臘史中に之を帝慈の捷と云ふ、（以上二節弗氏）

神武軍の一隊は、敵を敗るに及び、捕へ得たる敵兵より始めて多那吳の昨日已に陷落せしことを聞きしかば、今は進むも詮なしとて、是より道を轉じて戰を避け、齊都を指して引き揚げしが、他の斯軍は番蘇陀の大敗に怖れて、敢て跡をも追はざりけり、又神武軍は其の歸途國境に至りしとき、本國より發せし應援軍に行き逢ひければ、遂に事の及ばざりし旨を告げ、相伴て國都に凱旋せ

り、又斯將吳後禮は既に多那吳を拔きたれば、此の地に戍兵を置き、自ら餘兵を率て東海岸に引き揚げたり、

雅、齊二國の間に內約せる新同盟會は、兼て三百七十八年の秋晩に開くべき筈なりしに、當時は恰も斯軍の齊境を侵すあり、又雅典の援軍を出すあり、兩國多事にて空く今迄遲延しければ、此年三百七十七年の春初に於て、愈々公然と會盟を開くことに決したり、然れども會盟の延引しけるは、却て兩國の爲に意外の幸ひと爲りたりき、何となれば、去年兩度斯人が志を得ずして空く大兵を旋へし、其間齊人が能く城を守りしと、雅兵の勇敢能く斯兵に當りしと、少數の齊兵が帝慈に壯勇を現はせし等の擧動を見るに及で、舊來斯國を怨むの諸小邦は、幾分か斯國を恐るゝの念を減じて、雅、齊の賴むべきを信じ、漸く同盟を表するの傾きを生じたればなり、故に三百七十七年の春に至ては、兼て雅典の同盟と聞へたる知珂域內の諸邦及び沿海諸島の小邦は、勿論慕知域內の玻璨亞、高朗忍の二邦も亦同盟を表したり、是に於て春初に至り、諸邦締盟の全

權使節は追々雅典の都に到着し、齊武よりは邊氏多氏を委員として此の會盟に臨ましめたり、

雅典に集りし諸國の委員等は、互に往來して內議を定め、遂に舊時「デロー」の同盟規約を基礎とし、公會を開て大に合從の約を定む、其の大略は左の如し

第一　同盟諸國は皆其の和戰を與にすべし

第二　海上の戰事戰備は總て雅國に委托すべし

第三　海軍の戰費は各邦人口の多寡に準じて之を供給すべし

第四　陸地の戰には各邦の人口に準じて軍隊を出だし、軍器糧食は自ら之を支辨すべし

第五　同盟國の間に生ずる紛議は同盟會に於て平和に曲直を決すべし

第六　若し雅典人民同國の公會に於て此の同盟規約に違反するの發議を爲す者あらば、同國は直に之を放逐の刑に處すべし（此の最後の條は雅人が前年「デロー」の會盟を破りしの罪を謝する爲に自ら請て故らに之

一句似唐突無交涉抑內政不振外威不揚況租稅民命所繫此沿道之本莫爲先乎今雅典內有化行令擧如此外執一方牛耳偶得如彼自不然作者註得極張極緊

を盟書に載せたりと云ふ、（雅典同盟及び條約は具氏）希臘史中にて是の會盟を指し、之を三百七十七年の雅典同盟と云ふ、此年雅國に於ては又其の內政を更革し、租稅賦課の新法を定めたり（具氏）斯く滯りなく會盟を終り、各邦の使人各々散歸するに至りしかば、齊武國人の喜びは實に一方ならざりけり、是れ蓋し今迄は一國孤立して大敵に抗し、屢々危亡に瀕したりしに、最早や向後は諸國の同盟兵を得て、其の危殆稍々減少するを得べければなり、是に於てか、齊人は益々內政を整へ益々兵備を修めたり、

巴氏は此年の春其國に執行せし一大祭の時に、都人の競車を賭するを見て、獨り心に思へらく、多數の馬を駕したる競車の意外に疾走するの速かなるは、是れ各馬が其の伴あるを以て相慰め相勵むが故なるべし、是迄神武軍は其の數幾んど千人に上れりと雖ども、常に廿人の小隊に分て之を各團に分配するが故に、其の働き嘗て著しきことあらざりし、若し之をして一大團を爲し、常に相合

支那春秋時多用車戰車則使馬牽之馬之用舊矣本朝源平織豐亦皆以馬爲兵之首第保建之際士專習騎射元天則戰成肉薄而捕繫馬

するの働を爲さしめば、其の勢力豈に一層大ならざらんや、去歲帝慈の戰に三百騎が大敵を敗りしも、畢竟其の一團を爲し居たるが故なり、然らば之を諸軍に配賦するより、寧ろ別に一軍を爲さしむるこそ大利あるべしと、遂に是議を國人に說きしに、多數の同意を得たりけり、之れよりして神武軍は從來の如く他隊に混ぜず、別に一隊を爲すに至れり、又是後其の兵數を增し、一三年を出でずして遂に六千人に上りしかば、神武軍の偉功益々著はる（右一節大要具氏）

又威氏の議に因り、是年より齊人大に馬軍を起こすことを力め、其の北境冀刺の野を以て草料場と爲し、又法斯に隣る未墾の山野を以て、總て馬軍を養ふの地に供したり、是迄の戰に斯人は專ら徒卒を用ひしが、其兵勇猛にして戰鬪に長ずれども、進退甚だ速かならず、且つ步兵の割合には騎兵の數甚だ少きが故に、今齊國に於て多く馬軍を養はゞ、其の進退の迅速を以て敵の短所に乘ずるを得べければなり、又是の馬軍には、尋常の騎兵の如く單に馬上の戰を習はし

乃以爲馳騁變之具其用稍至近世戰法一法泰西銃砲盛行短兵接鬪之事甚衰且我邦之爲地多山少野不可縱展蹄故馴致今日其用益希然臨機能奏速效遠貴間固莫馬若陣馬作者假威波能寫出馬威之用最覺深切帝慈溪之奇捷功在騎兵弗拉太之大軍勝功伏後應使前威波能之議

むるのみならず、兼て歩戰を學ばしめ、其馬は專ら遠所に速達するの足脚に代るの用を爲さしめんとす、是れ戰略に於て、遠地に進退の速なるは敵軍の離合に乘ずるの大利あるを以てなり、是時よりして齊人は專ら馬軍を養ふに心を用ひしかば、數年ならずして、同國の兵は他國の歩騎の割合に比較して、馬軍の數甚だ多かりける、凡そ此時代に於ては、普通の歩騎の割合は歩兵十の九に居り、騎兵は十の一に居るに過ぎざるに、獨り齊軍に於ては騎兵の數十の二より三の間に上るに至れり、又ユーリプスの東北海には造船所を起して戰艦を造り、且つ商民の爲めに、海上貿易を營むの妨となるべき事柄を廢して、自由隨意に其の力を振はしめ、以て國民殷富を致すの道を開きけり、

威氏は壯武の子弟をして、勇を養ふ者の最も陷り易き傲暴の習俗を避けしめんが爲めに、時としては美術を以て其の心を緩和せしめんと欲したり、齊武は古より吹笛の樂人を出だすの地にして、此頃雅典に行はるゝ美術とは大に同じからざる所あり、何となれば、同國に於ては國人專ら唱歌を學び、齊武に於ては

不偶然至第六回

此悉皆斷殺文字幾乎忙了讀者使有疲勸之意故忽假笛管典事作游心流韵副目之地猶渴騁儒雅風引出一梅子林

國人多く笛管を弄すればなり、故に雅典名士アルケビアデスが齊武に行はるゝ吹笛を學び、己の技の拙くして成らざるを見しとき、其の管笛を地上に抛ち（右一節は具氏）

齊人は天賦の口舌を用ゆるを知らず、故に外物を假て曲調を爲すのみ、雅典の人民は口舌能く美妙の音を發す、此の外物を用るを要せず（同上）

と怒りし一事にても、二國の好尚の同じからざるを知るべし、又齊人が笛を弄するも偶然ならざることにて、齊人の笛は多く蘆幹を以て之を製する者なるが、笛管に用て最上と稱せらるゝ蘆幹は、齊都を離るゝこと遠からざる紅平と云へる大湖に產生せり、威氏は唱歌吹笛等の技藝に熟達せし人なりしが、殊に吹笛に名あり、（以上具氏）一日威氏は邊氏具氏等と共に紅平湖上の蘆幹を撰で笛管を製し、兼て水鳥を獵りせんとて扁舟を湖上に浮べたり、時方に春初にして、猶ほ輕寒の天なれども、水面風無く暖日微溫を與へ、湖光の碧瑠璃恰も一面の鏡に似たり、去年は終歲幾回となく國を憂ひ身を危ふし萬死の中に在りけるに、

今は同盟の援を得て稍や急難を免るれば、心中自ら愉々として、諸名士は四方の風光を賞しつゝ、船を蘆荻の間に進めしに、遙に一羽の水禽の波上に浮游するを認めたり、諸名士は斯くと見るより、いざや我れこそ射留めんと、各先を爭ひつゝ、切て放せし二三の箭は、如何にや爲しけん、狙ひを誤り、鳥の前後に翦れたれば、鳥は箭風に驚きつゝ、ぱつと虛空に飛立ちしが、水面五丈計りなるとき、忽ち岸上より飛箭あり、射て鳥翼を貫きしかば、鳥は羽箭を身に帶びながら、飜々として波面に落ち來れり、思ひも掛けぬ射術の巧に、皆々面を見合せて、何人ならんと眺むる中、岸上に立ち現はれしは是れ一人の少年にて其の年廿二三歲、青眼豐頰輕髮楚々として面は美玉の如し、手に角弓を把り腰に羽箭を挿み、船上の諸士に向て遙に禮意を表したり、畢竟此少年を誰れとか知る、

叙得儒雅風流之甚

叙得儒雅風流之甚

由采菅出現泛舟由泛舟出現射禽由

鋤雲云。帝慈之戰。巴氏用兵如神。遠過鉅鹿之楚將。宜乎能獲此奇捷也。

學海云。本回爲雅、齊兩國盟約。遙與後第十四回希臘全國和平會暗相炤應。彼有所

偏私。此則純然公平。以威氏爲筒引線。故至末段點威氏游湖一節。使讀者知其任和平會。現出不撓不屈大節。全自從容雍與的氣象來。或以爲呼起利宗明楔子。豈深於小說者。齊人善笛。雅人善歌。其僻好不相合處。微露十三回失和兆候。輕々着筆。不知者以爲閑話頭。

射禽出現少年俊傑遂出現下回好話頭文心之妙似牽繭絲似脫筍籜

巴氏調騎一節。是爲十回齊武騎兵擊殺斯將法美伏線。

鳴鶴云。此回分爲四節。第一節。寫巴氏以寡破衆顚末。第二節。寫與國締盟事情。第三節。寫齊武張皇兵備。第四節。寫雅、齊各有別樣文雅風致。而輕々看去則如每節不相連接。及仔細玩索。始知節々呼應。脉絡貫通。蓋有巴氏克敵之事。而逼出與國締盟。有與國締盟事而逼出張皇兵備一事。兵强國安。而名士胸間自有餘裕。是所以入光風霽月之境界也。

第九回

大志を語て少年援助を請ふ
往事を說て慈母二女を戒む

諸名士は舟を停て岸に上り、彼の少年に近づきしが、邊氏は先づ詞を掛け

一問何等儒雅

一答何等儒雅

衣服其の他の容子を見るに、我が國人とは思はれず、抑も足下は何くの人ぞと問はれて少年は慇懃に禮を爲し

某は天地の間に身を容るべきの所なく、四方に流寓漂泊して、轉逢飛絮に異ならざる亡國の民に候ふなり、諸君も兼て知らるゝ如く、一たび巴本涅斯に雄飛せし米世の共和政國は、殷富著名の大國にて、建國以來幾百年を經たりしに、隣邦斯波多の暴威に壓せられて、或は地を割き境を削られ、國勢次第に衰へて、遂に斯兵の圍を受るに至れり、アリストデムスは國の爲に愛女を殺して神を祭り、アリストメニスは靈狐の助けを得て幽穴を脱し、諸名士が千辛萬苦の甲斐もなく、幾十回の苦戰の後、遂に斯人の爲に滅せられ、城地は毀れて丘墟と變じ、重立たる國人は、或は戰死し或は逐はれて家を喪ふ瘦狗の如く、老幼婦女を携へて遠く他國に遁走せり、我家はアリストメニス族にして、父は都城の陷るとき、身を以て國難に殉せしが、其の時某は尚ほ八歲の稚兒にして、二人の妹と諸共に、母と家僕に携へられて、國人と與に

兩妹先在此一點出

前回射水禽後回射斯王得這一句確有實落不是失口輕慢語

へスパリテスに走りしに、又も此地を斯人に逐はれ、夫より留吳に身を寄せたりしが、斯波多の屬邦なれば、此所にも身を置き難く、遂に雅典に赴きたり、流石大國の人民は人の不幸を憫むの情深く、特に善く我が亡民を遇せしかば、母子四人此處に足を留めて、思はずも十餘年の歲月を過したり、某は長ずるに及で、過ぎにし國運を知りしより、亡國の怨みに勝へ難く、やはれ、如何にもして敵國を挫き、一たび我が米世の廢國を興さんものと思ひ詰め、日暮朝夕忘るゝの暇なく、獨り心を焦てども、微力の身なれば、心に任かせず、寧ろ遍く諸藝を學で時機の至るを待たんのみと、是より藝術を修めしが、不肖の身なれば長技なく、僅に射術を人並に心得たるのみ、數年以來熟々希臘全土の形勢を察するに、斯波多と與に二覇國と稱せられたる雅典も、今は人心萎靡して奮はず、何れの國に賴りてか我が回復の素望を達せんと、空く歲月を過せしに、圖らざりき當國に於ては、諸名士が民政を回復して斯國に抗爭せらるゝと聞き、今ぞ天の米世の遺民に祚ひするの時至れりと雀躍し、早

如是儒雅小集豈可無詩以咏之
中似利宗明舟擬諸君孤
箭寥寥末報怨零丁孫王休問邦家相逢復雨草滿繁煙事
縱流文彩分合邊圉春色靜江山更知君游名從賢母養生平教養可知極
鷄群舊國風壓鶴野來明諸君贈利宗
一分便作第十吉之地由射術出身作者把個射術始終利宗明故不覆一個銳層
回分與二女占身回迨吉之由射術泛身反
醸成第十三乃回

くも當國に來り投ぜんとは思ひしが、其の以來打續て斯兵の當國に迫るあり、境上國内處々に於て、兵馬の對戰止むときなければ、尚も忍で時節を待ちしに、當春に至ては稍々小康の有樣となれり、今ぞ然るべき時機なりと察し、雅典の都を立出で、單身當國の都に立ち入りしが、未だ諸名士に謁を請ふの便宜を得ず、如何にしてか一たび面謁の榮を得て、我が回復の素志を吐露し、其の援助を請はんものと、日々其便宜を窺ひ居たりしに、今日湖上に遊ばるると聞きし故に、朝疾くより諸君の跡を尾し、折もあらば名を通ぜんと、見へ隱れに慕ひ來しに、今圖らずも拙き射藝が手引となり、諸君の問を蒙りし我心中の悅は、之を辭に述べ難し、幸に諸君の憐察を蒙り、貴國の卒伍に加へられなば、斯波多に對しては身命を惜まず戰ふべし

と答ふる言語動作を熟々と打ち眺むるに、其の人品賤しからねば、諸名士は大に愛憐の情を催し、尚ほ其の經歷及び米世の舊都の有樣などを問ひにけり、是日諸名士は、尚ほ終日湖上に遊び、彼の少年を伴ひ歸りしに、雅典人の齊都

に在る者の中には、少年を知る者尠からず、素生も甚だ分明にて、且つアリストメニス族は米世の名族なれば、諸名士は別けて其の人物を愛せしが、威氏は其少年に見所ありと見へ、己の家に寓居せしめしに、少年は益々後來の望を生じ、其喜び一方ならざりけり、此の少年は其名を利宗明と呼び、前の物語に云ひし如く、米世の名門アリストメニスの系統にして、國敗れ衆散ずるに及び、母と與に雅典に走りしが、甚だしき困乏の生活を爲すに至らず、且つ同國の名門に舊くよりの交際も少なからざる程なりき、又其の母は利宗明のみならず其の二女にも充分の敎育を與へけるが、雅典は素より文化の國なれば、子女の敎育には甚だ便宜を得たりけり、利宗明は其の性活潑にして、廣く書史に通曉し、就中射術にては其の妙奥を極め、啻に百步柳葉を穿つのみならざりき、利宗明は威氏に來寓せるより、又廣く諸名士に交りしかば、益々其の薫陶を蒙て大に人品を進め、諸名士も亦た其の秀拔を賞して頗る之を引立ける、唯威氏は利宗明の氣力の勇銳に過るを憂ひ、時としては之を戒ることもありしとぞ、

巴威兩人是場中首優故作者把兩人智德功業每双々相敵彼此不遜一格而前篇是把巴威做主後篇是把威做主比一部大勢也今威家中光景忽從利氏眼裏寫出竟趁勢叙去便與前篇第三回巴家中光景遙遙映

利宗明は已に齊都に其の身を安ぜし後、其の母と二妹の雅都に離居するを憂ひ、之を齊都に迎へたり、是より先き威氏の弟ボリムニスは已に妻を娶て別居し、威氏は利宗明と唯だ兩人家に在るのみなれば、乃ち利宗明の母妹をして、先づ其の家に寄寓せしめたり、利家の二女は、姉を貞納と云ふ、此時芳紀方に廿一にして、容姿殊に麗はしく、性亦た極て溫和なり、妹を裕綺と云ふ、妙齡方に十八にして、姉に比すれば容色稍や劣れりと雖ども、亦た醜きにあらず、性頗る快活なり、利氏の母妹は威氏の家に寓せし以來、つくづくと家内の樣子を見るに、邸第廣濶なれども飾りなく、日用の家什を整備して何に不足なきも、絶て奢侈に屬するの調度なく、又家從奴婢のみにて、別に家人もあらざれば、時を經るに從ひ、主人の爲に丁寧に其の家事を辨じけり、

威氏は極めて寛厚沈重の人にして、且つ勤嚴なれば、其の日々の行狀は、恰も兵營中の兵士が喇叭の號令に從て其の起臥眠食を爲すが如く一定し、早朝に寢を出るの後、若干の時間を以て來賓に應接し、其後若干の時間を以て、或は政

對斤兩正相稱讀者莫粗心了過

似二女到頭不可望迨吉者妙絶妙絶

府に出で、或は議會に列して公務を措辨し、日暮前に至れば私邸に退き、若干の時間を以て四方より到來せる書札を閲し、報書を作り、其の後若干の時間を以て、遊歩或は武技を演じ、晩餐の後夜に入れば來訪せる親友諸名士に接して快樂を取り、客なければ或は書を讀み、或は兼てより親しき哲學家の先輩スピンタス、シンミアス等を延て、理學を談ずるを樂みとせり（此のシンミアスと云へる人は彼のソクラテスの學友なり）而て其の家事は之を家宰に托し、或は利氏母妹の爲すに任せけり、去歳の如き國難の時は格別なれども、兵馬の事なき平時に於ては、日々唯是の行狀を繰り返すのみにて、更に他事他念なかりけり、然れども諸名士の中には、威氏の家に婚嫁に相應なる妙齡の二女あるを以て、或は威氏が其の意を何れにか屬し居るやを疑ふものなきにあらざりし、然れども威氏は唯是れ勤嚴寛厚の君子なれば、他人が如何に我を疑ふやと想像する心だにもなかりけり、假令ひ落花意ありとも流水情無し、焉ぞ之を載せ去るべけんや、左り乍ら、人を評するは常に己の心を以て之を忖り、本人の眞意を

作不了語正妙使讀者想殺

母氏戒諭兒女殷殷切切情意曲盡而中帶一種凜然不可犯之氣極見其賢德明識即所

察せざるは、世上の慣ひなれば、此の評判は次第に親友諸名士の間に廣がりけり、又巴氏邊氏圭氏吳氏等を始め、未だ匹偶なき諸名士の絶えず此の家に出入する者多く、貞納、裕綺の二女は、其の席に陪することも折り々々なりし、若し二女をして其の心に撰ぶ所あらしめば、常に寶山珠海の中に在るが如き心するならん、

一夜更深け、威氏の家にては家人皆房に入り、將に寢に就かんとする者多かりけるとき、利氏の母の居室と見ゆる奥まりたる一間に、母子三人燈下に在て相對し、何事をか物語る樣子なりしが、貞納、裕綺の二女は最と畏りて俯き居れり、其の時母は柔かに辭を繼ぎ

兼々語り聞かする如く、我家は本と米世の名族にて、御身等の父君が此世を去られしも、唯其の覆滅を支へられんが爲めなりき、然るに國運拙くして遂に果敢なく亡びたり、我身は諸方に漂泊して、御身等三兒を流離の間に養育せしが、何卒して再び故國を恢復し、遠くは地下の祖先に對し、近くは國難

以表兄妹才節自有庭訓之素也

母子境遇却從戒諭語中看出作者慣手筆法

に殉せられし父君の靈を慰めんと、辛難艱苦の間にも、子を敎ゆるに至便なる雅典の都に止りて、利宗明の敎育に深く心を用ひたりしに幸にして御身等の兄は深く諸藝に通曉し、子を譽るにはあらねども、普通の人には超出せり、是れぞ先祖と父君の全く地下に守らせ玉ふ故ならんと、益々後來を樂む中に、圖らずも亦た先き頃より、當國の諸名士に交を結び、利宗明は殊に深く諸名士に愛せらるゝに至れり、今日こそ其勢危けれども、若し幸にして當國の運開け、斯波多の勢力挫けなば、當國の諸名士の力を藉て、故國を恢復せらるゝの樂しき時節もあらんかと思へば、我身も惜しからぬ命を存らへ、唯一たび此事を見て目を閉ぢんものと思ふぞかし、斯れば利宗明の諸名士に愛せらるゝは、我身に取て此上の快樂はあらぬぞかし、之を思ふに附けても、恩義の大なるは當家の御主人にて、當國の壯き人々中愛せらるゝ者も多かるべきに、利宗明のみか我々まで此の家に迎へられ、安穩に日を送る其の惠みは幾何ぞや、又巴比陀君も御主人に次ぐ恩人にて、兄利宗明は事毎に其引立て

妙使讀者想殺似二女到頭不可望迨吉者妙絶妙絶

一語冷然處女心中絶苦絶闕的形容摸寫如睹

を蒙れり、二君に對して我々母子が斯る厚恩を蒙る上に、若し萬々一御身等兩人の心中にて、此上に又何等かの望を起さば、恩に狎るゝと見下げられ、我々三人のみならず、兄利宗明までも疎まるゝに至るべし、若し左もあらば阿兄の恢復の大志を敗り、我身にも不幸なるのみならず、地下の祖先と父君も必ず怒り玉ふべし、世に婦人の心ほど淺ましきものはあらず、御身等兩人に限りては、斯の如き事なきは飽まで承知するものゝ、案じ過せる親心より、斯くは戒め置くものなり、必ず々々忘れても非分の望みを心に起し、恩人に疎まれぬやう心を留て給仕し玉へ、尚ほ語り度きことあれど、最早や夜も最と更けたれば、今夜は早く休息し玉へ

と母の辭を聞きしより、二女は唯畏りたる計りにて、辭少く暇を告げ、母の居房を立出でしが、二人互に面を見合せ、すごゝゝとして各臥戸に入りにける、

鋤雲云。萬綠叢中紅一點。惱人春色不須多。英雄志士仁人學者。許多錯出爲編。時點出令南、貞納、裕綺三淑女。文情極不索莫。學海云。本回爲米世遺民利宗明出身。伏第十二回狙擊斯王一節射。法精妙。亦爲狙擊。下篇種子。

貞納、裕綺二女子。只爲使威、巴二氏不寂寞枯淡。沒甚麼關係。然不靡不淫。幽閑貞靜。嫻於教育摸樣。描得妙絶。

鳴鶴云。巴、威二人。作者意中常欲遙々相對。故其叙事亦常彷彿相準。前篇爲巴氏立傳。後篇爲威氏立傳。故前篇第三回。寫巴氏家園與其風采。後篇此回却寫威氏家園與其風采。前日才子寓於佳人家。今日佳人寓於才子家。前篇有巴氏唱義於雅典謀恢復大議論。後篇有威氏爭禮於斯波多抗斯王大議論。皆是相準而對者。讀者不可不知。

又云。此回所叙。有情有景。而藏許多脚色在其中。寫出一少年則爲他日狙擊斯王伏線。寫出二佳人則爲後年配名士伏線。寫出米世則下爲威氏立功伏線。可見作者不漫下筆。

第十回

戰略を定て馬軍驍將を斬る
東海を爭て艦隊能季に戰ふ

此年齊武に於ては、總統官加倫二年の任未だ滿たざれども、故有て其の職を辭せしかば、國人以斯明氏を推して之に代ふ、是の年初夏斯國の兵又齊境に侵入せり、是より先き斯人は兩度大兵を擧て齊都を圍みしも、毎に志を果たさずして引揚げ、多少其の國威を損せしを憤り、且つ齊武が雅典同盟を連ねて他日の憂を爲さんことを慮り、今一度大軍を擧て、是非とも之を討滅せんと議決せり、然れども今度は希臘中部に雅典同盟の在るあれば、若し去歲の夏の如く、兵を米峨の地より進めんと欲するときは、雅、齊兩國兵を合して必ず巍巍嵩の險を扼し、我軍を途上に抑留するの患ひあり、故に爾後大兵を齊境に進むるには巴本涅斯の北端なる周季の域より海路を取て哥侖の入海を渡り、法斯の南岸なる匂令の灣に上陸するを以て最も捷程なりとす、因ては先づ三萬餘人の一軍を發して、法斯の域内に在る斯國の屬邦留維に屯し、先づ大軍進入の地歩を

作り、以て齊人が匂令港を奪ふを妨げ又隙を窺て齊境に侵入し、各地の要砦を拔て以て大軍進入の路を作るべしと、乃ち老將法美を擧て將軍と爲し、直に三萬人を率て不意に匂令の灣に達せしむ、(此法美と云へる老將は則ち先年彼の齊武の奸黨と諜し合せ兵力を以て不意にカデミーを奪ひ諸名士を壓したる人なり)法美は已に兵を匂令灣に渡たし、戍を留維に置き、已に此地を本據とせしかば、時機に乘じて齊疆に侵入せんと企て居たり、又齊武は常に若干兵を疆上の要砦に置き、以て非常に備へたりけるが、此時西境の鎭臺に將たりしは吳氏圭氏の二人なりき、(法美、齊を侵すことは遇氏具氏防氏)

斯將法美は、哥侖の入海沿海の諸邦及び切比、弗拉太等の兵を募り、之を其の部兵に合して壯士五萬餘人を得たりければ、今や齊境を侵すに足れりと勇み、遂に齊境に入て齊武の鎭守兵と戰を交へしが、齊武の兵は其の數甚だ多からず、衆寡の勢ひ敵し難きに、加るに戎事に長ずること未た斯兵に若かざれば、一處の險を奪はるれば又退て他險に據り、僅に敵を防ぎながらも、一歩々々と押し

詰められて、次第々々國都の方に引揚げたり、斯軍は之を尾躡して深く齊國の内地に入りしが、此時は恰も麥秋なりしかば、斯人は兵を所在の村邑に放て大に穀物を掠め、之を留羅の地に送て他日の軍糧に供しけり、齊武にては此報を得て驚かざるにあらねども、去歳兩度の敵軍に比較すれば、此度は唯敵の偏帥の侵入したるに過ぎず、且つ敵將法美は蘇方度等と幷ひ稱せられたる敵國の驍將なれども、其の兵數甚だ多からざれば、齊都を合圍する能はざるを察し、一國の覆亡を憂る程には至らざれども、去歳已に斯人の爲に田實を掠められしに、今又麥秋の時に於て敵兵に之を掠畧せらるゝときは、其の困難實に大なれば、直に一萬五千餘の兵を發し、加氏を擧て之に將とし神武軍一千騎を以て之に副へ、急に圭氏吳氏等の軍を援けしむ

此時斯將法美は切比の地より齊都に近進し、兵を放て各處を掠めし後、東に轉じて屬邦弗拉太に入り此地より今又將に齊境に入らんとす、齊將吳氏圭氏等は一萬五千餘の兵を以て之を弗拉太の境上に抑遏せんと力め、方にメイナリュ

ス山の險に陣し、斯軍は少し隔て之に對する山上に陣したり、此時加氏は國都より一萬五千の兵を率て到達せしかば、則ち戰畧會議を開きしに、唯此の險地を扼して敵を支へんとの說多數なりしが、加氏は策を建て曰く

敵軍の力は唯敵將法美一人の身に在り、若し此人をだに打取りなば、敵の同盟諸邦の軍士は勿論、斯兵と雖ども忽ち力を失て疆上より退くべし、殊に彼の法美は先年我が奸黨を助て國人を苦めたる張本人なれば、是非とも之を打ち取らざる可らず、彼者の人と爲りを聞くに、勇有て智少く、其の驍勇を恃み、陣に臨む毎に必ず壯士を從へて前頭に進むと云ふ、然らば今敵軍と會戰を試み、敵の前進する一部の兵を鑒殺せば、必ず法美の首級を見ん、因ては明日山下の野に戰ひ、一千の神武軍と二千の馬軍とを以て、遠く我か戰隊を前面に列して本隊より遠く進ましめ、法美を誘ひ引包て之を打取らしむべし、斯くして敵の前進せる一部を鏖殺し了らば、再び軍を山上の險に引揚て、全軍總鬪の危險を避くべし、然らば事甚だ安全にして却て奇功あらん

も知れず

と、諸將皆な是の策を稱賛せり、

次日午時齊軍次第にメイナリユスの山より繰り下ろし、山下の野に全軍を整列し、本軍を距ること八百歩の前頭に於て、神武軍馬軍併て三千騎の一隊を備へ、斯軍に向て戰を挑むの狀を示したり、之を見るより彼の驍猛なる斯將法美は、又其の陣したる山を下り、五萬人を部伍して幾段に備へを立て、齊軍に向て押寄せ來れば齊軍も亦た徐々として進行の運動を起したり、兩軍已に距離を計て、互に戰隊を形ちつくり、相當らんと進むとき、齊武の前軍三千の騎兵は、一散に敵の前隊を攻撃せり、兩軍相ひ當ること雲時の後、齊武の騎隊は斯軍の歩卒に討ち惱まされ、本軍を指して散走せり、斯軍の前隊千餘人は眞先きに進て北るを追ひ、其の本隊に離れ先たつこと數百歩、尚ほも齊軍の走騎を追て進みしが、此時兼ての合圖なりけん、數聲の喇叭と諸共に、三千の齊騎一齊に取て返し、彼の本隊を離れて前進せし斯兵の一隊を目掛け、恰も旋風の如く殺到

せり、此時一千餘の前進せる斯兵は、遠く本隊を離れて其の援を求むる能はず、三千の精騎に掛け立てられて苦戰奮闘したりけり、(右戰闘大要具氏弗氏)

思ふ儘に敵の前隊を誘て之を猛撃せる神武軍の人々は、我れこそ敵將法美を打ち取らんと、敵軍にて冑鎧の華やかなる騎將を見れば、一々之を打取りければ、前進せる斯波多の勇兵も憫むべし精鋭なる多數の馬軍に蹂躙せられて、遂に抗戰すること能はず、其の本隊が急行して來り援るを待つ迄には、一千餘人全沒して、殆んど免るゝ者なきに至れり、

斯く前進せる斯兵の一隊を鏖殺せし後、敵の本隊とは戰を交へず、三千の騎兵奔電の如く驅け去て、齊軍の本隊の後ろに引き揚げたり、是時本隊も亦た徐々としてメイナリユス山の險に引退きしかば、斯軍は山下迄之を追撃したる後、齊軍に地形の便あるを察せしにや、或は又他に事故ありしにや、山下より兵を引揚て再び以前の陣營に歸りけるが、此の夜俄に兵を拔き、弗拉太の都を指して出立せり、之れ加氏の謀りし如く、驍將法美が勇を恃て前頭に進み、齊兵

古人云進人如不得已豈唯進人自進亦復然爾一

の馬軍の返擊に遭て戰沒したるが故に、敵の兵氣大に沮喪し、遂に其の屬邦に退きしなり、希臘史中に之を弗拉太の捷と云ふ、斯く加氏の戰略を以て斯軍を退けしかば、齊人は稍や安堵の思ひをなしけるが、唯斯軍の來襲の爲めに其の田實を掠められしは、救復し能はざるの大損害なりき（加氏法美を斬る事具氏弗氏等）

此年の秋より冬に至るまでは、列國の間稍や安寧の有樣なりき、此年の暮は齊國に於て總統官勢氏以氏が任期の滿るの時なりければ、卽ち總統官改選の投票をなしけるが、國人多數の意望は又多く威氏と巴氏とに歸し、兩人最も多數を得たりける、兩氏は一たび前に總統官を辭したれども、今や內外多事の日なればとて、强て國人の之を勸むるに因り、二氏も已むを得ずして、遂に總統官の職に上れり、

斯くて冬過ぎ、三百七十七年となりければ、齊人は益々內政を整へ軍備を治めしが、內治旣に定まりて人心に不滿なければ、公衙の令せんと欲する所は、命

旬極見巴威人品腦手足一喻甚深切苟人心內和而不國勢外盛者未之有也

を待たずして人民之を行ひ、尊卑高下に論なく、國人協合して國事に力むること、恰も頭腦の一々神經に命を傳へざるも手足自ら傷害を防ぐが如く、其の國勢の未だ盛んならざるに引き換へ、大國に抗し得るも、亦た何ぞ怪まん、然るに此年、春の末より淫霖打ち續き、夏の初めに至るまで殆んど絕ることなかりしが、慕知の七邦より法斯の諸邦は殊に此害を蒙り、麥苗腐敗して大凶年の有樣を現しけり、勿論一年の凶歲は凌くに難からざるものなれば、他の諸國は其の困苦左程にもあらざれども、唯齊武は前々年前年の兩度打續て斯軍に田實を抄掠せられ、隣邦より穀類を輸入して僅に饑を免れ居たりしに、今又斯る天災を蒙り、穀價非常に騰貴しければ、國人の苦みは實に一方ならざりき、然るに海峽を隔てたる幽美の地方及び哲瓊の北方は、豐熟と云ふにはあらねとも、左程の凶年にもあらざりければ、齊人は海上より穀類の輸入を多く此等の地より仰ぎたり、又二年前より東海に船艦を作り、人民の海上貿易も亦た隆盛に赴きしが故に、他國の船を使用すること以前の如くは多からざりき、然るに斯波

視禁輸鹽甲州則武田氏之武不可競可以見斯國乘機絕糧其衰運稍兆

多の海軍は、沿海の屬邦を鎭する爲め數を定めて是迄東海を航巡し、時として雅、齊の戰艦と戰ふことありしが、今や大に齊人を窘め糧食を奪ひ、後日大軍侵入の糧に供せんと謀り、斯國に於ては六十艘の艦隊を議し、仁洪量を以て之を提督せしめたり、仁洪量は此の艦隊を以て、先づミルトアン海を廻航して幽美の海峽に進み、頻に齊武の商船の穀類を輸送する者を抑へ、又隙もあらば備へなき齊武の東海岸を攻擊せんと企てたり、且つ斯國は令を幽美の諸邦に下だし、糧を本國に徵するを名として、之を齊人に賣り渡すことを禁制せり、是に於てか齊人益々窘む、(右一節は遇、防、具氏)

雅典同盟の列國は、和戰を與にすべしとの同盟規約に從ひ、此時雅典に於ては人民奮激して艦隊を艤し、齊人は又其の艦隊を以て之に合し、總數八十餘艘に上りしかば、雅人は覇權を以て之を統べ、武氏を以て此の艦隊を提督せしむ、是に於て武氏は先づ其の艦隊を彼留の港に屯しけるが、斯波多の艦隊ミルトアン海を廻航し、北のかたイクリボスの海峽に進みたりとの報知を得たりしかば、

直に艦隊に令して纜を解き、南風に帆を揚て、同くイクリボスの海峽に進發せり(同上)

同盟艦隊は航海數日の後、ユービヤの西岸なる能季の灣に近づきし時、遙に灣中を望めば、敵艦の帆影遠く波上に點々するを見たり、之れぞ將さに斯國の艦隊が此の灣中に碇泊せんと欲するの時なりし、同盟軍の水師提督は、直に號旗を以て進戰の令を傳へ、帆を開て充分に順風を受け、敵艦に向て殺到せり、敵の水師提督仁洪量は、之を見て船を灣中に泊せず、東南に向て前進し、早く諸艦を戰隊に列ねたり、既にして兩軍の艦隊相當りしが、同盟艦隊は風を負ひ浪に順ふの方位に列したる上、雅人は古より水戰に長じたれば、水兵水夫に至る迄船艦を進退すること手足の如く、三時間餘の激戰を經て、同盟軍は斯波多の戰艦四十九艘を擒にし、其中八艘は水夫等と共に分捕たり、若しも此時武提督が激く追擊したりしならんには、敵の全隊は悉く同盟兵の手中に墜つべかりしに、武氏は味方の兵士が波間に漂ひ船艦の沈沒せんとするを助けんが爲めに、

帝慈溪之役
促合縱之事
能季灣之戰意
堅合縱之意
映對在有意
無意之間

長く敵を追はざりければ、敵の殘艦廿餘艘は辛ふじて此灣中を遁れ去りにける、蓋し三十年前アルミニユースの水戰に、雅典の水師提督が大に敵艦を鏖にして戰功を立てたるとき、味方の破艦及び負傷せる兵士等を救はざりしとて、其後痛く國人の爲に非難されし以來、雅典の水師提督は國人の怒を恐れ、敵を逐はんよりは寧ろ味方を助くるに心を用ふるが如き有樣と爲りしかば、武提督も亦た斯の如くなりしなり、巴本涅斯の戰以來、之を以て始て雅典の海軍が斯人を破りたる勝利とす、今迄は海上に於てさへ、斯國の艦隊に壓せられしに、今此の勝利の爲に、雅人の胸中に始て舊時の海上の覇權を回復し得るの望を生じたり、又同盟の諸國も是の捷報を得てより、斯國の海軍を輕ずるの意を生ずるに至れり、唯憾むらくは諸史共に此戰の大略を記するのみにて、其の狀を詳記するものなし（具、防、遇氏）

同盟の艦隊大勝利の通報早く國都に達しければ、齊人の喜び云はん方なく、人々欣舞する其の中に、又幽美より數名の志士到着し、急に一隊の兵を假して民

議者或謂方
今日耳曼竊
抱此策賴四
隣皆强大無
以施之耳信
邪否邪

政黨に助けを與へんことを請願せり、抑是れ迄斯波多が希臘全土の諸邦を制せし手段は、多く各邦の政權を斯波多と通ずる其の邦の黨派に握らしめ、又自國の政體に倣て寡人政治を設けしめ、其の黨派を以て上位に置き、之を助けんが爲に保護の名を以て戍兵を置き、以て不平の人民を鎭壓し、斯く內外の力を以て屬邦に覇主の威を振ひしなり、前年齊武の奸黨を助けて政體を變革し、戍兵を置きしも、特に齊武にのみ是の方略を行ひしにあらず、是れ斯國か列國を制するの慣手段なりしなり、故に各邦の民政黨は、多く齊武、雅典に通じて民政の回復を望む者多く、彼の慕知の玻璨亞、高朗忍等が前きに雅、齊の勢を得たるに乘じ、同盟を表せしも、二邦の民政黨が勢を得て其の民政を復せしに因る者なり、幽美のカリシス、エレトリア二邦の如きも、常に斯波多の戍兵有て之を鎭すれども、尙ほ唔に專制民政兩黨の爭ひありしに、其民政黨は齊武が今日まで斯波多に抗し得たるを羨み、回復獨立の機會を待ち居たりしが、今や斯國の艦隊大に同盟艦隊の爲めに敗られ、本國より援兵を送るの道殆んど海上に

本回以糧匱
倣首尾針綴之
故以掠野之
役始以救仰
食之國終中
間著絕糧之
戰爲糉糉文
法如貫珠

絶えんとする有様なれば、民政黨は此時に乘じて回復の兵を擧げたるも、忽ち斯波多の戍兵に敗られ、民政黨は走て國都を離れたる險岨の地に立て籠り、僅に滅亡を免れ居れり、故に今數名の志士海峽を超て齊武に走り、斯くは援兵を請ひしなり、是時エレトリアに於て、民政黨が擧兵の企を助けたるは、カリバと云へる人物にして、此人は本と哲瓚に生れ、小亞細亞の諸邦を遊歷して、常に弱を助け强を挫き、就中民政回復の諸國には助けを與へたること多かりしが、今又義俠の心より幽美の志士を助け勵まして、遂に此擧に及びたりき（幽美、斯國に背くこと慈、具、遇、防氏）

海峽を隔てたる近隣のことと云ひ、且は當時糧食を仰ぐの地なれば、齊人は公會に於て直に之を應援することを決し、邊氏瑪留等をして五千の兵を率ひ國都を出立せしめけり、斯軍の艦隊既に敗れ、齊武亦た援兵を送ると聞えしかば、エレトリア、カリシアスの專制黨派は大に恐れ、斯波多の戍兵と共に碇泊せる斯軍の艦隊に乘り込み、斯國を指して走りけり、是に於て此二邦は遂に獨立の

國と爲り、其の民政を回復して、雅典同盟の内に加りける、斯れば今は容易に糧食の輸入を得るのみならず、ミルトアン海以北の海上に於ては、沿海の諸邦風を望で多く雅典同盟に加入するの勢に傾き、齊人稍や心强き思ひを爲せり、此度の同盟艦隊の大勝利と、東北海沿岸の諸邦の向背の定まりしとを祝するが爲め、齊都に於ては其の軍神シエブトルの大祭を執り行ひ、向後の國運を祈らんと議決し、人民皆な其準備に奔走せり、

鋤雲云。得帝慈、弗拉太二捷之後。有節々迎及而解之勢。巴、威二氏之志漸將酬。

學海云。本回爲雅、齊同盟結末。前段斯將來攻。爲齊國騎兵所擊破結了第八回調騎伏案。後段斯將乘齊國饑弊來攻。爲雅典海軍所斥攘。結了兩國同盟好果。然禍福相倚利害互存。後來兩國失和。啓端於海軍供費。作者用意懇至。叙列本末。使讀者尋繹兩得之。

鳴鶴云。此回寫戰鬪前後兩段。前寫陸戰。後寫海戰。前破大軍斃一驍將。後摧堅艦興復二小邦。專制民政之勝敗。映射爲勢。文法快絶。

余嘗笑此間小説一作出瓊一小人皆有因凝遺各撒褊然惟其果應報事亦然恐殆似拾局放膽乃首忽女頭名煙不是
歐見波沒來虛幻本規隘錢蓋漢子器能然忽淑話姓落杳宛法
人涯千甚沒引生回畫不商器不膽女個甚去里岸手

第十一回

薄命を憐て二名士婚を定む
屬邦を救て斯軍慕知を侵す

今宵は兼て定めたる國都大祝祭の夕なれば、親しき方の宴會に招かれて、今や打ち連れ其家を立出んとなしたるも、未だ時刻の早きが故に、暫し其家の一室にて時間を待つものと見へ、姉妹二人の少女盛飾して相語るあり、二女共に姿態婀娜たる上に、特に其の服飾に意を用ひたれば、華容靚裝相映じて傍り眩ゆく見へにける、此時傍に在りし一人の侍婢は、二女に向ひ

婢　今夜の會の御婦人は幾人計りに候ふや

女　八九人計りならん、其か人々は邊君圭君の家の令孃及び吳君加君の姉妹の方々なり

婢　御男子の來賓は如何なる方々に候ふやらん

女　威波能君、巴比陀君を始め我が家の兄君等十一二名なりと聞く

婢　然らば未だ令室なき方々甚だ多きに候はずや

女　然り

婢　彼の巴、威の兩君も未だ御獨身に候はずや、定めて近く何れよりか令室を迎へ賜ふならん、一方の君は容貌にも似ず溫和なり、一方の君は人品容儀申分なければ、二君に嫁し賜ふ婦人は定めて幸福ならん、御家内の能く釣り合ひしと御年齡の似合しきとの故にや、世間にては專ら當家と御緣組を定めらるゝならんとの噂さあり

口吻帶吃醋
氣太妙妙在
以見願婚巴
威者極衆

と云へば、二女は辭を揃へ
否々威君の御家には威君の深く愛せらるゝ容姿麗るはしき貞納、裕綺の二孃
あれば、巴威の二君は獨身の御方とは思はれず
と語る内に、最早や時刻の來りしにや、二少女は相伴ひ、欣然として其家を立
出でける、恰も是れ双蓮水を出で櫻桃妍を競ふ、
前總統官勢氏の宅にては、日間は諸名士皆國人と與に祭式に臨み祝意を表する
を以て、夜間更に最も親交ある諸名士十餘名の小宴を開き、巴氏威氏を始め瑪
留、邊禮仁、圭皮度、勇具貞、吳兒陀、區利染、杜侖美、波重、生良明等
の諸名士及び其の家人を并せ、男女の來賓二三十名の來會せるありて先刻より
盛宴を開き歡を盡せしが、酒酣なる後ち宴を撤して又別席に移り、男女の佳
賓打ち交て思ひ々々の談話をなすは此時代の風俗には似合しからぬ如く思ふ者
もあるべけれども、此人々は死力を冒して國難を與にし、今も國事に關して苦
樂を與にするが故に、其の親好、骨肉も啻ならざる間柄なれば、諸氏の家人の

名士淑女小宴ヲ開ク　（第三圖）

貞裕懐巴威自是眞情但率爾正寫之則巴威英雄何以是淫奔女爲戯墮損體面不尠故於第九回設母氏戒喩一

往復するも亦た頻々なりき、然れば斯の如き打ち解けたる宴集あるも亦た怪むに足らざるなり、此夜の宴席に、花の如き淑女が列國に名を轟かせし俊爽の諸名士に打ち交りたるは、譬へん方なく賑はしき有樣なるべし、他の女伴の盛裝燦爛として氣色欣々たるに比すれば、威氏の伴ひし貞納裕綺の二女が服裝の甚だ盛ならず、言語動作の何事に附け引け目にて遠慮勝ちに見へたるは、亡國の人たる其身の上を顧みて、隔てなき親好の間にも、自然と卑下する心の現はるるに因るなるべし、若し心ある男子の之を見るあらば、一層可憐の情を動かすならん、

淑女名士は、此席の彼處此處に思ひ々々に集りて隨意に談話する中、巴氏は立て貞納、裕綺の幷び居たる傍に來り、二女を慰めしに、此時威氏も亦た立ち二少女の傍に來り、巴氏と與に婦人に相當すべき美術音曲の事など語て興に入りけるか、辭の序や及びけん、巴氏此室の壁上に掛け列ねたる種々の畫圖を眺め、貞、裕と共に之を賞評し居たりしか、忽ち其中なる一將軍の馬上に在て威容

段反寫二女心事使讀者暗暗地會意點頭至此復擡起巴威相戲之語殆露白蹊逕便不獨讀者會意巴威亦自會意而貞裕則纔潮紅與含笑而止耳模寫二女是極靜厚溫厚不愧君子好仇

巴　嚴肅なる圖を指し貞、裕に向ひ
此の畫圖の如きは好男子と思ぼされずや

貞　如何にも雄々しき好丈夫にこそ候へ

巴　君も之を好丈夫と思はるゝや、此の人物は威君の風采に能くも似たるに候はずやと打笑ひければ、貞納は其の傍に威氏の在るが故にや、滿面紅を發して返答さへも無かりける、其の時威氏は笑ひながら裕綺に向ひ

威　君は此畫圖の中にて何れを好み賜ふやと問へば、妹の裕綺は兼て活潑なる性質なれば、壁上の畫圖の中にて文書を執り停止せる優美の一文人の像を指し

利宗明風采英邁意氣忼慨遣個少年俊傑最被讀者敬慕的而哥命一箭不酬志寒碑落日痊却未死魂極是屬恨

裕　是れこそ最も好ましく思ひ侍る

と答へければ、威氏は

威　此の丈夫こそ頗る巴君に似たり

と打ち笑ひしに、裕綺も亦た笑て話を他事に轉じける、已にして夜も痛く更けたればとて、暇を告る人々あれば、引續て佳賓一同皆別れを主人に告げ、各此家を立出でけり

此年斯人又擧兵の企ありて、早晩開戰に及ぶべき有様なれども、此頃齊人は内政を整へ兵備を治め、稍や安寧無事なりければ、威氏巴氏等に向て結婚の事を勸る人々多く、二氏が貞納、裕綺の二女を憐み、暗に其の意を二女に屬するを察して、頻に之を慫慂しければ、二氏も其の言を容れ、遂に威氏は姉なる貞納を娶り、巴氏は妹なる裕綺と結婚の約を結ひ二英雄兩淑女共に同日を以て國

事故把其兩妹各配了第一英雄以妹子至福償伯也極恨即所以慰藉讀者

都なるアボルロー、イスメニウスの神廟に於て、同時に婚儀を行ふたり、又諸名士の中にて、呉氏圭氏區氏杜氏等の如き人々も亦た此時に妻を迎る者多かりければ、諸名士は始めて室家和諧の幸福を受け、互に往來して最と賑々しく見へにける、然るに彼の瑪留一人は相ひ替らず淡泊の生涯にて、如何に親友より勸めらるゝも、曾て妻を迎ふるの念なく、諸名士の室家の賑はしき間に立て、冷然たる行狀前日に異ならざれば、是も亦た一種の人物なりき、此時哥侖の地峽より以北なる東北海の沿岸一帶の地は、マリアックの海に至る迄總て雅典同盟の有と爲りしに、又齊國にて民政の回復に盡力し、以來稍く其の名聲を著はせる明寧陀と云へる人物、慕知の域内なる知魯忍、安貞屯、墺理、泥理、の四邦に使し、其の國人に說て齊人に同盟を表せしめしかば、今は此の四邦と前きの同盟玻瓈亞、高朗忍、壕湖明、阿曾布の四邦を合せて已に八邦を結び、慕知十二邦の中にて未た同盟を表せざるは、唯弗拉太、切比、斯武の三邦のみなれば、慕知域内の覇權は全く齊武に歸するに至れり、去れば其の心

狗烹弓藏群小之慍可畏可懼後年監門之辱萌於此
人民秪誹議爲政之巧拙而足者爲政之本既定也猶之幸矣苟爲政之本未定則其所爭先在孰當爲政豈徒巧拙之末哉

弛むと云ふにはあらざれども、兩三年前に比すれば、齊人は稍や安堵の思ひを爲しけり、然るに高名の家は鬼其の室を窺ふの金言に違はず、國人中には、或は戚氏巴氏等の功名を嫉むの徒なきにもあらざりしが、是迄は國難甚だ大なる上に、諸名士の勤勞を要するの時なれば、未だ其の志を現はさざりしも、今や覆亡の患薄らぐに至ては、遂に永く猜忌の心を包慝すること能はず、遂に諸名士に反對するの小黨派を生じたり、而て其の領袖たる者は、則ち明寧陀、寧具等（以上は具氏弗氏に依る）にして、明寧陀は民政回復の時諸名士に次ぐべき有功の士なりしと云ふ、斯く反對の一派を生ずるに至れども、内政の大本已に定まり、大動亂を生ずべき辭柄なければ、國人の協同一致は毫も舊時に變らざれども、唯施政の巧拙を非難するの爭ひは、漸々猛烈なるに至れり、故に此の一派は、國政上にて諸名士一黨の過を補ふの功能あれども、亦た時として諸名士の意見に背反する事柄を國人に議決せしむるに至れり、今や齊人已に慕知の八邦を連ねたれば、稍や孤立の勢を免れたるも、未だ斯國の來侵を避るに至

らず、而て常に斯軍が來侵するの根據は弗拉太、切比の二邦なれば、是時に於て先づ是の二邦を脅從せば、爾後斯軍は慕知の域内に其根據を失ふべし、斯の如くせば、先年の巴本涅斯の戰の如く、齊、雅同盟の兵を以て斯兵を哥侖の地峽に防ぐを得、彼の爲に慕知の域内を蹂躪せらるゝを免るべしとの論を主張せしは、明寧陀等の一派にして、諸名士は之に反し、力を養ふの時に當り兵を疆外に出すは不可なるべしと論ぜしが、公會に於て國人遂に明寧陀の議を採納し、即ち寧具をして疆上の鎭守軍を率ひ不意に切比を襲はしめたり、(寧具、切比を伐つこと具氏)

切比を鎭する斯國の戍兵は、齊兵を境上に邀へ戰ひしに、大に寧具の爲に敗られ、退て切人と與に其の都城を固守し、飛使を斯波多に馳せて至急に援兵を求めたり、斯國にては、兼て此年又大兵を擧て雅典同盟軍の本據たる齊都を陷さんと欲せしも、連年兵を出して志を遂げず、同盟諸國に武を黷すの嘲を恐れ、兵を徵するの口實なきを憂ひ居たる時なれば、之を以て好口實と爲し、直

に二萬餘の兵を徵して切比の援に赴かしめ、又更に十餘萬の兵を發し、勇王亞世刺自ら之を率ひて出軍の準備を急ぎけり、切比未だ拔けざるに、援軍大に至らんとするを聞きしかば、齊軍は其の疆上に引揚げ、此役は寸功なくして徒に大難を招きける(大要同上)

齊兵已に圍を解くの後、月餘にして斯波多の全軍切比に到着せしが、今や齊都は前年の如き孤立の勢にあらずして、已に慕知八邦同盟の助けあれば、亞王は先づ初めに同盟屬邦を陷れて其の手足を斷ち、然る後兵を移して、齊武を圍まんと、其の軍を率て切比より道を正北に取り、直に大軍を以て玻璨亞を襲はんと企てたり、(亞王齊を侵すこと具氏等)

玻璨亞の小邦は、敵軍の進來するに驚き、頻に援兵を求むるの使節を齊都に馳せしかば、齊人乃ち四萬餘の兵を發し、威氏をして之を統べ、巴氏をして之に副たらしめ、急行して璨邦を救はしむ、已にして出發の日に至りしが、此時代の習にて戰に臨むは珍らしからぬ事なれども、貞納、裕綺の二女は婚嫁後未だ

贈答兩言是正史實事而如是湊合來風情極饒

多くの月日をも經ざることなれば、別けて深く其の夫の遠征を悲み、巴氏の立出るに臨で裕綺は之を送り

御身を危くし玉ふな

と云ひければ、巴氏は笑て之を顧み

何故に一軍を危くし玉ふなと戒しめざるや（"Private men, my wife, should be advised to look to themselve, to save other," 弗氏）

と答へけり、是の答を傳へ聞きし兵士等は、皆巴氏が國の爲に士を愛するの深きを喜びしとぞ、

切比と玻璨亞との境なるコーロニアの險を扼して、齊軍は斯兵と此地に相持し、齊軍は常に戰を避け險を守て唯幾回の小戰あるのみ、兩軍空く日を送りけり然るに敵王亞世刺は遂に大攻擊を試み、幾んど此要地を奪ふに至りしかば、威氏は兵を拔て直に玻璨亞の都に據り、彼の陂堤を決せし洪水の如く、前進の勢に乘じたる斯國の大軍を此地に抑遏せんと力めたり、一たびコーロニアの險を

奪ひし後は斯軍は兵を分て各地に出沒し、抄掠を縱にせしが、此時二萬餘の援軍齊都より高朗忍に達し、玻璨亞の軍と犄角の勢を爲せしを以て亞王は未だ齊都に迫らず、先づ玻璨亞を陷れんと企てたり、

是より先き、齊人は使を雅典に遣はして急を告げ、援兵を請ひ、且つ速に同盟の艦隊を發して西のかた哥侖の入海に向ひ、勾令の灣に出沒して斯軍の糧道を絕たんことを求めたり、是に於て雅人は兼ての同盟規約に從ひ、武氏を擧て陸軍に將とし、智氏を擧て水師提督とし、急に齊人を救はしむ、此の時斯軍の糧食は、多く巴本涅斯より哥侖の入海を經て希臘中部の南岸法斯の域内なる勾令の灣に輸送としかば、智氏は艦隊を提て遙に巴本涅斯の大半島を廻航し、勾令灣を侵し、二三回の小戰に於て斯國の艦隊を敗り、專ら糧食の運送を妨げたり、此に於て斯人は海路より糧食を輸送するを止め、專ら哥侖の地峽を經て遠く陸路を運送せり、故に其不便甚だ大なるに加るに雅、齊の同盟艦隊各處に出沒し、時に水兵の上陸して輸送を妨ぐる等ありければ、十萬の斯軍は

次第に糧食の缺乏を感ずるに至れり、前きに斯人が齊武の田實を掠て屬邦弗拉太、切比に蓄積せし糧食も、今は稍や殘り少く、且つ前年の抄掠に懲り、慕知各地の人民は、豫め野を清めて各都府に逃げ籠りしが故に、斯人益々糧を得るの道に苦めり、齊將威氏が成るべく戰を避けて持久し、斯軍をして、急戰の利を得ざらしめんと力むること數回の後、亞王は其の糧食の後來に竭乏するを慮り、一と先づ兵を旋さんと決し、乃ち道を希臘中部の南岸に取り、同盟艦隊の攻擊を避くる爲め海に沿て陸行し、哥侖の地峽を指して次第に兵を引揚げたり、是に於て慕知諸邦の人民は始めて安堵の思ひを爲せり、此役に齊都が斯軍の蹂躪を免れたるは、一に雅典同盟の援を得たるが故なりき、(右二節大要具氏遇氏防氏)

鋤雲云。威氏持重之策。果坐困斯王十萬之兵。

學海云。本回爲前回終尾不過說雅、齊兩國盟好。但明寧陀、寧具、二人與威、巴二子立異。激成切比一役以招致斯兵。殆危齊國。蓋爲得意人下一砭。針又是作者深

用意處。

貞納、裕綺二女子。與威、巴二氏結婚。是第九回終尾。但多裕綺與巴氏問答。情致惋妙。蓋爲令南替身。結了好因。又二女觀圖起想。與前篇開卷第一回炤應。雖大小不同。又是作者一筆不苟處。

鳴鶴云。此回。前面寫名士乘龍。而發示其得意之趣。後面寫齊國初用兵於他邦。而發示其興隆之狀。

又云。令南是卷中第一淑女。讀者擬以爲巴氏偶。而一旦溘然。遺恨不可言。若非得其才貌匹似令南一個玉樣佳人而代他。則覺不滿意。然本篇專說國事。不遑細說一人一家之事。讀者割愛於情境可也。

本回筆筆儒雅以與利宗明出身一段相成首尾自不偏枯

第十二回

羽箭地峽に白馬の將を射る　壯志を愛して老王虜を釋す

前には蒼波浩渺として海色瑠璃の如く碧に、遠く平羅の地を望めば、平昆の嶮遙に層雲の上に秀づ、後ろには米峨より流るゝ山脈低れて小丘と爲り、樹木森

々として茂生し、以てサロニック灣を隔つ、前後に海灣ありて地勢狹延し、以て平羅と巴本涅斯とを連結するの咽喉を形ちづくる、是の處こそ是れ有名なる希臘、哥侖の地峽なり、前にも已に記せる如く、希臘全土は其形ち瓢子の如く、中央狹くして絶るが如く連るが如く、地勢是の海峽より兩端に廣張して、南部中部を分つ故に、希臘の南部と北部中部と交通往來するに當ては陸路を取る者は必ず此の狹隘なる地峽を通過せざるを得ざるなり、又此の地峽の西北岸には良好なる哥侖の港有り、故に海路を取て百貨を南北兩部に輸送する者は、皆其の船舶を此港に繫泊す、是れ哥侖の都府が海陸に貿易の便を得て、大に商業の繁盛を致す所以なり、地峽の小丘より遙に海上を望めば、商船の帆影點々として水禽の浮ぶが如く、寄せては返し返しては寄せ來る浪の荒磯に、碎る響き韃靼たり、折しも斜陽は西嶺に春き、倦鳥は棲に歸る、暮景轉た凄然たるに當り一人の壯士、左手に角弓を執り、右手に大羽箭を捉み、路傍の樹間に身を潛めて待つ所あるが如く、時々東北の路を注視せり、

先聲殆人影馬
人影有髯蘇
見月在地仰
此是文家記
事秘訣作者
敏腕可驚

暫くして人影馬聲の來るあり、一團の軍隊歩騎を混じ、徐々として此地を過ぎしが、遠く敵地を離れしが故にや、別に軍伍を整ふることなく、伍々群を爲し、陸續として行き過るに、彼の壯士は之を窺ひ、瞬たきもせず眺る中、前軍次第に過ぎ去れば、之に引續て一團の人馬又徐々として進み來れり、今迄壯士は眼を凝して眺め居たりしが、此時忽ち突と立て大箭を角弓に屬し、金甲を着け銀鞍に跨る白馬の一將を目指しつゝ、きりゝゝゝゝと引き絞れり、方に是れ鷙鳥翼を張り弦月滿盈す、一聲放ちし矢聲と與に、飛箭將軍の左股を貫き、勢ひ餘て馬腹に達し、恰も屏風を倒すが如く人馬諸共轉墜せり、

親衞の從騎等は、負傷の將軍を圍繞して之を介抱する中に狼藉者を擒獲せんと、歩騎の衆勢一同に路傍の小丘を搜索し、其の四方には馬軍を馳せて遁走の路を遮り止めしかば、今は是迄とや思ひけん、彼の壯士は丘上に立ち現はれ、矢續ぎ早やに射たりしかば、前頭に進み來る七八名の兵士等は、弦音に應じて倒れたり、壯士は猶ほも憤鬪せしが、衆寡の勢ひ敵すべきにあらねば、十重廿重に

壯士眥裂髮竪之狀可想見

取り圍まれ、敢へなく虜と爲りにけり、狼藉者は、歩騎の一隊に前後を圍まれ、敵の軍中に引き行かれしが、暴猛なる兵士等は其の憤り散じ難く、之を繞圍して罵詈毆打し、痛く辱めを加へたり、暫くして軍士等は遂に之を引立て小丘の麓なる將軍の幕中に至れり、此時白髮の將軍は、股の箭傷を包みながら、中央の首席を占め、將校士官百餘名其の左右に侍衛し、無數の親兵帳幕の内外に充溢せり、諸將は其の前に引き据へたる狼藉者を見るに、其の年齡廿四五に上らず、軀幹輕捷にして面は美玉の如く、風采殊に秀異なるが、今引き出だされて老將軍を見るより、一層憤然たる意氣を增したるは、先きの箭坪を射損じて敵の安穩なるを遺憾に思ふと知られけり、此時老將軍の傍なる一士官は辭を放ち

汝は原と何者なれば、威名列國に震轟する我が國王殿下に對し斯る無禮を働きしぞ、疾く其の姓名事由を自首せよ

と問へば、壯士は決然として

汝等の問を要せず、我固より將に我名を告げんとす、昔し二十年前汝等が米

（圖四第）ル射ヲ將ノ馬白ニ峽地年少

悲壯激越髣髴聞其聲

世の故國を滅し、其の城を野にし其の民を奴とせしとき、千辛を嘗め萬苦を冒し、空く國難を殉して芳名を千載に遺したる同國の名族　アリストメニス

なる者ありしを知らん、其の一子則ち我れなり、今や南には巴本涅斯の諸邦の米世の遺民に祚ひするの時なれば、天晴れ此の時に乘じて齊武の國人と其の諸名士の力とを借り、我が廢國を興し、我が絶世を繼ぎ、以て祖宗の靈を地下に慰せんと樂みしも、汝等の國威尚ほ强大にして常に諸邦を壓服し、雅、齊二國の如きは、如何に死力を盡すも尚ほ僅に其の獨立を保つに過ぎず、又た何ぞ巴本涅斯に我が亡國を復するを望む可けんや、斯く汝等の强勢なるも、畢竟は老王亞世刺の武畧に因るものなれば、若し我一人の身を捨て、如何にもして汝等の王を討ち取りなば、必ず列國の大勢を一變し、我が米世の遺民が夢寐にも忘れ能はざるの宿望を果たすに至らんと、汝等が此の役慕知を來侵するを幸ひ、我は常に齊軍の中に在て心を用ひし甲斐もなく、從騎の護衛

悲壯激越髣髴聞其聲

結了射術
悲壯激越髣髴聞其聲

嚴重にて箭頃に王を見る能はず、無念さ云はん方なかりしも、幸にして遙に王の容貌を望み、之を詳識するのみならず、常に白馬に跨るを見しかば、如何にもして其の歸路に待ち受け、唯一箭に射留めんと、齊武を去ること程遠く、汝等の備へ忘るべき此海峽に待ちたるのみ、百歩に狙ひを誤らざる我が鍛練の大羽箭が、亞王の胸を洞さずして他處に微傷を與へしは、是れ天の米世を遺る所なり、今將た何をか憾むべき、唯是事を誤りしに付けて、向後の國運も、さぞかし、と思へば悲憤に耐へざるのみ、我は此擧の成否を問はず、心本より死を決せり、今更ら何をか悶へ怨まん、我が言ふことは是迄なり、汝等我を慘刑に處して疾く其心を甘んぜよ

亞世刺傲岸之態亦自有

と云へる容貌神采は勇鋭にして憤氣を帶ぶれど、悲嘆の情は自ら其間に現れたり今迄一言をも發せず、默然として諸將と壯士との問答を聞き居たりし亞王は、暫時の間熟々と其面を打眺て壯士に向ひ

斯國の盛衰は斯人の勇怯に在り、我に於て何ぞ關せん、假令ひ今日我が白髮

君人之度畢竟是豪傑的本色

首を汝に授るも、亦た其の盛衰に損益する所なきのみ、且つ死生命あり成敗數あり、我深く汝の壯志を愛すれば、此度は汝を釋さん、汝夫れ力を盡して此後尙ほ我を狙擊するを謀れ

と云ひ終りて左右を顧み

我が斯波多の壯年子弟もかく有れかしと思ふなり、今此者の志氣を見て、米世の遺民の憤激を察するに足れり、他日斯波多の憂を爲さんものは、希臘中部の雅、齊にあらずして必ず南部の米世ならん

と云ひ捨て諸將に命じ、壯士を營外に放たしめ、己は左右に扶けられて幕中に入りしは、猶ほも箭傷を療するが爲めなるべし、猛激なる兵士等は、皆此の浪藉者を殺さんと憤りしかども、王命に違ふこと能はず、遂に之を陣外の小丘に送り出して是處に放ちたり、又亞王は軍醫をして創痍を療せしむる後、一日も此地に留まらず、軍中に備る腰輿に乘り、全軍を統て直に歸國の途に上れり、是狙擊の其身に大害を與ること能はざりしを列國に知らしめんが爲めなりき、

利宗明進退維谷一死甚得當否者豫讓一瞿人只是沒氣概沒機略的穷貨漢子何以得爲少年俊傑

利宗明は宿志を達せず、却て敵王に赦され、悵然として丘上の樹間に佇立し、獨り熟々思ふ樣、前きには齊武諸名士の戒に悖て已に大事を誤り、今は又敵王に赦されて死せざりしことの口惜しさよ、此後如何に我身を處すべき、我が恢復の志を達せんか、我を赦るせし敵王を殺さゞる可らず、之を殺せば恩に背かん、我を赦るせし敵王を殺さゞらんか、恢復の事得て成す可らず、之を成さゞれば義に背かん、恩義兩ながら重し、我夫れ何れにか從はん、已に恩の爲に義に背く能はず、又義の爲に恩を忘るゝ能はず、進では敵國を覆へすの志を絶ち、退ては慈母を慰するの望を絶つ、假令ひ百年の壽を保つも亦た何の爲すべき事かある、抑も大事を擧るの初めより、我は已に死を決せり、斯る絶望の場合に於て、今日身を處するの道は唯一死あるのみと、丘上より北のかた慕知の天を望ては、空く母妹の哀悼せんことを思ひ、南のかた米世の天を望では、舊都を恢復するの日なきを嘆じ、低回躊躇するの後、遂に此處にて自殺せり、後人之を哀て爲に碑を丘上に建て、永く其の英魂を弔すと云ふ、此の凶信の齊

結了母妹

隆具之役使亞世刺不得臨陣者實利宗明之力也而斯軍大敗武威自此衰則王孫之志雖不酬猶酬也內嫁妹於英雄外抑强伯於幽冥之中爲利宗以明者亦可以瞑矣

都に達するや、威氏の家に寓する其の母の哀慟、二妹の痛傷は言ふ迄もなく、威氏巴氏等を始め、苟も此人を知る人にして悲泣嘆惜せざる者なかりけり、又亞王は恙なく本國に歸着せしが、不幸にして軍醫の爲めに藥を誤られ、之が爲めに左股の創痍大に苦痛を增し、一時は身命に關するの憂ありしが、百方療治の術を盡せしを以て、爾後は漸次輕快に赴くを得たり、然れども未だ軍事に堪るに至らず、數年の後も尙ほ時として痛を發し、遂に跛躄の身となるに至れり、向來列國の大勢を一變するに於て、利宗明の亞王に蒙らしめし箭傷が暗に如何なる影響を與ふるかは、讀者後回を讀で之を知れ（亞王事に因て足を傷くこと具氏）

鋤雲云。以子房之貌。行子房之志。巴本涅斯之羽箭。即博浪之鐵椎也。唯子房倩滄海公爲之。利宗明身親爲之。自有勇怯之異。而老王亞世刺之量。恐非始皇所及。

學海云。本回爲利宗明報讎不成始末。斯國强大。兵馬精鍊。所向無敵。讀者未知所由。乃揭出此一節。斯王宏度偉量。感動人心。其能壓制隣國。稱覇一時。決非無故。蓋此段不

是寫利宗明。反是寫斯王。
鳴鶴云。此回。爲斯衰齊興之張本。
又云。刺客被擒。而爲所殺。則不免陳套。他赦之。而却自殺。此新奇。斯王之寛。少年之義。相映爲活手段。

列國分合之大勢作者每用本史卒讀似無趣味而前後起伏開闔不可一自此最本回之草草如是講法無他盖在大脈通觀其

第十三回

小捷に狃て齊人隙を同盟國に啓く
兵戈に苦で諸國大平和の議を容る

曩きに雅典同盟の艦隊が勾令灣に出没して糧道を絶ち、斯軍を惱ませし以來、益々海軍の力あることを知り、雅人は其將智猛周をして水師提督の任を永續せしめ、更に艦隊を增して、巴本涅斯の沿岸及び西方の諸邦を連結せしむ、是に於て智氏は國人の命を奉じ、艦隊を提て西北海に廻航し、或は兵威を示し、或は說客を用ひ、恩威を以て諸小邦の人民を招安し、同盟に列するも夥多の軍費を徵求せず、其の内政は一に其國人の好む所に任せ、強て之に干涉せざるの意を明にせしかば此時に至ては續々として同盟を表するの小邦多く、又頑然と

して尙ほ斯國に從屬し、或は中立を固守する者に逢へば、艦隊を以て之を威服せしかば、巴本涅斯の西北なる沿海の諸邦ダイム、エージニウムパトリー等の諸邦皆同盟を締約するに至れり、斯人は之を見て大に憤り、長く同盟軍をして此の海上に跋扈せしめずと決心し、老將韋洪良をして六十餘艘の艦隊を提率し、直にジジウームの港を發せしむ、(右一節大要具氏)

此時雅典同盟の艦隊はアリサレウスの港に碇泊し居たりしが、斯國の大艦隊遙に洋上に進み來るの報知を得たりければ提督智氏は直に令を同盟艦隊に下し、レウカスの海岬に沿て斜めに戰隊を列したり、斯國の艦隊も亦た一列の戰隊を形づくり、兩軍大にレウカスの海上に戰ふたり、此時風威俄に猛烈を加へ、波浪洶湧して戰ひ難儀に見へける程なりしが、智提督の駕船なる將旗を立てたる大艦は、屈强の堅艦十餘艘と與に並列して一團を爲し、力を極めて中央の敵艦を突きしに、斯將韋氏も亦た善く之に當り、激戰凡そ四時間なりしが、斯艦は遂に同盟艦隊の爲に其の中央を突破せられて兩段と爲り、諸艦の働き一致せ

す、思ひ〳〵に戰ひしかば、之が爲に大敗を蒙り、其の堅艦三十餘艘を失て、討ち漏らされたる艦隊は海の四方に散亡せり、夫の前年斯波多に壓せられたる巴本涅斯の大戰後、アイオニアン海に於て雅國の艦隊が其の勢力を回復せしは、蓋し此戰を以て始めとす、故に智氏の高名大に列國に轟くに至れり、(右一節具氏)

斯く敵艦を敗てアイオニアン海に勢威を振ふに至り、智氏の提率せる艦隊は、久く境外に在て、同盟諸國を得たりと雖ども、其の人心に逆はんことを憂ひて、諸邦より巨額の軍費を徵求せざりしが故に、此の頃に至ては次第に軍費の缺乏を感じ、頻りに本國に向て之を供給せんことを要求せり(同上)

雅國は同盟諸國の爲め且つは其舊時の覇業を回復せんが爲に、是迄連年數十艘の艦隊を海上に浮べざることなく、之が爲めには莫大の軍費を支出し、最早や既に其の國力を傾け盡すに至りしかば、乃ち同盟列國に謀て同盟會を開き、「兼ての盟約に從て是迄諸國より旬年定額の戰費を供給すれども、今や戰費非常に

增加したれば此上更に又臨時の軍資を諸邦より供給せんこと」を請求せり、是に於て同盟諸國は多少雅國の需めに應ずることを承諾せしに、齊武の全權使節陀仁布は獨り之を難じ

同盟規約に於ては、同盟軍の艦隊は雅人之を統べ、其の戰費は列國より之を支辨するとの明文あるに相違なし、然れば齊武の如きは是迄、唯戰費を供給するのみにて、其任は充分なるに、自國の爲めとは云ひながら、一は同盟諸國の爲めに自ら廿餘艘の艦隊を東海に備へ、往々同盟艦隊を援けて力ありき、

先きにイリクリポスの海戰に同盟艦隊が勝利を得たりし如きも、亦た幾分か齊武艦隊の助けに因る者なり、然らば齊武は同盟規約の外に、既に廿餘艘の艦隊を供給して諸國の利便に供したる者なれば、其の償ひとして定額の戰費を減ずるも尙ほ不可なき事理なるに、況んや此度の如き臨時の戰費を供給することをや

と述べたるに雅人は又大に之を非難し

イクリボス、幽美の海峽及び東海に於ては、如何にも齊艦が多少同盟艦隊に其の力を添へしにもせよ、同盟艦隊が遠く西北海に廻航して斯國の糧道を海路に妨げしは、果して何れの國の爲めぞや、是れ皆齊武の危急を救はんが爲めにあらずや、然るに自ら好で甘餘艘の艦隊を東海に備ふればとて、臨時の戰費を供給せざるの理あるべけんや

と反覆論難甚だ烈しかりしかば、此時齊武も連年敵國の侵入を蒙り、海陸の戰費莫大にして諸名士が內政に其心を用るにも拘らず、國帑常に不足勝ちなる時なれば、他國の戰費を給すべきの餘裕ある有樣ならず、且つ此會に於て雅人が齊武に負擔せしめんと欲するの費額も亦た甚だ大なりければ、遂に此の如き場合に及びし者なり、然れども雅人が西北海に艦隊を出だして連年斯國と爭ひしも、一は齊武の急を救ひ、一は他日に備る爲めなれば、雅人の要求も亦た理なきにあらざるなり、かく兩國の間にて執る所の異なるに至れるも、畢竟は齊人が近年少く勢を得て其の心弛みしと、又雅人が次第に盟主の勢を得て他國を

睥睨するより生ぜしに外ならざるなり、人世の憂患を與にすべく歡樂を與にし難きこと一に何ぞ玆に至るや、齊武の全權使臣は飽く迄も此議を拒みしかば、齊、雅の二國は其の議遂に整はずして一と先づ此會を散じたりしが、之れぞ雅典が齊武に對して不快を懷くの初めなりける、(軍資のことに就き二國の議協はざることは具氏に據る)

雅人は西北海沿岸の諸邦を連絡して、曩きに一たび齊人の爲に斯艦を敗りしも、其の戰費に乏しきのみならず、齊武が同盟規約を蔑如するを憤りしが故に、今は西北海に出沒して慕知の北海を防ぐにも及ばずと思考せしにや、直に命を水師提督に傳へて其の艦隊を本國に引き揚げしめたり、是に於て智氏は本國に歸航せんと欲せしが、是より先き智氏の軍にては、坐金周の一邦より亡命せる壯士を募り、多く之を用ひしに、其壯士等頗る戰功を立てければ、智氏は今本國に歸航するに及で、其艦隊を坐金周の海岸に泊し、要地を相して壘砦を起し、軍中に在る亡命の壯士を此地に上陸せしめて、永駐の計を爲し、彼等の戰功に

報ひ、若し緩急あらば雅典同盟の近傍より之を援助するの手筈を定め、然る後ち本國に向て出發せり、然るに坐金周の執政黨は、亡命者が此の如く雅人の厚遇を得るを見て、憤懣に堪へざれども、獨力を以て之を制すること能はず、乃ち助力を斯波多に求めけり、此に於て斯人は廿五艘の艦隊を派遣し、以て執政黨を助けしむ、此時雅國の艦隊は既に本國に引き揚げ、此の近海を鎮するの兵なかりければ、此事よりして更に又他の一事變を引出すに及べり、玆に坐金周の近傍胡爾魏の執政黨は、前きに雅國に向て同盟を表したりしが不逞の人民中に、其の志を斯波多に通ずるものありて、今や斯艦の近地に進來するに乘じ是の好時機に於て斯艦を招き、以て政府の執政黨を覆へさんことを謀りける、然るに胡爾魏の執政黨は早くも此の企を偵察し、急に守城の準備を整へ、急使を雅典に馳せて事狀を具陳し、其の援兵早く到着せざるに於ては都城忽ち斯軍の手中に落つべき旨を報道せり、(一節具氏)

又斯人は此機に乘じてエージャン海の權力を恢復せんと企て、レウカス、カン

プラキヤ、イリース、ザキンヂユス、アツチヤ、イツピガウリス、トレーゼン、ヘルミノーハリース等同盟諸邦の艦隊を募り、八十餘艘の海軍を得、又四萬餘人の陸軍を發し、將軍無南瑟を以て海陸兩軍に將とし、直に胡爾魏に向はしめたり、已にして無南瑟は胡爾魏の近海に於て同國の艦隊と戰ひ、大に之を破り、其の艦隊僅に四隻を失ふのみにて無難に軍隊を上陸せしめ、胡爾魏都城を合圍せり、(同上)

抑も胡爾魏は民政國にして、百業繁昌し、頗る殷富の土地なり、故に斯軍は國人を孤城の中に閉ぢ込めしより、大に各地を掠略して其の慾を恣にせり、希臘古史家の記する所に據れば、此時斯兵は分捕物の爲に贅澤を極め、如何なる兵士と雖ども、對陣中には最上等の葡萄酒にあらざれば杯を手にせざるに至りしと云ふ、此の一事は胡爾魏が當時繁昌なる有樣を證するに足る者なり、雅、斯兩國が全力を傾けて此地を爭ふも亦理なきにあらず、斯將無南瑟は都城を環圍して本營を近都の小山に構へ、敵の糧食を絶て城中を窘めんと謀り、又其

の艦隊を以て近都の港を封鎖し、援兵の至るあるも近地に足を下ださしめざるの計畫を施せり（同上）

胡爾魏の使者が雅都に達せしは、方に是れ水師提督智氏が歸國解任の後未だ間もなき時なりしが、雅國の公會に於ては直に援兵を出すことに議決せり、然れども戰費に乏しきの時と云ひ、且つ大兵を發するには、一度艦隊を解きし後なれば、又若干の時日を要するに、今や胡爾魏の陷落は幾んど目暮に迫り、之を救ひ得ざるの恐れあれば、乃ち先づ五千の精兵を發し、陸路を取て胡爾魏に達し、城中に入て國人を勵まし、大軍の到着する迄其の都城を固守せしめんと決したり、然れども此企は甚だ危險なるのみならず、才略拔群の將軍にあらざれば、寡兵を以て孤城を支ゆること能はざるが故に、其の撰を難ぜしに、此時、前水師提督智氏は己れに從て永く軍に在りし志定究と云へる壯年の人物を勸めたり、是に於て志定究は五千の精兵を提率し、哲鎖、韋秘の地を取て胡爾魏に發向せり、（大要同上）

此時胡爾魏の城中にては、糧食殆んど盡き人民草を嚙み樹根を食ふに至りしかば、今は密かに城を脫して落ち行くものも多かりし、又死守の志あるも、重なる人々はなるべく城中の人口を減じて糧食を節せんと欲し、多數の奴隷を城中より放逐せり、然るに城外の斯軍は其の遁走を許さず、若し遁出し來る者あらば、又之を奴隷として他國に售り渡すべき旨を宣告せり、然れども猶ほ續々として城外に遁出する者止まざりければ、斯人は遁出する者を抑へて悉く鞭笞を加へ、死を以て脅迫し、再び城中に向て之を逐ひ還さんとし、又城兵は門を閉て內より之を拒みしかば、多數の遁出者は兩軍の間に彷徨し、身を容るゝの地なく、城塹の中に餓死せし者無數なりしと云ふ、されば城兵が如何に饑餓を忍ぶも、今は耐ゆること能はず、最早や落城旦夕に迫れり、是より先き雅將志定究は、陸路よりエージャン海の北岸に出で、曾て其の國人の助を借りたる孟浪の王柳敬多の助力に因り、此處に船艦を得て五千餘人の兵を乘り込ませ、此の近海を巡航する斯國の艦隊に見咎められず、幸にして胡爾魏の海

岸に達し、夜に乘じて斯軍の一隅を襲ひ、辛ふじて城中に入るを得たり、此に於て城中にては始めて應援の大軍遠からずして至るべきを知り、聊か愁眉を開きけり、然れども援軍の來着迄は猶ほ若干の時日を要するに、今又五千の人口を增加せしを以て、城中益々糧食に乏く、雅國の援兵は徒に餓死に就くが爲め此地に至りしが如くなりき（同上）

茲に斯將無南瑟は、城中糧盡きて陷落旦暮に在るを知りしより、漸く軍務に怠るに至れり、本と此役に於て斯人は其の募集せる同盟軍に戰費糧食を與へ、且つ其の兵士には人毎に若干の俸金を給するを約したりしに、今は一二月間も絶て前約を履まざれば、當初の約束を信じ戰費を備へずして來會せし同盟諸邦の兵は、皆怨望せざる者なく、離心怠惰の狀自ら外に顯はるゝに至れり、然れども無南瑟は城中の益々苦むを見、遂に全軍の總攻擊を以て一擧に孤城を陷れんと決し、其の軍隊を整列せり、是の時同盟兵の一將は無南瑟に見へ戰費俸給無きの兵焉ぞ戰ふを得んや

と論ぜしに、無南瑟は勃然として怒り、杖を以て痛く其面を亂打せり、同盟兵等は之を見て益々憤り、斯將より進軍を令せらるゝも、佇立して動くものなく、茲に一場の大混亂を生じたり、城中の雅將志定究は、兼てより敵の同盟兵の離心怨望するを偵知し居たりしに、今其の戰列の動搖騷亂するを見るや、部下の兵五千に加るに城兵三千を以てし、俄に城中より突出して騷擾せる斯軍を激衝せり、斯人の同盟兵は暫時防戰の後素より深く戰ふの心なければ、列を亂して四方に敗走し、敢て抗拒する者なかりければ、雅兵は恰も無人の地を行くが如く、斯陣を蹂躪して山上の本營を猛擊し、遂に敵將無南瑟を打ち取り、多分の糧食を奪ひ得て之を城中に護送しける、（同上）

若し此時雅將志定究が嚴く敵の全軍を攻擊せば、斯軍は乍ち全敗にも至るべかりしに、敵の本營の遙か後に陣したる輜重兵等を敵の後備軍と誤り認め、直に城中に引揚げしを以て、斯軍は辛くして其の殘兵を集ることを得たりけり、斯軍の總督無南瑟戰沒せし後は、副將ヒペルメニス代て殘兵を統べ、陣營を固め

斯師大敗喪
將失糧雅資
用空乏不能
出師兩有
兵之徵爲大
平和之會原
第二

て唯城兵の來襲に備るの有樣なりき、然るに此時又雅典より應援の大軍遠からずして來着すべきの風評ありしかば、斯將は殘兵を以て來援の大軍に當り難しとや思ひけん、數日ならずして陣營を撤し、近港に碇泊せる艦隊に諸隊を乘せ、狼狽して此地を引き揚げゝれば、其の糧食捕虜傷者は總て皆城兵の手に墜ち、胡爾魏の人民始めて再生の思ひを爲せり、然るに雅典の援軍は今に至る迄尚ほ到着せざりしなり（同上）

雅、斯の兩國かく西南沿海の諸邦を爭ひ、力を他事に用ふること能はざるを幸ひとし、齊人は益々内治を改良し、兵馬を練り、遂に手段を用て慕知の域内なる多那吳、切比、弗拉太の三邦を其同盟に加ふることを得たり、是より先き、以上の三邦は久く斯人をのみ其の盟主と仰ぎしが、今は遂に慕知の同盟に加はり、斯、齊に兩屬するの姿と爲れり、是に於て齊人は切比の人民に說き、其の邦内なる勾令灣の勾令港に堅砦を築かしめ、此地に齊國の戍兵を置き、他日斯國の大軍が再び慕知を侵すことあるも、糧食護送の船艦を屯駐するの要

齊人圍法法
告急于雅雅
益疾齊爲大
平和之會原
第三

處を得ざらしめんと企てたり、又慕知の對岸なる巴木涅斯、法季溫の二邦は、昔より雅典に親好ありしが、前年より勢に就て斯波多に同盟を表し、前日の役には斯軍を助け慕知の諸邦を惱ませしにぞ、今や齊人は斯、雅の爭に乘じ、邊氏圭氏等をして一軍を率ひ、哥侖の入海を渡て遠く法季溫の都城を圍ましむ、法人怖て援兵を雅典に請ひ、齊人の亡狀を訴へ、又其の隣邦に屯する斯波多の戍兵に援助を請求せり、於に是て斯波多の戍兵は全軍を盡して來り援けしかば、齊武の諸將も志を遂ること能はず、數回の小戰後遂に本國に引き揚げたり、かくして法季溫は幸に危厄を免れたりと雖も、雅典は益々齊人が小邦を脅從して國力を養はんと欲するの擧動を疾惡せり、是れ亦た雅典が齊武に對して不快を感ずるの一原因なりき（同上）

初め胡爾魏を援はんが爲に五千人を派遣せし後、雅人は又智猛周を以て水師提督に任じ、大に艦隊を募らしむ、然れども既に多年の軍資に國力を盡し、人民の負擔最早や此上に增加し難ければ、智氏は自ら東海沿岸の諸邦に遊說し艦隊

を集め戰費を徵せんと請ひしかば國人之を聽るしたり、此に於て智氏は自ら哲鎖の雅人を說き、又此時將さに北部に崛起せんとするの勢ひある哲王是遜に說て、其の與國を同盟せしめ、粗ぼ心算の船艦軍資を得たりける、然れども一方には胡爾魏の危急旦暮に迫れば、雅人は貴重なる時日を遷延する智氏の擧動を非難する者多く、乃ち命を下して其の事を中止せしめたり、就中珂理杜朗の如きは、急に援軍を擧るの說を主張し、今如何にもして急に援兵を發せざれば、雅國が將に恢復せんとする覇業を失墜すべしとの利害を演說し、自ら援兵を發するの任に當らんと請ひ、又韋比九、可武利の二氏をして己と與に援軍を提率せしめんと勸めけり、此の韋比九と云へる人物も亦た雅國の一老將にして、是迄久く比西亞王の爲めに小亞細亞に戰て英名を輝したりしが此頃本國に歸り來りしなり、雅人は三將が非常の盡力を以て漸く五萬餘の兵と五十餘艘の艦隊とを得てければ、乃ち三將を以て總督とし、比留港を解纜せしめけり然るに途中に於て胡爾魏の圍已に解け、斯軍敗走せりと聞きしかば、乃ち行く々々沿海十

二の小邦を徇へ、之を此役の功として空く雅都に引き返せり、玆に別將智氏は、前きに戰艦戰費を募るが爲め苦心したりし甲斐もなく、中途にして其の事を廢止せられし上に、又其の募集せる戰費を濫用したりとの非難を蒙り、此年の秋に至り、雅典の法庭に於て審問を蒙ることゝなれり、此時哲王是遜及びイピリユースの王亞留敬の二人は、智氏の爲に其の淸白なるを證明せんとて、雅人に請ひ、證人の資格を以て雅典に來着せり、是の二王の領地は乃ち智氏遊說せし地方なれば、其寃を證明するに最も力あればなり、又二王か自ら雅典に來れるも、必竟は智氏が列國に畏敬せらるゝに因る者なるべし、凡そ顯地に立ち財務を取扱ふは衆疑の集る所にして如何に淸廉潔白の名士と雖ども、疑似の形迹より想像せらるゝときは、意外なる不幸の寃罪を蒙ることを免れず、是れ古今の通弊にして識者の痛嘆する所なり、然れども天下定論あり、後世正義あり、群小の慍は遂に名士を傷るの力を失ふ、故に國人中にも智氏が愛國心の厚くして痛く辛苦せしを憐み、其の淸白を察する者多かりければ、遂に法庭に於て無罪

是古今名士之所同浩嘆而苟欲滅否人物者豈可不愼哉豈可不戒哉

の宣告を受るを得たり、今二人の國王が自ら求て證人と爲りし如きは、人皆之を榮譽の事に思ひけり、(同上)

前篇より以來屢々記載せる慕知の弗拉太は、其の昔し同く慕知の一邦國にて、巴本涅斯の戰より以前は慕知の十二同盟の中にありしが、此大戰以後は次第に斯國に結で慕知の同盟を分離せり、是より後は、斯人中部を侵す毎に常に此の地を以て本據とし、其の城壁を堅くして、斯國より鎭戍兵を置くに至れり、然るに兩三年前より雅齊の國勢漸く振興し、慕知の諸邦概ね之と同盟を表するに至りしかば、弗人大に恐れ、近來に至ては又深く雅國に結交を求め、且つ表面は慕知の域内に在るを以て、齊武の盟主たる慕知の新同盟に加りけり、然ども其の心を斯國に屬するは素より明白にて何人と雖ども、之を窺ひ得ざる者なく、動もすれば其擧動形跡に現はるゝこともありしが、此に一事變の生ずべき時節到來せるにや、此頃同國公會の秘密會に於て外交政略を議するに當り、重なる人民が「機會もあらば再び斯波多に結ぶべし」とのことを謀りしに、其の事

忽ち齊武に洩聞せり、齊人は素より口實もあらば之を討滅して他日斯軍來侵の根據を勦絶せんと待ち兼ねたる時なれば、之を聞くより其の憤激一方ならず、直に大軍を起して之を討滅せんとの議論盛なりけり、是時威氏巴氏等の諸名士は頻に之を諫めしかども、他の一派は之に反對し、國人の憤怒甚しきに乘じ、公會に於て遂に出兵の議を決し、寧具を擧て一軍に將とし、弗人を欺くが爲め境上の鎭守軍をして交代せしむると稱し、此の一軍を疆上に進ましむる後、先きより滯在せる鎭守軍と合して兵數を增加し、卒然として弗拉太の都城に侵入せしめけり、(大要同上)

弗拉太の都城には、一二年前迄は常に斯軍の戍兵ありしも、已に雅典同盟の中に列し、又慕知同盟の列に加はりし以上は、斯國の戍兵をも置かしめ難きが故に、弗人は之を謝して其國に歸らしめければ、今は戎備も怠り勝ちなりしに、思ひも寄らず齊人が卒然と來襲するの報を得しかば、其周章狼狽言語に盡し難く、急に兵士を募れども、充分の大軍を集る能はざりけり、然るに早や齊軍城

下に逼近しければ、今は術の施すべきなく、使を齊軍に遣はし、何事なりとも唯命之れ奉ぜんと申し送りけり、是に於て齊將寧具は、國人の内命に從ひ「弗拉太の塹城を毀ち重もなる人民は他國に皆悉く立退くべし」との要求を爲しにけり、小邦とは云ひながら、舊國の名ある弗拉太を滅絶せんとする其の處置の慘虐なるは云ふ迄もなく、卑怯にも其の備なきを襲はれて無念骨髓に徹すれども、弗人は今更ら之を如何とも爲す能はず、泣く々々齊人の脅迫に從ひけり、其の中にも重もなる人民三百餘名は早く齊人の亡狀を雅典同盟の大會議に訴へんとて、雅典を指して奔りけり、(同上)

齊人の此の擧動は、中部北部の諸州に於て列國皆之を非難せざる者なく、殊に雅國の如きは、數十年前其の助を屢々弗人に與へたりし舊誼あれば、弗人は斯國に通ずるの時と雖ども、亦た雅國に怨を結ばず、雅人は幾分か其の隣境の與國の如く思ひ居たりしに、今同國の亡民が泣て齊武の亡狀を訴ふるを聞くに及び、益々齊武の擧動を惡み、遂に雅典同盟の列國を會して其の曲直を決すべ

しと、直に此旨を諸邦に傳達せり、(同上)

是に於て同盟諸國の委員は、日ならずして皆雅典に會合せり、此時齊武の國人は、巴氏勢氏の二人を揚て委員とし、諸國の前に其の弗拉太を討滅せし擧動を辯解せしむ、已にして會席を開きしに、弗拉太の亡民及び人民の總代として遣はされたる弗人數名は、盟主雅典の紹介を以て、列國の前に其の不幸を訴へ、烈しく一兩年以來齊人が近隣の同盟諸國を凌辱するを攻擊し、若し此の儘にて打ち捨て置かば、盟主たる雅典の大權をも侵奪するのみならず、自餘の同盟諸國と雖ども、亦た安全を得ざるべきを論じ、其の國人が嘗て雅典と結びたる親交の顚末を說て、一方には雅典の委員の愛憐を惹起し、一方には同盟諸國の委員をして齊武を恐怖するの念を生ぜしめ、又齊武に關しては其の擧動常に暴横にして事理に戻ること多きを摘示せしが、其論辯大に聽者を動かし、一時は列席せる諸國の委員の胸中に、齊武を會盟より除却せんと欲するの心を生ぜしめたり、(此時の弗人の演說はデモスセンスと幷び稱せられたる二大論士の一人

政治家之德操當不如此哉巴比陀平生之志可想

齊人滅弗民奔愬之雅雅大會與國問齊人罪齊雅之隙益長爲大平和之會原第四

イソクラテスが弗人の需めに應じて之を組立たるものと云ひ傳へ、其草案は今日迄遺存せり、然れども此演說は寧ろ鋭激なる語氣を以て稱せらるゝ者にて其の理論の組立は觀るべき者少しと云ふ）假令ひ己の諫に背きし國人の擧動と雖ども、尙ほ力の限り善後の策を盡して之を旣敗の日に救濟せんと欲するの志に篤き巴氏は、其國が今將さに同盟より除却せられんと欲する危急の場合に於て立ち上り、其の長技の雄辯を以て、兩三年齊人が拮据經營の目的は、雅典同盟の大敵なる斯人の勢を殺がんが爲めにあらざる者なきを證明し、又弗拉太は當時こそ其の表面同盟中に列し慕知の連結に加はると雖ども、尙ほ密かに其の心を斯國に屬するは、其の公會の內議を以て之を知るべし、若し弗人をして又兩三年前の如く斯國の戍兵を置くに至らしめば、獨り齊武に侵入の禍を受るのみならず、雅典同盟の列國と雖ども亦た他日の弊に堪へざるべし、然らば其の叛形已に現はるゝの時に於て之を討滅するは、蓋し同盟諸國の大利にして、又最も齊國に利ある者なるを辯說し、且つ一方に於ては齊人が雅國に對して其の

擧動是まで毫も惡意を挿まざることを回護せり、巴氏の辯論の巧なるのみならず、其の事固より正當にて、諸國の委員も兼てより弗人の異志あるを疑ふ所なれば、尙ほも反覆辯難の後、遂に多數の同意を以て齊人の擧動の無罪なることを議決せり、（大要同上）

齊武はかくして幸に雅典同盟より除却せらるゝを免れたりと雖ども、雅典の人民は舊誼ある弗人の落魄して亡國の民と爲りしを憐み、齊人の勢威稍く將に盛ならんとするを見るに付け、不快の情益々甚く、前きには齊人が海上の戰費を支辨せざりしを怨み、又雅典を憚らずして親好ある法李溫を攻めたりし擧動を慣り、齊武に對する不滿足の心益々盛なるに今又齊人が弗拉太を滅せしは、之れぞ列國の大勢に一變動を生ずべきの時なりし、然るに奇異なる一邦の在る有て、遂に是の大勢を成就せしめんとす（一節同上）

玆に哥侖は其位置正に希臘の南部中部の間に在て、地勢大に海陸運輸の便を占るが故に、國人は專ら貿易を業として殷富を極め、常に平和の事業に從事する

を好み、其の外交政略も成るべく中立を守り、南方の強國斯波多北方の強國雅典、齊武が六七年來相ひ爭抗するの間に立て、之に與みするを避けたれども、尚ほ列國爭鬪の餘弊を蒙り、時として　左祖同盟を脅迫せらるゝの苦に迫へざりしが、斯る平和を好むの國柄なるに因る者か、數年前より其の國人中に希臘全土の大平和を謀らんとする一社を現出せり、其の說く所は

抑も人類の群居するは互に有無を交易して快樂を享受すべき爲めなるに干戈を以て相ひ殘虐するは何事ぞや、今日一國一邦の社會には已に法律の設ありて各人各族の間に暴力の爭鬪を絕ち得たるに、獨り邦國相互の間にては大は小を併せ强は弱を食み未だ暴力爭鬪の賤境を脫せざるは人類の大恥と云ふべし、然れば一國社會に行はるゝの平和主義を擴めて之を邦國相互の交際に及ぼし希臘全土に於て永く暴力の　爭を絕たん

との大望にて、此の說を實行するの手段は、先づ强國より弱邦に置く所の鎭戍兵を引拂ひ、諸小邦をして各獨立を保たしめ、然る後各邦より人口に應じて常

當時休兵之議起素爲實錄而假安太隆一典湊合之於此乃生色生態文情妙絕尤不枯淡

哥人結社大唱希臘休兵之議列國久苦干戈皆漸有欲納之之勢爲大平和之會原第五之五原旣具而大平和之會乃成矣

務を執るの委員を選擧し列國間の紛議は總て此の委員會に於て之を處理し、若し命を奉ぜざる者あれば列國の兵馬を合して之を懲罰せんと欲するに在るなり而て此の論を唱る社中は、熱心を以て數年來各邦に往來し、大に同意者を募て之を實行せんと企てたりしが、此の事は言ふ可くして行はれ難き有樣なれば、是迄は各邦に容れらずして、其勢ひ甚だ微弱なりしに、今や稍く之を行ひ得んと欲するの形勢を生じたり、其の所以は他にあらず、此の社中に於て最も有名なるは安太隆と云へる人物なるが、是人は一兩年前より國人に推されて、哥侖共和國の政權を握るに至れり、故に平和主義を實行するが爲めに、列國に交るには幾分の便宜を得たりけり、而て又列國の形勢は讀者の詳知するが如く、斯波多は稍く其勢を損じて長く軍旅に苦み、雅典は方に勢を得たれども亦た連年の戰費に勝へず、且つ暗に齊武を猜忌し、以前に比すれば大に斯國を惡むの心を減じたり又齊武は覆滅を免れ得たれども、國力敝耗して國人休養を思ふ者尠からず、三强國已に此の如し、自餘小邦の大國に介し戰亂に苦む者に至て

は、其の平和を望むこと固より論なきのみ、況んや斯、雅の二國に次で大國と稱せらるゝ哥命の之を主張するに於てをや、安氏及び平和主義の社中が、其の目的を達するの時機至れりと悅びしも亦た理なきにあらざるなり、平和社中は時機に投じて頻に人を四方に派し、又覇權を執るの二强國斯波多、雅典には安氏自ら赴て、二國に事を用る國王及び諸名士に遊說せり、

總叙斯國之勢

是より先き斯人は海上の戰に連敗して、沿海の諸屬邦を失ふこと尠からず、且つ連年大兵を齊武に出せしも、未だ討滅の志を果さず、之が爲めに多く兵器糧食を失ひ、戰陣に慣れ兵馬を事とする有名の斯國も、數年前に比すれば、此頃は平和を冀ふもの多かりけり、又雅典は數年來漸く勢を得て海上の覇權を恢復したれども、國帑非常に空乏して、人民戰費の負擔に苦み、且つ齊人の漸く勃興するの勢あるを憂て好を斯人に修めんと欲し、海上にて舊時の覇威を回復し得たるの今日に於て和を講ぜば、其の名譽を損せず安寧を保ち得べきが故に、雅國に於ては平和說に傾く者殆ど國人の多數を占めたり、又中部に於て

總叙雅國之勢

齊武は二三年以來國內僅に小康なれども、屈强の同盟なりし雅典の歡を失ひ、加るに連年の戰に國力を疲弊せしめたれば、先見の明を備へ遠識あるの士は兎も角も、一般の人心は慨して平和說に傾くが如く、殊に諸名士の功名を妬む明寧陀等の一派は大に之を贊助せり、斯、雅、齊の三國斯の如くなる上は、他の諸屬國及び獨立の諸小邦は、素より强國に脅かされ干戈に從事するを苦む者のみなれば、此論に同意するは勿論なり、列國の形勢かくの如くなるは、是れぞ哥命の平和社中をして多年の宿望を達せしむべき時機なりし、哥命より派出せる遊說の使人は、到る處慨ね諸邦の贊助を得、又斯波多、雅典の二國も安氏に對し「現在の彊界を變ぜず此の儘に平和を保つに止らば同意を表すべき旨を返答せり二强國の議決する所既に斯の如くなる以上は、齊人も亦た之に同意を表せざるを得ざるに至れり、何となれば若し今日に至て齊武のみ獨り此の同盟を拒まば、列國に對して平和を破るの非難を得るのみならず、雅典及び自餘列國の同盟を失ひ、其勢ひ孤立せざるを得ず、若し孤立して外援

總叙齊國之勢

齊是主主故須此詳註一遍而孤立無外援云云數語暗爲隆具大役一冒筆氣自有所響注

なきに當り、再び斯人に來侵せられなば、又四五年以前の如く危急存亡の苦患を見るべければなり、然らば列國に對する虛名よりするも、其の國を護る實益よりするも、是度の平和論には是非共に同意を表せざるを得ざるなり、唯此度の會盟は、哥侖の中裁より成立して、專ら斯、雅二國の間に事を謀るの有樣あれば、斯、雅二國は如何樣にも合議して互に利益を分ち得べきならんが、自餘諸國の爲には其の結果の如何なるやは容易に判じ難けれども、斯る場合なれば、

大會之議定

兎角の異義に及ばず、齊人も亦た同意を表しける、かく希臘全土を擧げ大小の邦國悉く同意を表しければ、翌三百七十一年第一月に於て列國より各々三名の全權委員を派出し、愈々全土の大平和の大會議を開くことを決し、幾年の騷亂の後今や希臘全土の人民は將に大平無事の祥雲瑞日を見るに至らんとす、

大會之期定

然れども此の大會を開くべき場所のことに附て紛議を生じ、或は雅典に於てせんと欲するあり、或は斯波多に於てせんと欲するあり、或は全土の中央に於てせんと欲するありて意見區々なりしが、遂に斯波多の都に開くことに定りける、

大會之地定

先輿下回引一線使讀者懸想大會將何如結局

此度は希臘全土の大平和の會議と云ひ、列國委員の大會と云ひ、實に千歲未曾有の盛典なれば、雅典は勿論諸國輿に皆拔群の人物を撰で全權委員と爲し、之を斯都に派遣せんとす、齊武に對して斯國は仇讐の國なり、又雅典は近來齊國に不滿なるに、此度の大會は重もに斯雅二國の間に事を謀ると聞けば、大會議の席に於て如何なる不利の齊武に墜ち來らんも知る可らず、然れば此度の使命は尋常一樣の者にあらず、機に臨み變に應じ、國辱を得ず後害を貼こさず、沈着に列國の間に斡旋して事を全ふして歸るべき人物を要すれば、選擧の論紛々として、或は巴氏こそ然らんと說き、或は威氏こそ然らんと論じ、國人各々其の望む所の人物を擬せしが、衆望遂に威氏に歸しければ、氏を以て正使とし、勢氏加氏を以て副使とし、夫の苦樂を輿にせんと誓ひし慕知の同盟十二邦の委員等と輿に、翌三百七十一年第一月大會議の期日に先だち、斯波多の國都に發向せしむることに議決す、今や民政の恢復已に六年の戰亂を經て、始て此の大平和の幸福を見るを得たるなり、(平和の議起り列國兵を厭ふ二事は具、防、遇

氏等)

鋤雲云。國體世情離合變化之極。終現混同和平之兆。

學海云。本回爲雅、齊兩國失和發端。凡天下事有一利即有一害。久安則危。危極則安。見利慮害。居安思危。便能無事。不然危亡禍害立至矣。雅國戰艦能爲同盟屏障。防護外冠。及至糧乏資罄。勢不得不募之於盟邦。於是有齊國不肯一事。蓋兩國稍安。名私自營。意不相下。既失公平之心矣。雖雄辨屈人詭計脫禍。其豈能得久乎。彼哥倫、安太留輩。春秋時宋、向戌也。其論罷兵是矣。不知晉楚之爭。固不可以口舌平也。

鳴鶴云。此回。以雅典置主位。以齊武置賓位。其間駢列許多話頭。漸次說入三國〔斯、雅、齊〕鼎立之形勢。先叙雅、齊分立之由來。而及雅人畧西北沿海諸邦。齊人畧比隣諸邦事情。次叙哥倫之國勢。而後始及列國有厭兵之情。遂以惹起希臘全州之媾和一段結之。猶千澗萬溪縱横奔駛。而終歸一大壑。

第十四回　列國の英雄一堂に會す　齊使大會に舊典を爭ふ

以歲月日起筆也莊也重也是列國之大勢推變之機而爲一編之本回之樞軸綜采之氣力並萃在茲其灝灝噩噩視之從容大來小說何啻海之行潦讀者須着眼其大處高處用其心處其細處卑處

紀元前三百七十一年第一月廿日は、豫て定められたる希臘全土の大平和條約會議の當日なれば、希臘の南部巴本涅斯の七域、四十餘邦を始めとし、哥侖の地峽より以北中部の八域五十餘邦、及び北部の五域三十餘邦に至るまで、各其の選抜せる人物に大平和の條約調印の大權を授け、全權委員として、會合の期日に先だち之を斯都に發遣せり、故に第一月五日頃に至ては、列國の全權委員續々として羅胡の首府なる斯波多の國都に到着せり、(右大要具氏)

抑も此度の大會は、希臘全土の平和を定め、長く干戈を止めて太平を無窮に享んとするの企にて希臘建國以來空前絶後の大業なり、且は列國の總會と云ひ、其事甚だ重大なれば、諸國共に此の大會に於て其の國を辱かしめざるべしと信ずる一廉の人物を撰抜して派遣せざるものなく、此會に全權委員の任を帶る者は、實に非常の榮譽とも云ふべかりしなり、今雅典より到着せる委員は何人ぞ、其正使は著名の門族にして、政治家の稱を近來に現はしたる王徳、其の副使は加利及び彼の有名なる論士珂理杜朗にして、知珂の域内并に沿海の同盟十八

公會私觀之
別說得載然
近歲伯林之
會結局於英
獨二相私觀
其事容易
最爲奇

邦の委員悉く之に從へり、又哥命は此度大平和の發議者たれば、大會に關する百事を周旋するが爲めに、其の全權委員安太隆は、諸國の委員に先ち最初に斯都に到着せり、列國の委員大半斯都に着せし時、齊武の特命全權委員威波能も亦た副使勢應本、加倫と共に、慕知の同盟十二邦の委員を從へて斯波多の都に到着せり、(大要同上)

凡そ列國の間に於て、大事を決するの會議には、表面儀式の公會と私見の內會との二つあるものにて、其の表面なる會議は、大體既に定まりたる內會の議を公然決落するの儀式に過ぎず、其の眞に大事を謀るは多く內會私見の時に於てするものなり、諸國外交の有樣は古今通じて斯の如し、何となれば、公然たる會議の席にては、諸國の使臣皆打揃ひ、其國の位格を飾りて體面を有つことを主とするが故に、些細の事にても他國の前を耻て之を爭ひ、之が爲に其談判破裂に至ること尠なからず、且つ双方の情も亦た甚だ通じ難き患あればなり、然るに私見內議は之に反し、相互の間に於て體面を飾るにも及ばず、双方與に情

國力之不可
不養固然然
養之不可朝
夕而能選使
臣則異於此
一拜而進一
拜而退乃如
是爾其事容
易咄嗟而辨
是故國力未
茂而其國屈
者尙有可諉
而忍苟使臣
之選不精則
是不爲也非
不能也可
焉夫思

を通じて其の間に充分の掛け引を爲し得べく、其の議の整はざるとき、他國が立入て仲裁を爲すにも甚だ便利なればなり、故に列國の外交官たる者は、公然たる會合に於て、巧に諸國の前に其の利害を論辯するの肝要なるは勿論なれども、一二ケ國の私言內議の時に於て、巧に諸國の間を往來周旋し、內議を定着するも亦た必要の伎倆なり、されば此度の大會に於ても、重なる諸國の委員等は、大會議の當日前互ひに相往來し、當日の草案を內議することなるべし、

凡そ列國の交際に於て、第一に要用なるは其の本國の實力なり、又第二に要用なるは、使臣たる人物が各國の間に周旋して事を定むるの伎倆なり、若し其國力微弱にして振はざるときは、如何に才略あるの使臣と雖ども、列國の間に立て決して其意を貫くこと能はず、又其國力は如何に强盛なりとも、其の使臣たるものにして事を幹するの才略に乏しければ、自ら列國に疎斥せられて大事を誤るの恐れあり、然れども二者の中其の一有る者は、尙ほ或は他の一者なきを補ふことを得べしと雖ども、二者兩つながら之を有せざる者、豈に其の意を達

事皆專決於斯雅齊武拒盟之徵一也

安太隆來往于各國使臣之間議事一段似平平無他奇而後面公會動靜其勢已成於此蓋作者多少苦心多少得意若夫視以爲平平無他奇者眞咬不得菜根之徒也

するを得んや、

抑も今度の大會議は、素と哥侖の發議に出でし者なりとは云へ、其の實は斯波多、雅典兩國の承諾を以て之を執行するに至りしに過ぎざれば、其の表面には列國會議の名ありと雖ども、其の實は百事皆暗に斯、雅兩國の協議指揮に出るが如きの有樣あるも、亦た勢の止む可からざる者にて、畢竟は斯、雅二國の勢力が列國を壓するに因るなり、又斯波多、雅典兩國は長く隙を構へて覇を爭ひしに、今度始て和交を修むるに至りしことなれば、此度の太平和の成否は、一に此の二國の調和すると否とに懸れるものなり、然るに若し二國が直接に內議を開らかば、又如何なる大破裂を招くに至るやも測られざれば、哥侖の委員安氏は專ら兩國の間に往來し、双方の意見を取次ぎ、其の間を調和して百事を取纏むることに盡力せり、是を以て斯、雅兩國も一歩を枉て、其の意見粗ほ合同するに及びしとき、安氏は雅典の委員と斯波多の外務委員とを己の旅館に招請して始て之を面接せしめ、稍く爰に大平和盟約の箇條を內定するに至れり、而

斯雅最疎齊武齊武拒盟之徵二也

沈重人計事乃有若風

て其の盟約の大體は、雅典、斯波多の間に希臘の覇權を分つこと、又諸國の疆界を今日の儘に維持すること、斯波多は陸地の兵權を統べ、雅典は海上の兵權を統ること等なりし、(大要同上)

斯、雅兩國の間に於ては、私見內會斯の如く頻々なりしと雖ども、他の諸小國に對しては二國より內議する箇條の甚だ稀れなる中にも、齊武の如きは最も二國の爲に疎外せらるゝの有樣にて、是迄嘗て斯、雅の二國より重要の內議を受くることなかりしなり然るに、斯、雅二國の內議粗ほ整ふの後に於て、哥侖の委員安氏は、一日齊國の特命委員威氏の旅寓を訪ひ斯、雅二國が粗ほ同意せる內議の箇條を演べて齊國の意見を問ひしに、威氏は唯簡單に「列國の勢力をして均一ならしむる外には永久の平和を維持するの道なき」を返答せしのみにて、其の深意如何は知らざれども、別に斯、雅二國の同意せる箇條に不同意を唱ふることもなかりけり、又安氏は齊人が始めより此度の大業に不滿なるやを疑ひ、且つ兼てより威氏の遠識あることを聞き居たりしかば、公事の問答已に終るの

毎叙政治家揣摩之言輙卓論名說源源衝口而流出非胸羅成敗之機眼洞興廢之勢者能與之敬服敬服

後、更に打解けて世務を談じ此度の大平和に付威氏は如何に其の結果を洞察し居るやを問ひ、懇に教を受けんことを求めしかば、威氏は安氏に向ひ

希臘全土の大平和は希臘人民の望みなり、使君が大平和を謀るの厚意は、平和の朋友たる者皆之を謝せざる者なからん、使君夫れ之を努められよ、然れども天下の事本とより定數あり、之に順ふ者は成り、之に違ふ者は敗る、是れ亦た察せざる可らざるなり、凡そ人事の定數に於て、列國の大平和を得せしむべきの勢ひ二つあり、其の一は、列國の勢力相平均して毫も盛衰強弱の差異なきこと是れなり、實力相均ふして輕重なくんば、列國の交際始て道理を以て相規するを得べし、何となれば、道理は實力に勝たず、其の實力相均しからざる以上は、道理をして其の力を伸べしめんと欲すとも得べからず、然れども列國の勢力相均く、甲乙互に實力を以て相制すること容易ならずんば、理に於て直きもの常に他邦の助を得、理に於て曲れるもの常に他國に棄てられん、斯の如くして而て後、道理をして始めて列國の制馭者たら

列國無二勢齊武拒盟之徵三也

しむることを得べきなり、之を大平和を得べきの第一勢と云ふ、又其の次は、列國中に於て容易に他邦を壓倒すべき勢力拔群の大國あらば、又必ず全土に永久の大平和を與へ得べし、何となれば、強弱勝敗の勢既に定る以上は、弱は強に事へ、強は弱を憐み、因て以て爭鬪の禍根を絶ち得べければなり、之を大平和を得べきの第二勢と云ふ、試みに希臘今時の形勢を見られよ、若し列國の間に於て第一勢あらば則ち可なり、然れども全土の列國其の大小強弱の差等あること、未だ今日の如く甚だしきはあらざるなり、焉ぞ第一勢を望むべけんや、又假令ひ第一勢なくとも、第二勢だにあらば永久の大平和尙ほ或は望むべし、然れども斯、雅兩國は國勢方に均く互に相下らず、加るに貴國のあるなり、又敵邦あり、一大强國の勢力未だ他邦を壓倒する者あるを見ざるなり、然らば則ち第二勢も亦た望なき者に似たるにあらずや、然れども人世の事は變轉極りなし、豫じめ之を測る能はず、若し使君の盡力と列國の德義とに賴て此の大平和を永續するを得ば、敵邦の民亦た其福を蒙らん、

余儕駑鈍と雖ども此の名譽の大會に列するを得、豈使君と與に其の大成を期せざらんや、使君問ひあり、敢て隱すありて以て邇言を察するの令德を空くせしめず、使君幸に之を諒せよ

と答へければ、安氏は暫時默然として深思するが如くなりしが、暫くして又威氏に向ひ

貴國の人心は斯波多、雅典二國をして覇權を分たしむるを肯ぜらるべきや

と問ひければ、威氏は

事苟も敝邦の存亡に關せざる限りは、敝邦の人民豈細故の爲に危險を冒して此の大平和を破るを欲せんや、唯其事にして苟も敝邦の存亡に關するあらば、假令希臘全土を敵とするも亦た敢て一歩を枉げざらんとす、況んや斯波多、雅典をや、使君若し眞に大平和を求めんと欲せば、唯飽迄も諸國をして平等一樣の地位を保たしむるを努められよ、若し斯、雅二國をして特別の地位に立たしめば、其の成否尚ほ或は期し難き者あらんとす

平等之位最難齊武拒盟之徵四也

特筆大書雄嚴偉麗

と答へけり、安氏は尚ほ暫時懇話せる後深く威氏の厚意を謝し、成るべく其の意見に從ふを努めんと約し、暇を告て別れけり

紀元前三百七十一年第一月廿日、希臘列國の全權委員大にジムナピデアの殿堂に會す、此堂は其の位置正に斯波多國都の中央に在て國人の最も尊信畏敬する神廟なり、此會や希臘建國以來未曾有の大業と云ひ、殊に其の會地は久く列國に覇主たりし斯波多の國都と云ひ其の會場は斯波多に於て最も神聖なる殿堂と云ひ、此の會席に列する列國の委員等は、皆各國より特撰せる拔群の人物と云ひ、實に此の大會こそ一場の奇觀なりけれ、質樸なる國風とは云ひながら、此殿堂は斯波多人の最も尊敬する建物なれば、其會場內部の壯嚴は素より云ふ迄もなく、會場の中央に錦繡を以て裝飾せし大卓あるは、盟書誓紙其の他の書類を安置せんが爲めの用と知らる、而て列國の委員五百餘名之を圍環して着席し、威容嚴肅、會場整然として妄に聲氣を出だす者なかりけり、

會場の正面第一位には、英武の名を列國に轟かし全土をして震恐せしむるの

層層纍朶極力摸出其餘觀

勢威ある斯波多の老王亞世刺、其の齡ひ既に六十餘歳、頭には灰白の輕髮を戴けども、面色赭紅にして光澤あるは其の身體の極て健頑なるを知るべく、雙瞳烱々として光彩人を射り、勇膽豪邁列國を睥睨するの風采を以て坐を占め、其の傍には、斯波多の外交委員皮邊爾を始めとし、其の同盟屬邦イピデリウーム、ザレキス、ブラッシーテラプ、セラシア、アミクリー、ヘロー、ボー、ジヂウム、ヒガリア、ヒーリ、バランヂウム、イラー、シテラ、シーノボリ、メッサ、コリハシウム、コロン、ゴルチー、ヘリア、クリトル、テゼア、マンチニア、ヘネヲス等の二十四邦及び巴本涅斯の他の四域韋利、亞階、留吳、周季の幾十邦の全權委員、各其版圖人口の廣狹多少の位次を以て列席せり、又左側には、雅典の全權委員王德、加利、珂理杜朗の三士上位を占め、其の傍には、雅國の同盟屬邦ラシニウス、バノルム、ラウリニウム、エリウシス、エレウテリー、サラミー、コージナ、を始め、知珂及び東海沿岸十七邦の全權委員各位次を守て列席せり、又右側には、哥侖を始めとし、北部なる韋秘、伊留周、亞賀爾の

亞世刺威波能是本場兩魁故特地着色然一用濃染一用淡掃避板也

諸域及び中部に位する東朗吳、西朗吳、法斯、營登の諸域七十餘邦、中立獨立國の全權委員、各位次に從て列席せり、而て正面に反對せる一面には、溫容あれども威嚴を包める齊武の全權委員威波能其の上位を占め、其の傍には、慕知の域内なるアンテイドン、アウリス、デリユームコロニア、チーロニア、アスクラ、ヲルコメネスを始め、慕知の同盟十二邦の全權委員、威儀を正して着席せり、抑も去る三百七十八年、齊國の民主政恢復の年以來、此の大平和の大會に至るまで其の間七ケ年、列國の英雄名士各々其の國の爲に、或は兵馬を以て戰陣の間に武力を競ひ、或は術策を挾て列國の間に縱横の計を施し、動もすれば其の首級を獲て止まんと迄爭鬪せしに、圖らざりき、其の人々が一堂の内に會合して親しく辭を接する今日の如き場合あらんとは、是迄互に其名を聞くのみにて其人と死を以て相爭ひしも、嘗て其の面を知らざる人々多きに、今や積年の敵手等と其面を對するに至りし諸名士の心中は、果して如何ならんか、此の大會に列したる希臘百餘の邦國五百餘名の委員等が、最も其の眼目を注で熟

寫來衆目四
集威波能身
上何等舖張
何等精采豫
有此一夸揚
乃齊使爭盟
拒盟一段異
樣精神異樣
光彩猶名優
將登場先須
觀客同聲喝
采

妙在因以列
叙一堂好漢

視するの人物をば抑も誰とかする、長く覇權を握て列國に雄名を轟かせし斯波多の老王亞世刺ならんか、將た麻の如く紊亂せし社會を收拾して其の秩序を回復し以て靖難の大勳を奏したる名士雅典の全權委員珂理杜朗ならんか、或は人類の靜寧太平を計圖して斯く迄未曾有の大業を捗らしめたる哥侖の委員安氏ならんか、否々滿場衆員の最も屬目する所は、蕚爾たる一小邦を以て、七年を出でざるに勃興の勢を現らはし、内は民政を興立して人民の幸福を增し、外は孤立の有樣を以て覇國の兵を退け、今や速歩を以て雅、雅の二強國を凌駕せんと迄其國を振興せし希臘中部の一人傑、齊武の全權正使威氏の身上に在るなるべし、其の功を聞けば大畧遠圖あるに服し、其の人を見るに及では溫然寛厚なるに驚くならん、兎にも角にも此會は、一世の英雄を一堂に會せし空前絶後の奇觀なりき

各國委員の席既に定る、斯波多の外交委員皮氏先づ立て列國の委員に向ひ遠來の勞を辭せずして其國都に集臨するの厚意を謝す、暫くして哥侖の委員安氏席

を立ち、此の大會に臨みたる列國の全權委員の氏名を報告し、且會場の便宜の爲め、斯波多王亞世刺を以て假に會長の任を帶はしめんことを發言す、之れ蓋し列國委員の内議に於て已に打ち合はせ置たる事柄なり、故に滿場の委員皆之れに同意を表したり、安氏乃ち斯王に請て會長の席に就かしむ、是に於て亞王は其國の外交委員皮氏に命じ、兼て諸國との内議に決定し置たる全土大平和の條約の草案を提出して之を會席に朗讀せしむ

其の第一條に曰く

希臘列國は各々現時の彊域を以て限界とし以後互に侵犯することなかるべし

第二條に曰く

希臘列國は大小强弱に論なく總て獨立國の權利を有すべし

第三條に曰く

同盟屬邦を鎭壓するが爲め是迄戍兵を送り在る保護國は之を引揚げ被保護國に獨立の地位を與ふべし

第四條に曰く

陸地の兵權は斯波多之を統べ海上の兵權は雅典之を統べ以て此の條約に違背するの邦國を討罰すべし

第五條に曰く

斯波多、雅典が違約の邦國を討罰するの場合に於て之を助くるが爲め出兵するとせざるとは列國の隨意たるべし（條約の目は具氏に據る）

斯く朗讀し了て斯波多の外交委員其の席に復す、此の時哥侖の委員安氏先づ席を立ち

長く干戈を止て諸國の獨立を有たんが爲めに此の條約の必要なるを知る、哥侖の全權委員安太隆先づ此の草案に同意なることを表示すと述べにけり、次ぎに斯國の外交委員皮氏席を立て曰く

弱國を侵さず小國を憐むは大國の令德なるを知る、斯波多の外交委員皮邊爾此の草案に同意す

交起交贊離
奇錯落大會
光景如畫而
贊辭各有別
樣意思或揚
已或抑彼要
皆不過僅護
得其體面獨
齊使之言包
容雄偉氣呑
希臘前三國
皆至此所謂
淺之爲丈夫
也

雅典の使臣王德亦た席を立て曰く

希臘全土の平寧を得ざるものは强暴なる國人が常に小國を凌辱するに因る、雅典人民は他國の罪を既往に問ふを欲せず唯將來の平和を期望す、其の全權委員王德此の草案に同意す

と少しく既往の亡狀を非難するの語氣を雜へたり、雅典の副使珂理杜朗又席を立て曰く

希臘既往の騷亂は巴本涅斯の强國素より其の罪ありと雖ども平羅の强國も豈に亦た咎なしと云ふを得んや、唯應に與に將來を愼しむべきのみ、雅典の全權委員珂理杜朗此の平和の條約に同意す

と、次ぎに齊武の使臣威氏席を立て曰く

希臘全土の人民に平和の幸福を與へんが爲め齊武の全權委員威波能此の草案に同意を表す

と是より列國の委員各順次に立て草案に同意を表することを述ぶ、此に於て平

和の條約粗ぼ定まるに至らんとす、蓋し此の草案は、前日よりの内議に於て斯波多、雅典の二國は勿論其の他諸國の間に於て粗ぼ豫定せる者なりしかば、此の表面の會場に於ては何れも別に異存なきことゝ知られたり、然れども此の條約に從へば、列國平等の位地を得ること能はずして、斯波多、雅典二國の間に全土兵馬の大權を握り覇主の威を分たしむるが故に、此の二國に最親密なる同盟國を除き、地の獨立中立の諸國は皆な暗に不快を懷かざるにあらざれども、已に二強國の間に於て協議粗ぼ整ひしこと故今更ら之を爭ふの力なく、不本意ながらも其の命を奉ずるに至りし者なり、

平和條約の可決粗ぼ了りければ、乃ち又兼て定めし手續に從ひ、直ちに「向來違背せざるの盟」を爲す可しとて、斯王亞世剌より此の旨を列國の諸使に傳ふ、是に於て斯波多の外交委員皮氏先づ進て盟書を執り

斯波多の外交委員皮邊爾、斯波多の人民及び斯波多の同盟廿四邦の人民を代表して玆に大平和の條約を永遠に遵守することを盟ふ

烈風大雨將至山頭先見膚寸之雲

と述べ其の盟書に捺印せり、次で雅典の委員王 德立て盟書を執り

雅典の全權委員王 德今雅典人民を代表して玆に大平和の條約を永久に遵守せんことを盟ふ

と言ひ、其の盟書に捺印し了りし時、之に續て雅典の同盟十七邦の委員各席を立ち、皆な別々に此の條約を遵守する旨を盟ひ、各順次に捺印せり、(具氏に據る) 前きに斯人は其國と與に同盟諸國を代表せしに、今や雅典は其の國のみの盟を爲し、同盟國をして別々に盟を爲さしめしかば、右側に列席せる獨立諸國の委員等は、之を見て大に不審を生じ、心中に訝り思ひけるは、此の度の條約面に據り、若し大小を問はず悉く諸國に獨立の權利ありと爲す以上は斯波多は其の同盟廿四邦と分離し、各々別々に盟をなすべき筈なり、然るに斯波多は同盟國を代表して其盟を爲し、恰も一國の如く見做さしめんと欲したり、若し斯波多が斯く同盟國を代表して一國の如く裝ふ以上は、雅典も亦た其の同盟諸國を代表して一國の如く見做さしむべき筈なり、然るに今其の同盟國と別々に盟

衆目忽四集
齊使身上悸
絶急絶讀者
亦握兩把之
汗

一辭盟得毅
然其聲如春
雷斯王將奈
之何

ひをなすは何事ぞや、若し雅典が同盟國と別々に盟ひしを以て正しき處置なりとせば、斯波多が其の同盟國を代表したるは勢を賴むの暴行なり、若し斯波多の同盟國を代表するを以て至當なりとせば、雅典の使臣は何の恐るゝ所有て卑怯にも同盟國を代表するを見合せたるや、察する所之れも畢竟は斯波多が強威を賴むと雅典の怯弱なるとより二國の間に斯る差異を生ぜしなるべし、大平和を謀るの會議に於てさへ既に斯る横暴をなす者あり、此の會議も其行末は賴もしかるまじ、今の雅典の所業は是非もなし、此の次に盟を爲すべき順序に當れる齊武の委員は、如何に爲すやらん、斯人の如くすべきか將た雅人の如くならんかと、皆々片唾を呑で屬目せり、此の時齊武の全權委員直立して盟書を執り齊武の人民の全權委員威波能今齊武及び慕知十二邦の人民を代表して玆に大平和の條約を永遠に遵守せんことを盟ふ（具氏）

と明言したりける、雅典の委員は兼て盟の手續きをも内議せしものと見へ、今齊武の委員が慕知十二邦を代表し一國の如く盟ふを見るより、入らざることを

極忙中細挿
入各員意色
有須眉活動
之妙

先用委員不
用王極妙

一辭復得毅
然其聲如春
雷斯王將奈
之何斯王漸不能
堪先用委員不
用王極妙
舍己讓人斯
人暴慢描出
逼眞

爲すと云はぬ計り最と苦々敷き顔色を現はし、又右側なる獨立數十邦の委員等は能くも云ふたりと思ふ如き怡愉の有樣を現はし、會場の中暫時靜寂たりしが、正面なる斯王の傍に在りし斯波多の外交委員皮邊爾は遙に立て威氏に向ひ齊武の委員が盟ひし只今の言辭は錯誤に出るに非るか更に一應分明なる盟詞を請はん

と所望しける、此時威氏は又一層分明なる音聲を發し

齊武の全權委員威波能、齊武及び慕知十二邦の人民を代表して此の盟をなす者なり

と述べたりける、之を聞くより斯王亞世刺は其の傍なる外交委員皮邊爾に眼配せすると見へけるが、皮邊爾は忽ち聲を荒らゝげ

如何に齊武の全權委員、足下は其目前なる平和の條約を見るの明なきか、此の條約には大小强弱の論なく列國皆獨立の權利ありと大書せるにあらずや、何故に齊武の委員は獨り齊武人民のみを代表せずして慕知の十二邦まで

衆意又四注
齊使身上悖
絶急絶讀者
亦握兩把
汗

汨汨莽莽其
辯清亮其辭
藻麗

此處不直提
反詰語留之
後逸却閒閒
把舊典爭十閒

之を代表せんと欲するか、慕知の十二邦は何故に獨立の權利なきか、慕知の十二邦は何故に別々に盟を爲さゞるか、速に其理由の明答を與へられよ

と詞鋭く難詰せり、此の有樣を見るより、列國の委員等は、すは、大事出來せり、若し齊武の委員が强國斯波多と抗論せば、此のする必ず大なる禍を惹き起さん、左ればとて今更ら慕知十二邦を別々に盟はしめば齊武には此上もなき國辱ならん、進退與に谷りし齊武の委員は如何に此場を所置するやと、皆手に汗をぞ握りける、此時齊武の使臣威氏は蟲然として立上り

列國の全權委員、幸に齊武使人の言を聽け、昔し齊人始めて慕知に國せしより其の支派別れて十二と爲る、慕知の十二邦則ち是なり、故に慕知の十二邦は則ち齊武にして齊武は則ち十二邦なり、慕知の同體同盟は其の建國と共に生じ長く盡期あるべからず、昔し齊人が慕知の一邦弗拉太の捕虜を刑するに當てや、當時覇主たりし斯波多に請ふて立會裁判を開きしことあり、爾時斯波多の委員は慕知を以て齊武と一身同體の地とし、齊武に叛くは自國に叛く

二邦爲一體
波瀾曲折之
至

初目集中意
注終則只畏
怖而已衆員
動靜一次險
使一次極見
之危齊

者なりとて、囚虜を處するに叛逆の刑を以てせり、是の事たるや今を距ること僅に五十一年前のみ、請ふ之を斯波多政府の舊記に徵せよ、又昔しペルシア軍侵入の後、齊武の人民が慕知の舊同盟を結合するに當てや、當國斯波多は又故らに委員を派遣して其擧を奬勵し、爾時天下に向て慕知全州は永く一身同體のものたることを宣言したるにあらずや、舊時の斯波多人民が慕知同盟を認て一身同體と爲す事斯の如し今日の斯波多人民夫れ將た何の故を以て敝邦齊武を他の十二邦と割離せんと欲するか、慕知の十二邦が同體一國たること舊典故例已に斯の如し、齊武の委員が慕知の十二邦を代表するも亦た何の不可なることかあらん（威氏答辭の大要具氏）

と舊典を引き、故例に徵し、滔々たる懸河の雄辯を振て、斯國の外交委員を屈服せしかば、之を聞き居たる獨立諸邦の委員等は、一たびは釋然たるが如き愉快の心を生じ、又一たびは此辭の爲めに又もや斯波多の怒りを激して如何なる不幸の齊武に墮來せんかと危ぶむの畏怖心を生じけり、今の威氏の辯論を聞く

より、豪邁にして寡言なる斯王亞世刺も怒火忽ち心頭に爆發し、其の外交委員皮邊爾の掛合ひを手緩るしとや思ひけん、議長の席より突立上て大音を發し齊武の委員多言を要せず、唯慕知十二邦を代表するや、せざるやを一言せよ

("Speak plainly——will you, or will you not, leave to each of the Bocotian cities its separate autonomy." 具氏).

と叫びしかば、居常泰然として喜怒色に顯はれざる齊武の委員、忽ち凜然たる容貌を以て突立上り

斯波多王に問はん、斯波多は其の同盟二十四邦を代表するや、せざるやを明言せよ

("Will you leave each of the Laconian towns autonomy." 具氏)

と詰りしかば、豪爽なる斯王今は耐へ難くやありけん、炯々たる深眼を以て已に戰々たる列國の委員を睨め廻はし

如何に同盟列國の委員、斯くまで不敬無禮なる齊武の使臣を此儘席に列せし

斯王終不能堪恐絶駭絶之冒拉雜似火似錦

恐絶駭絶之言拉雜似火似錦反詰一語始終輙發方待斯王一嚇而放出緊殺痛殺奚尤覺舄舄

むることを得べきや、余は疾く彼等を逐ひ退けんことを欲するなり、諸委員の異議なきを知るが故に今自ら諸氏に代て齊武の委員に退席を命ぜん

齊武の委員疾く會席を退去せよ

と叫びけり、之を聞くより齊武の副使勢氏も亦た立上り（以上の問答具氏）

斯波多の亡狀斯の如し、齊武及び同盟十二邦の委員は素より將に會席を謝し去らんとす他人の指令を要せず

と云ひ終りて、齊武及び慕知十二邦の委員は不滿の顏色を帶び相伴て此の會席を退去せり、（齊使會を退くこと遇、勢、具、防氏）

之れを見たる獨立諸邦の委員等は、其の心齊武を憐むと雖ども、亦た益々斯波多の暴威に恐怖し、是れより後は只だ唯々として斯波多の命を奉ずるの外なかりけり、獨り雅典の委員は齊武の委員の所業の大人しからざるを咎め、己れ等の行爲に倣はざるを惡むの意あれば、今其の退席を命ぜられたるを當然なる罰の如くに思ふなるべし、又斯王は齊武の委員を逐ひ出せし後も、其の餘憤未だ

愈出愈暴寫斯王之暴即寫齊使之剛也終不脫十二邦以斯委員發端以齊副使結局輕重正相稱

胸中に散ぜざるは、平生に變れる怒色の容貌に現はゝを以て之を想像す可し、曩きには齊人が新興の小邦を以て屢々其の大兵に抗敵し、斯國の覇威を損ぜしむるあり、今は又列國の大會に於て、衆委員の面前に斯王を辱かしむるあり斯王斯人が齊人に對して恨み骨に入るも亦た無理ならぬことゝ察せらる、唯茲に氣の毒なるは哥侖の安氏にて、斯、齊二國の混雜には轉た其心を傷めけり、然ども假令ひ齊武の委員が會席を退去せしとて、斯波多、雅典の二強國が平和を實行する以上は、尚ほ希臘大半の平和を保ち得べければ、此の混雜の爲めに全く會議の効力を失ふと云へる程にもあらざる故、雅典、哥侖等の委員等は頻に斯王の怒を宥め、遂に平和の條約執行の委員を選び、諸國をして其の屬國に屯駐するの鎮兵を引揚げしむる等の事を管督せしむるに議決し、哥侖の安氏其の他六七名を以て之に任じ、此日の會は事無く散じける、此の會議は尚ほ兩三日打續て諸般の細事を議しけるが、斯、齊の爭の爲に全土の大平和をば成し得ざりしも、斯波多、雅典二國の間を調和するに於ては大に効能を有したりき、又

卓說冒乎

叱王拒盟的原由用威波能自述作者不着一贊辭太好太好

慕知十二邦の委員等は即夜斯都を出發し、夜を日に繼で本國を指して急ぎけり、(以上大要具氏)兼てより斯る事もあらんかと、期したることゝは云ひながら、慕知の同盟邦の委員中には、小憤を忍ばずして大事に及びしことを悔ひ、或は威氏を怨むが如き有樣ありしかば、威氏は懇に諸人を諭し

人世の事は極めて入組みて變化極りなきものなるに、其間に立ち常に利害を見て事を處せんと欲するとも徒に周章するのみにて其意を達し得べからざる者なり、唯何處迄も己の信ずる道義を守り苦樂利害を顧みざるこそ正人の本意なれ、縱令ひ會議席に於て我々の行爲が世人の爲めに非難せられ從て我々の身上に如何なる不幸の生ずるとも自ら顧て我國を辱しめざりしと信ずるときは尚ほ我々の心中に綽々として餘裕あるにあらずや、道を履み命に安じ利害の爲に渝らぬこそ英雄志士の本意なれ

とて、差して憂る景色も見へざれば、之に勵まされて他の人々も強て心を慰めけり、又斯波多は既に大會に於て雅典と和好を結び、齊武の同盟國なる一強國

末尾置險語使讀者更擔一憂怒濤驚浪必須這餘波聞之此書腹稿既成將下筆先從本回叙起一氣掃轉直至隆具之役乃復歸第一回而後前後續就蓋苟精力稍老則恐相副也不宜與題矣一篇二十五回特覺其屬出色也

を分離せし上は、齊武が會盟を退き其の以前の孤立の有樣に陷りしこそ幸なれ、今ま此の外援なき機會に乘じ大兵を擧て城下に臨み、平和を拒むの罪を鳴らして一擧に之を討滅し、數年の怨を散ぜんと、大會を終るや直に大兵を募りけり、齊武の國勢又孤立して岌々乎たるに至れり、

鋤雲云方希臘將混同之日忽生此一大葛藤使觀者思後圖如何其事其文變化無窮

中威氏守道義不顧苦樂利害一語足觀純正君子之操

學海云本回爲希臘平和大會齊國斥盟一事是本篇中一大文字有光彩有骨力豈啻史記鴻門會讀至威氏代慕知十二邦欲遵守盟約一節使人毛髮倒竪絶叫稱快而威氏坦然不動狀鬚眉活現比之舞陽擁盾入門龕鹵的光景相距何啻霄壤

威氏斥盟一言不是孟浪觸虎鬚蓋胸中自有一定之見識雅、斯兩國總統海陸二權已是不公平的然於未發會以前言之事涉揣摩恐爲哥侖諸子所調停既及盟約將成忽聞斯國代同盟廿四邦一言極不公平的乃乘機抗論斥之如霹靂一振萬物皆驚使諸邦使臣口雖不能言而竊是其說直節重於天下大信布於萬國快哉是

威氏之所豫謀也

鳴鶴云希臘全土媾和之事決不可行而作者不容易說破焉徐々寫出會盟之光景平々坦々媾和之大成如不可疑唯收一朵雲氣在威氏答安氏語中而猶軟筆叙去毫不顯鋒鋩僅着一句云衆目所注在威氏於此乎威氏未發一語出一色而讀者眼光自射在威氏及誓盟逐條漸將畢俄然捲起風雨來正是圖窮匕首見光景

又云作者於此回籠絡幾多英雄蒐之一場以和親好字面攪起一大戰場來筆端有神

蓋是作者最苦心最用意處

又云此回記事寫出國交眞態逼情入神不是二千年前舊史料的然今日列國之情態

又云威氏諭諸人一段正是正人君子安心立命之地

第十五回

斯人大に同盟列國の兵を擧ぐ

野戰を決して齊人存亡を賭す

齊武の諸名士は、始めより深く大會議の結果を疑ひ、此會より生ずるの大利は或は專ら斯波多、雅典の二國に歸して、自餘の諸邦は徒らに平和の空名を得る

隆具之役斯替齊興之大闕其文字雁行大平和之